

洋学文庫  
文庫 8  
B 80





譯編初稿大意

一 譯生 貞由 職事 を以て 曆局の官舎に滞在する事

已久く是歲辛未春三月一日日官 臣 高橋 景保

を召して

官府御藏和蘭「マイル」といふ書八巻以下發下

給ひ譯生 貞由 別に此編全部を和解譯

文して上る趣きよりの

嚴命を奉り 景保

その

命令と 貞由貞由傳ふ 貞由貞由謹んく其  
令旨を承け退くふれを并誦し熟思考究して  
従つて譯文の草案を起すこと三閱月于時頃  
仲夏中沆仙臺炭子

嚴命有り其醫員陪臣大槻茂質をして和蘭書籍

和解御用より後事せしむし其業ハ臣高橋景保

も属してふれ謀らへしこと

仰せ下し給ふことなり 茂質茂質謹んて其

命を奉し局中より來りこれを 景保景保も告す景保

其

内旨を傳へて即ち曰ふれ掌つて 貞由貞由

命せらるる所の言メール和解の加功を為す為し

この御事なりと 貞由貞由其大よ我力を得し事

感戴欣喜し尔後毎ねよ 茂質茂質と相俱ふ力を戮せ

益し其業を勉勵し 貞由貞由譯草を為して 茂質茂質

授く 茂質茂質ふ小讀み再び 貞由貞由會し原書を就

て再校参訂して漸く譯稿を為セリ但其事物或  
ハ他の類説を傍書して本説を明すの助けとなす  
ものもあつた

一蓋し本編全部の完博なる其業を卒るが如きは許  
多の年月を積じ居て依て或ハ三卷ありハ五  
卷其草稿卷を為し至れハ小代以て漸く  
御覽を呈上せんとしハ亦も毎卷一事一物各々是を讀  
免ハ臨時の功用有る事なるべし

一 卷首標題を全部中集録收入の提綱有り、これを譯を  
ふる即ち云々

此編ハ財用成利して生理を營為し民を以  
て専ら殷富ならしむるの諸良法及ハ衆庶を  
以て無病安寧を保全せしむる諸要方即ち凡  
百疾患の處そる諸藥方劑皆試用して實驗を  
取り者且兼て銷煉諸術及ハ諸家の秘方法を録  
示して是以て生民を以て高齡多壽を至らしむ

所の者なり書名を譯厚生諸事務、本然理學禮

式法度及諸抗術韻會と譯を施さ義子題せり  
其收入り所の諸作ハ

一牛 馬 羊 豕 鶏 鳩 蜜蜂 蠶の各

類を畜養生育する諸法且其等のとの患る所の諸病を治するの方法を載と常より意を用いて養ひたして後より小らの諸動物を以てせよ施專ら財用を阜し利益を得るの詳説

一 各類本然の理を究めて綱目餘弊を設け諸種の

家畜野獸及魚鳥を獵漁するの良便法

一 園庭を造築する諸法秘訣 本州物産學

耕稼墾開諸法 葡萄培養法按ふ是彼地方  
釀酒の一要品

樹園造法 異邦土產生植産品

右各品性味功能等を明弁す

一 蒸露罐諸器を以て薬精を蒸し取り諸方法

一 染料顔色諸法 石鹼造法 絹布織匠諸法 常

用燃土泥炭 諸石品造巧法

一家婦の内政須知諸要主務 食料調理及ハ醸酒  
方法 寒具捻頭を作る法及蜜煎諸法或ハ野菜  
を塩藏し冬月の設ける備の法

一 印華布

ひんそりんこ

按此よりハ筵縁の類形様種  
金銀縁にて作るもの有りハ二品

彼常服の  
ものなり 且これを洗濯して新製のものと如  
くそり法

一 牛羊代屠割とる時候定期 銘酒數品を造

醸とる諸法

一 賈人舶商等大交易を営利とるに用意ある

一 包き簡要法

一 諸藝術及理学并技巧簡辦法

一 劉工諸家 園丁花戸 葡萄作人用心

商客市人或ハ治務知事の高官君長部將の  
諸士其官を守り其職を務めて其功業を全し  
明断敏達に至るの正要須うとく其始を於て  
辨知しへとの諸件

共々十一件但是其大綱よりして細目の精審なる事  
も本編各條を讀みしむこれを得處し實は是れ其  
提綱なるべし  
右和解より所の原文唯名目のと挙げしが如きの  
此略記を各條に考へずして譯草を爲す所なり  
或ハ推考の誤りも有るべし惟是れ大  
約を示ししむる爲し譯しむるなり  
本書全編收入の諸件こ  
の略載總目を見らば亦思ひ半ハ過るなり

一編首より原書序言并より本説引據書目統計九百七十  
餘名あり各多くハ撰者の姓氏を以テ書名とす此數  
右を凡くも本編集  
成大全の書たるを記し當今本文の和解急なる所なり

ハ此二件の譯文後日を期す

本編原と貳冊を爲せし書なり其標題中を按じ  
撰者ハ元ト拂郎察國利昂諾十二鎮分府  
内「セント・ヒンセント」の地なる學校の大學  
生訓導師ありて「メー・ステル・ヌール・シラ・マイル」  
也稱する人なりハ名たり「シラ・マイル」ハ姓なり  
此れを南和蘭部内和蘭州南「ゴウグ」といふ地を  
置く羅甸學校の都講「ヤ・ニコッテ・ロキ・シキ」



ル及文學諸言の教諭總理「ラステル・ホフ」に稱  
せし兩士和蘭文を翻譯し其邦の文例を改訂し  
且兼て每章を増續廣益を為し亦諸圖式をも  
補綴して彼年曆一千七百四十三年 我寛保三年 和蘭  
國の名府 羅倫 及 亞模斯 的兒建模を於て書賈  
某等印行せし有り後亦 拂里新 蘭 州 の都  
府 レ トラ・フルワシテシの人 テ サルモワトシ  
名哲原書を就て大にこれを増廣補訂し遂に

全部七卷の書となせり其餘尚亦遺漏を  
もとのを漸く増續せんとして別々其首音より  
稿成起すとなし即ち其餘編首卷已に續刻を  
即本編八卷となしとの是なり 本國既十八卷を  
為せるとのを出せり  
と當在館の加比丹  
トーフ語れり

一此書原版二卷なりとの、題名を「ホイスホウテレ」  
キウールドブック」云 増續の本編八補正「  
改名の義上有り ホイスホウテ  
レ」トシ、辞を譯せしハ人各家職を務めしれり

の生産を計り修めらるるを云々といふ語義なりこれ  
小漢語を阿てハ厚生こそいふ義なり也一書經の大  
禹謨ハ正徳利用厚生惟和と見へる字面もて註ハ徳を  
正して以て下を率ひ用を利して以て財を阜し生を厚ふ  
して以て民を養ふ三つの善政なりといふ所謂善政なりと  
なりといふハ此語もむとあはるが如し即ち此書中編  
集らる所もこれく教へ示せるの事物もて衆民已げし  
むくの生理職業となるを事共を細くよ考へ詳し

録ハ後集の人漸く増補して公行せし不意なりといふ  
見ゆ「ワイルド・ブック」ハ即ちこれく事物の寄語の書  
といふ事なりこも猶我 國のいろは多きイテクハ各  
る節用集の如し一但節用集の如く各と字のかりを示  
せらふハあつては異とす各物毎とも悉皆逐一明  
細に詳載し直に取つて其事代行ハ其用を弁らふよ  
ふ小なりたれなり元を家を保つ者の生業となし  
各く其理を辨へ其事を熟しむるハ其家職は是なり

此は人倫氣形生植服食器財たるを類分けよハ為す  
 彼いろはの順序も從ひて雜集もなりこれ彼れも在て  
 ハ其時の臨にて用もなり其名物の字音より檢尋見  
 る為もなむ書なれハありこれ漢土の韻會韻府など  
 いろ寄りて説きつるも似く又異なり右つれが  
 品とて我いろはを解めハ暢解ありとの也知常の邦語ハ數  
 萬言われ吾國字ハ僅に二十六字之其數字をアベセと名

此れ猶我四十八字をイロハと呼つる如し其廿六字ハ

テ D ハ H エル L ペ P テ T エキス X

セ C ゲ G カ K ラ O エス S 左 W

ベ B エフ F イ J エン N エラ R ヘ V セイド Z

終

始  
 A エ E イ I エム M キウ Q エ U エイ Y

のこくよして横行なりアウリ始りてセイドと絡  
ら真草行の如き諸體夥くありこくよ出さるゝものハ  
シケレトフ・レフテルとて印板等亦用る體なり即本  
編にメール全部皆此體もて數字代連綴して言語を  
諧し言語文章をなせるなり アイル AAIL アイル AAILBEZIZIEN  
覆盆の類なり  
其事物の名稱首題此二十六字の順序を推して集  
纂せしなり節用集も韻府も似る所あれども

右ふとまなるれハ妥當せざるもあへん但韻より推し  
て聚め読むの意甚似るれハ原語の譯名を厚生韻  
府と題して可なり然れ共本編和解譯文を為さる  
のを見ればたゞ音寄のものあり故に別な義を轉  
し姑く新編の字を厚生の下に附録し厚生新編と題し  
しれ此編原本二巻なりしものを右ふとま初葉の名哲  
沙兒木篤とソふ人尚其人生民用を興れ簡便切實なる  
諸要法を漸く増廣新訂して七巻となす義も因れり

つゝ但是假しふ命を所として他日の明議を定むる  
賤生等

恭く惟ふ方今本編新譯の

明旨を以て萬民を廣濟し給ふべき深大厚徳の

御仁意偶々「ホイス」の語を以て此二字を題名の  
厚生之意義と切當附契するを以て此二字を題名の  
譯語を取れるなり。

一右の「ホイス」此書編集する所の事物「A」音より初り

乙字より終る故に開卷初條「ア」音字なり此ハ先づ首より「ア」

ハの祝有り此ハ鰻鱺魚なり次より「ア」ルベシトナリ

此ハ覆盆子なり其次より「ア」ニホルニナグヘード」を出

す是喘息病なり以下に此類なり又鰻鱺ハ氣形も屬し

覆盆子ハ生植も屬し又喘息ハ疾病も屬すなり

是より本編ハ其の分類を論ずる皆彼邦の字音の順

次より後集のたすものなり此ハかくあるなり此も前より

あつて用ゝ臨んで其事物の音より引きてこれを好む

ふふふふら書たりハなり今この成り所の和解書後を  
見せハ幾籠覆盆喘息とくれとくれととりてもはくぬ品  
類成並一記すか如きハ右よ舟はらぐことくたれハこよりて  
草榮一二冊を呈して

明旨を待ち奉りしと初是より字音の順次を後して  
これを譯とて事ハこゝろ

命を下し給ふ如くして唯其和解草存の際に草成  
より従ハ先ッ假りよ生植部畜獸部技巧部醫法藥劑部漢獵部

とふく如く概別を為し譯草重りてその某の部數葉一卷  
成爲すよまゝハ某部の第一第二三となして進呈を  
其區分類聚ハ總卷全備の日よ在らむととなり且此和常  
書の和解新いよ

嚴命を下し給ふ御趣意ハ行く弘く天下よ公けよ布り  
せよハ不學文盲なる野夫ニ職の輩よまゝよりて遍く此  
を讀みく能く此を理奪し其用を利せしめんとな  
れハ和解文法通俗平和を專らとて但て事業よ

りて中等より上の人の取扱ふ處の事殊々醫法藥劑の  
あつたはれし論なりとなく  
兩生 謹んでいふもつとさ

御真意を窺ひたり猶益く此業より後事し急ぐところなり

一譯説を讀むの士預の用意をたす事あり本編今國語  
和解を為すもの悉く皆彼説く所を我文の對譯をなして  
なして苟くも私意を加はず但共毎條説く所の諸法諸  
術の中良例便法和造未曾有の事ありて大に我補益なる  
處の事あり或ハ其説ハ事より上品よりあり我を比はれ

く却ら粗略疎漏なりて取らざるは又ハ精審を似て遠遠に  
なす事等ありんが必ず彼我過不及あり或ハ彼の  
不便を為し易く我より不便なりて施しつる事あり  
る一精粗と用不用と混雜する事ありつるは是國土萬  
里隔絶にして人情風俗方位の相違ありたり致し可  
り我前約便當として從來仕馴しいる風習ありて彼俗尚  
異風を也見ゆる事或ありし議々處の事ありてありし  
唯彼長より所よりて説と術との精義なる處の所を取ら

の用捨有る一

一本編収載せらる所の事件前々挙る標題譯言中の略記を如く

諸藝諸術中其事其物千種萬品なきハ 蒙生 字の譯者和漢の

此より有り来りあるゆゑの事このとも更ふ亦一と事

半ハ過く他一其知くところ所より強てこれを推し考一

譯況を作らんとすれハ或ハ誤る所もあらん戰慄恐懼の

憂り不堪ところ所より願くハ其況を讀むとあつた他の

其業を修め其事の熟するの専門家と對して會議せハ

必し正解をばせり又さるるこゝ熟する所より彼要旨を

必し得發明する事雀躍するも有る一 貞由 等彼山河獵

漁或ハ工巧測量法式の類種々事件の數々皆共々曾て兵に

事なく疎漏も又甚しき事ゆへに但醫事物産物の類

ハ 茂實 とお儀一 同社の醫家主事その學より從事して

頗る得る所有れハ方いなる齟齬も少くさうと思つて

返るなり

一草木金石等の諸藥品彼より有て此より無く或ハ未だ和漢の



有無を弁せし或ハこれハこれなること未定の物も少  
くハ且 <sup>養生</sup> 等物産の學を疎し強てこれを辨識する事と  
能くす嘗て聞見する所を以て同譯名を出て者ありとて  
ともある當否を知らず互て再考成得つ所なり是ハ  
此書の一要事として別な物産の學を寓する事成り  
所あり所あり實より是れ本草ハ一家の學にして醫  
藥といつとも容易なる兼ね及ぶ處ありは所なる事ハ  
已れ邦本草學ハ殊小難微にして性味互療の實滿和漢  
の未だ企及處ありは其の有りを其學の諸回編數部  
ハ翻譯新らしき成り天下生民の利益廣大なること  
一 本編中記載する所の醫療諸方藥品あり詳しきこと  
の許多なり但其藥品形状ハ即ち此書も詳載する  
の有りといへども彼ハもと四海の商舶を通する國なれ  
ば諸島良薬を四面八方の諸國より求つてこれを病に應用し  
且て諸方創成配合すと見ゆれば固より和漢の産する  
て尚ありこれを得ては所の者多し毎條譯說中疾

病の正回處方の良薬なりと知る事候得るもの多し  
と云ふも病の處方候良薬を撰<sup>求</sup>じ居るもの多し

い 本邦後末和薬秘の性來通商を絶す冀くハ

命ありて交易物件の内其諸品紙載せ來らんこと代企望也

これ

一本編の謬脱初りり偽文回字となりり亦も雅俗容易の

誤り多きもの取もてり他り辭を修めり改撰し雅馴となし

給んことハ高評あり有るし 聖生 等ヶ栄の何を兼及ふ

所あるは今此假字文の如きも其使用式法を學びしと安

そよ記を不なまは讀みかしくして誤も亦もの多し

他日讀者の命しと訂正候加へしと居らんこと仰ぐもの

一 此編開卷第一首條よりこれを讀み初るる七冊全巻の中

其條下くと考へ考へられハ其一條全く解ししこと事多し

志られとも各條られ候處のあつらんこと其事繁く其説

煩ししことありて其要候候ものこと 故小其事

亦遇ハハ本條の詳なり或ハ再考を爲つ進考を期すし

と記せり諸術或ハ藥品及製法等の類なり

一 諸圖符號原書ハ彼國字楷體のものを用ゆ今ハ或ハ換ふとい  
ろハ四十八字となせり

一 本編條下中身體内外具有諸品の名稱有レこれハ和漢立る所ト大  
小異なり 松田玄白 譯セテ解體新書 大槻玄澤 増訂校正セテ同

書 宇田川玄眞 和漢内景醫範提綱等譯定ル所ト從ふ

一 病名漫 リ 和漢名を充つ處 ウ 有者有リ藥學社中往々譯  
ル所の内外科諸書有リといハ マ 未ハ草稿ニ屬シテ

世小公けり セ 特 リ 故宇田川玄眞 内科撰要有リ同ト譯名を

取ルとの有リ瘡瘍の通名ハ 茂實 續譯癆醫新書中ト

取ルも有リ未 シ 此 レ 譯 シ 後 ノ 撰者 ト  
得て定めんとい

一 每條自註とあるものハ或ハ撰者ナルモノトの註 ル 所 ナ り  
唯按字依以テ レ 詳解 ス 之 ト 其 ハ 貞由 茂實 愚按 ナ り

一 編中每條の名物ハ間々羅甸名 ト 其 レ の レ 記 ス 羅甸 ト  
ハ 歐羅巴大洲 ハ 佛郎 等 の レ 係 ル 也 州中 通 ス  
一 世界の惣名ナリ

古來よりこの言はるるは諸國言語の本原なりと也故も其諸國  
詩類ハ多しと云ふは其の多しと云ふは此邦より何某と  
名を以て弘く通稱するとの多しこれハ此邦より何某と  
呼ぶとのハ羅甸舊の某何なりと示すたぬなり近くと  
れを尋ふれば

本邦より漢名和名とりあがらるる

一 和蘭ハ漢人の音譯字よりしてわらんじり此方よりハ  
何某地の名を用ひ原名ハ「オランダ」なり和蘭の音譯も

下略なりれども近時通稱多し其後ハ和蘭よりわらんじりの  
假名附をたせり

一 本編通篇各條も就て先づ素淺を為し略す大意を解  
し其の各事毎物多し其大體を約況し其事物の最  
主一と一實用は立つ處ハ緊要切近なる所を詳解する  
る辨ひしと見ゆ故も事ありり物よりりてハ疎漏なると  
識す處も事もゆらんり是皆其大要ハ一家くの書ゆゆ  
りて此編ハ專ら厚生利用の事をのり取り審み解す

明らるる羽（見）たりたり今く撰者の本意と知るるなり  
 一此書全編の和訳業を辭へハ毎巻條並通編に係るの綱領凡例  
 ハ首編より終る附記すし一當今譯文執筆の業なれば推して其  
 例を定むし一ハ他日編巻大成の代りてこれを修る也一此二  
 三と序例同次の如きも姑く假りて述する所あり且一今郊  
 功を發するの後譯或出入を修る一見先ツ兩生 會議して本條譯  
 文を記すの大意を呈察する所なり

文化八年辛未之秋  
 長崎和蘭譯官馬場 貞由  
 仙臺醫員 陪臣 大槻 茂實 謹識

諸鳥并花鳥類表

鷺

性 直示

鵲

アトリス・フリート

アルバトロス

プルク

アリコ

アニコカ

アニ

アニキケカペル

アイレントギイル

アウレリヤ

厚生新編 諸鳥 飛鳥類 其之一

奉

台命

馬場佐十郎 撰

大槻玄澤 校

鷲 和名 アーテラ

アルと名く

鷲 一名 アイレント 羅 旬 語 ありて アガイラ と

不敗種巴河中不在る所の鷲多中の最大なる  
ものなり嘴は鉤曲し舌は二つに分裂し頭毛は密  
多生に故は賢哲リンナイウス名として究理家  
是を鷹の類と併せ入る然れどもブリンスン  
人君は是と反して鷲とキイル 按は角鷹の類なり  
別種とし鷲もを十六種とする中十一種は欧  
巴の毎列 列 ありしなり  
鷲を尾旬種とせどもイラとソムの起由は類却  
て係り是を 按はアグイリスを係る  
イラの種は長くしるを かりま那ふを鼻又鼻鷲と  
或人曰鷲は諸種鷲の中より最も迅  
疾なりその且最も高く飛ぶるは名は 按は  
イラの種は長くしるを アグ  
知らる追考は 此鳥の眼力最も利き故  
この種の奇蹟を設け記すし ものなり即ち曰鷲  
を飛ぶこと甚迅疾なり且眼力最も利し故は  
遙る濠洲系輪の上も至る月形人目不見る一は  
去るふ 鷲 尚外中 の小奥山 中の の小虫 なる高所



より見獲るるなり。然る自く其子の眼力を祇む  
るは其眼を開きて日光を向ふをいふをト其  
光輝も堪へて眼眩きて合閉するなり或は其の  
首頸を低くして仰ぐ。瘡疾ありてそのあは  
瘡とりて獨逸都国人を驚かす尊称してアドレ  
ル又アデーラールと云ふ是アテルドム 按て高貴の  
の響なり  
轉語も其の義待多の王と云ふらん其の  
按て他書亦其王の名は然るは誤り驚かす  
ドイツ国の国号と云はれ此のあらと思ふ 獨逸都

国の市街及村邑も其前より帝王より免許せ  
得し工職の人々其家毎に驚かすを飼ふなり帝王の  
祀務も亦驚かすの是も十字架と地球の極なり  
なり一説は曰鷲をて身体疲衰せし時其強く力な  
極く高く其の上より昇り日輪の温熱を以て  
其眼目の曇り暗乏弱せしを療し而後下降して三度  
冷める浴し其れを以て已むる果て入浴其内熱も亦  
を療む此時可離鳥と云ふ勢屈をとりて其勢



居るの者ありき。以前の毛羽悉く脱去し、新羽  
 生じ始めしより、更に外に出るまで、種々怪状あり  
 但し旧羽を脱し、新羽生じて、巣を出て来る  
 時、他の諸鳥と差を殊に軽健あり、又勢い  
 激多の如く、わらわらと飛り、即古文の君り  
 少きも還るると、籠のちと、これ實なまなり  
 古の理学家家説のころ、種々の怪説を設け、  
 多し、まじり、今時の鳥の是を信せられたるのち、

之をよみ、一、軌を雄、雌、の巣、鳥餘程を持ち  
 来らば、雌、の卵を孵らし、能く、  
 即ち鳥餘程の條下も、才、説あり

性禀

第一、眼力最も利し、第二、都て皆、飼ひ馴らば  
 一、く、第三、食ひ、食ひ、甚しく、殆んと飽く  
 一、く、第四、久し、飢渴を堪ゆ、第五、息甚  
 臭し、第六、水、涙を吞む、即ち、搏て、

食ふ所の獸血ふくの食を消化せしむるは  
くろくくろくを性淫くろくくろくを欲くろくと最也

多く岩石上或は大木の上の巢より巢の形は皆  
平ありこ大なる樹枝を折交して十字の組に合せ  
床とありこの上の蒲の類を布くこのやきこのを  
二このこ成りこ雌多此方よりこ卵を産む  
亦類多四つより卵一つこ雛生れしこ  
或は羊鬼の類得る所このあひこ是を

養育し雛生長しこ食ふこ求むこの得る  
亦至多を老るるを遠くこ巢より隔りたる所より  
追ふこ外川  
ベルロニウスこ名曰或所のあひこ土俗等岩石上  
或は山中或は大木の上の巢の巢を見おこられ  
その他巢の内の雛鳥を捕て他所に移しこ其所  
よ結を付けこ然る時を其老これを見出しこ  
必し捕食の持こ来て其ふこ土人は是を誑

誘して奪ひ取り是より毎毎一氏族を奪り

その是れを博識なるプリセ<sup>人名</sup>の説は曰ケハ

ウダン<sup>地名</sup>の牧羊者も繁の巢を見出せば其巢は

此れは岩石の穿た小室を造り置き是より其子

移し居せしむ按は是亦前説の如く老翁

の持来りものを奪ひ取らん

是他處より移して其老翁の怒りを落して

其人の仇をとりしめし人々為らんとする老翁

は毎日出て山羊を野に放し其の餘の禽獸

を捕て其小室の巢に持ち帰り其子と與ふ牧羊

者其老翁の再か巢を出るを見ると直に拐をうけ

岩上を登て其持来り所の禽獸を奪ひ取り其

子も唯其中臍のものを與ふ儲り其子生長して自

ら飛去ることを得るや其子至る鎖を以て其子

を巢の中を結を付て置けり其時其老

翁尚餌を携来て其子を養ふに亦其持来り

物を奪ひ取れり其時又別の卵を産む頃

子至れを又老外また又巢を造りて又始の子は  
養ふてふたれをー牧羊者まけりの時小至て水を  
知らぬ依旧結を付け置手は鎖を解き放た  
れを或は又子餓死うるなり

鶯いと母は小獸こ小鳥こを食とそれとも飢餓うり時  
至水も大獸を取て喰ふは大方うる獸を取んと  
する時を又入て又羽翼を湿し而して砂石の  
所を又行て其砂石を翼うにうめしつて水

より鹿等の居る所を行て鹿の目も白く蔽うり  
搏ちて又砂石を擲り乍ち水を首とて入て進ん  
て攫うりての頸を扭断しそ巢も持行ふとなり又  
ノールドルホウリ地の内ヶスプルとよ所の人ポ  
トッピタン人名君と語て曰二歳の小兒裸體うり  
這む居る所は驚石音も来て又鉤爪を打ちな  
るの両親の見る所を又あけ忽ち攫うり取り虚空うり  
飛うて去まり両親を又驚うりて騒うきて終り搏うりて水

とも為人方なり。悲嘆然傷限りあり。一

按ふ然ハ衆多の内多ク最モ猛ク力つあり

本邦多クニ小兒を以て古来ニ取あり山

村多クハ偶々嬰兒を攫むことあり云々諸書に

見ハ又俗間傳等の話説モ亦明ク此物を締

拳銃所ニ和厚と云々説き及リ云々云々

要ハ此物ハ老鴛離鳥ノ哺と云々ハ其禽

獸を以て奪ふこと人衆の食料ニ充つる

作業を示さん。為る。此多ク和厚と云々

羽の利用。彼を以て祝儀と云々。又王治の

祝也云々

鵲 和柔アリスステルと云  
雁 旬是をヒカと云

此多ク恒ニ果実穀物獸肉魚肉等を食す故ニ

是を鵜鳥の類多クハ其形状ハ皆人の如ク知る如

ち。其色ハ白斑あり尾ハ長クして其端尖

巢を造る事不善。ユナリ即刺多き樹枝を以  
て四角を組む合せ可一方の孔を開き是を出  
入する所とせしめ卵は母の七八を産む其色白く  
さう黒斑なく早春は雛をとり人其高木の頂に造  
りたる巢の中の卵を奪ひ取ると何れも又新し  
卵を産んで是を雛とせし鷲鳥来ると其子に奪  
ひんとしんとあはれは老嚴し是を防ぐ然れ  
ども已も亦他の巢より取ると其子に奪ひ去る卵

を取て喰ふ諸鳥の内は鷗の巢を圍む防く  
る所は故に鵲よりとれり巢に入ると其卵を取  
拂郎察國の内は鵲の嗽きものを上食として貴  
む所なりこれに離の内は捕て飼ひ馴らしり  
覚ゆる時諸鳥の鳴音及人声等を應ずれば  
これに覚ゆるやうに性直なり物を盗むる癖を  
何もかも其傍に在るものを皆奪ひ取らるる  
こまを飼ふ人恒に篋の中に入きて出さず其子

鳥屋

アールス・フリート

雁甸語キリストクエス  
と云和厚の名未詳

アールス・フリートを水鳥なる鴉の類の如く頭を  
大ちく冠肉の如く歐羅巴の湖水及び海  
上よ住む大さ雞の如く半身以上は紫黒を  
ふまむ其下を白銀をちく頭上の大冠肉を  
二つふ裂きさうさめ上部を黒く西邊の如く下

の如く咽り至終所を薄き色をちくと頸の上部  
を薄赤をちくさうさめ中部をちく其を長く  
黒く羽をあると翼の羽毛乃公尾の色を黒白相  
混ちるを

アールバトロス

雁甸語エキエラニスと  
ソよ和厚の名未詳

此鳥は恒小亞弗利加之喜望峯多あり其の  
大サフレカツトホーゲル  
括よ名あり和の如く  
厚名可追考

頭より脊より至るまで微赤色より白く頸の下方は西脇に  
わい横より斑あり胸の下方は白く頸の下方は西脇に  
を黒より色の横斑あり右羽の茎を黒より然  
るより小く細く尾の茎を黒より鉛色より嘴  
は長し凡そ六寸ありその肌平滑なり滑黄  
をより鼻孔より下顎の上より此孔の状は鼻頭  
の方狭く奥のめは漸く廣く恰も漏斗の如し  
此鳥飛ゆると最も疾く又高く空中に翔る

アルソ 尾旬 羽トルガと云是  
亦和洋名未詳

水鳥より都て北海より多し時として不語厄和  
亜国より捕り察国の海岸より見るはと  
つとまらぬとも稀なり其身の大井鴨の如し  
して細く嘴の幅甚く廣くして端の方平より且  
尖らば脚も細く尻の方より偏り着きて  
よのふらふらと飛ぶ凡そ眞正よりなるもの見ゆ



故より先時々西脚<sup>（西脚）</sup>其の葛<sup>（葛）</sup>揺<sup>（揺）</sup>く<sup>（く）</sup>あ<sup>（あ）</sup>く<sup>（く）</sup>や<sup>（や）</sup>り<sup>（り）</sup>て<sup>（て）</sup>は  
脊の色を白く胸を白く咽喉<sup>（咽喉）</sup>の下の<sup>（下の）</sup>二<sup>（二）</sup>の<sup>（の）</sup>い<sup>（い）</sup>  
煤色<sup>（煤色）</sup>の<sup>（の）</sup>嘴<sup>（嘴）</sup>脚<sup>（脚）</sup>の<sup>（の）</sup>爪<sup>（爪）</sup>の<sup>（の）</sup>色<sup>（色）</sup>を<sup>（を）</sup>黒<sup>（黒）</sup>く<sup>（く）</sup>し<sup>（し）</sup>尾<sup>（尾）</sup>の<sup>（の）</sup>莖<sup>（莖）</sup>を<sup>（を）</sup>  
黒<sup>（黒）</sup>く<sup>（く）</sup>し<sup>（し）</sup>翼<sup>（翼）</sup>の<sup>（の）</sup>莖<sup>（莖）</sup>も<sup>（も）</sup>亦<sup>（亦）</sup>黒<sup>（黒）</sup>く<sup>（く）</sup>し<sup>（し）</sup>て<sup>（て）</sup>も<sup>（も）</sup>又<sup>（又）</sup>小<sup>（小）</sup>なる<sup>（なる）</sup>  
もの<sup>（もの）</sup>も<sup>（も）</sup>白<sup>（白）</sup>鳥<sup>（鳥）</sup>あ<sup>（あ）</sup>と<sup>（と）</sup>一<sup>（一）</sup>口<sup>（口）</sup>詰<sup>（詰）</sup>山<sup>（山）</sup>の<sup>（の）</sup>邊<sup>（邊）</sup>を<sup>（を）</sup>恒<sup>（恒）</sup>に<sup>（に）</sup>野<sup>（野）</sup>  
く<sup>（く）</sup>群<sup>（群）</sup>集<sup>（集）</sup>を<sup>（を）</sup>最<sup>（最）</sup>も<sup>（も）</sup>よ<sup>（よ）</sup>く<sup>（く）</sup>深<sup>（深）</sup>く<sup>（く）</sup>水<sup>（水）</sup>中<sup>（中）</sup>を<sup>（を）</sup>潜<sup>（潜）</sup>ふ<sup>（ふ）</sup>即<sup>（即）</sup>ち<sup>（ち）</sup>十<sup>（十）</sup>  
尋<sup>（尋）</sup>或<sup>（或）</sup>を<sup>（を）</sup>二十<sup>（二十）</sup>尋<sup>（尋）</sup>の<sup>（の）</sup>海<sup>（海）</sup>底<sup>（底）</sup>に<sup>（に）</sup>潜<sup>（潜）</sup>て<sup>（て）</sup>鱗<sup>（鱗）</sup>乃<sup>（乃）</sup>を<sup>（を）</sup>は<sup>（は）</sup>お<sup>（お）</sup>の<sup>（の）</sup>  
小<sup>（小）</sup>巢<sup>（巢）</sup>を<sup>（を）</sup>獲<sup>（獲）</sup>來<sup>（來）</sup>る<sup>（る）</sup>は<sup>（は）</sup>鳥<sup>（鳥）</sup>の<sup>（の）</sup>悔<sup>（悔）</sup>に<sup>（に）</sup>遊<sup>（遊）</sup>く<sup>（く）</sup>て<sup>（て）</sup>最<sup>（最）</sup>も<sup>（も）</sup>疾<sup>（疾）</sup>く<sup>（く）</sup>

凡<sup>（凡）</sup>の<sup>（の）</sup>鳥<sup>（鳥）</sup>も<sup>（も）</sup>一<sup>（一）</sup>つ<sup>（つ）</sup>も<sup>（も）</sup>又<sup>（又）</sup>遊<sup>（遊）</sup>く<sup>（く）</sup>て<sup>（て）</sup>も<sup>（も）</sup>疾<sup>（疾）</sup>き<sup>（き）</sup>く<sup>（く）</sup>も<sup>（も）</sup>あ<sup>（あ）</sup>ら<sup>（ら）</sup>ず  
て<sup>（て）</sup>是<sup>（是）</sup>は<sup>（は）</sup>勝<sup>（勝）</sup>れ<sup>（れ）</sup>ぬ<sup>（ぬ）</sup>もの<sup>（もの）</sup>な<sup>（な）</sup>ら<sup>（ら）</sup>ず<sup>（ず）</sup>一<sup>（一）</sup>高<sup>（高）</sup>く<sup>（く）</sup>聳<sup>（聳）</sup>た<sup>（た）</sup>る<sup>（る）</sup>岩<sup>（岩）</sup>窟<sup>（窟）</sup>  
の<sup>（の）</sup>方<sup>（方）</sup>に<sup>（に）</sup>巢<sup>（巢）</sup>を<sup>（を）</sup>造<sup>（造）</sup>り<sup>（り）</sup>卵<sup>（卵）</sup>の<sup>（の）</sup>産<sup>（産）</sup>む<sup>（む）</sup>もの<sup>（もの）</sup>大<sup>（大）</sup>に<sup>（に）</sup>亦<sup>（亦）</sup>卵<sup>（卵）</sup>乃<sup>（乃）</sup>  
か<sup>（か）</sup>し<sup>（し）</sup>の<sup>（の）</sup>色<sup>（色）</sup>を<sup>（を）</sup>白<sup>（白）</sup>く<sup>（く）</sup>し<sup>（し）</sup>て<sup>（て）</sup>至<sup>（至）</sup>班<sup>（班）</sup>あ<sup>（あ）</sup>と<sup>（と）</sup>又<sup>（又）</sup>老<sup>（老）</sup>を<sup>（を）</sup>等<sup>（等）</sup>交<sup>（交）</sup>く<sup>（く）</sup>  
來<sup>（來）</sup>て<sup>（て）</sup>此<sup>（此）</sup>を<sup>（を）</sup>堰<sup>（堰）</sup>め<sup>（め）</sup>脚<sup>（脚）</sup>を<sup>（を）</sup>よ<sup>（よ）</sup>の<sup>（の）</sup>土<sup>（土）</sup>地<sup>（地）</sup>の<sup>（の）</sup>人<sup>（人）</sup>を<sup>（を）</sup>皆<sup>（皆）</sup>こ<sup>（こ）</sup>の<sup>（の）</sup>卵<sup>（卵）</sup>を<sup>（を）</sup>  
取<sup>（取）</sup>て<sup>（て）</sup>食<sup>（食）</sup>ふ<sup>（ふ）</sup>味<sup>（味）</sup>甚<sup>（甚）</sup>に<sup>（に）</sup>よ<sup>（よ）</sup>し<sup>（し）</sup>然<sup>（然）</sup>も<sup>（も）</sup>此<sup>（此）</sup>卵<sup>（卵）</sup>を<sup>（を）</sup>毎<sup>（毎）</sup>に<sup>（に）</sup>嶮<sup>（嶮）</sup>岨<sup>（岨）</sup>  
多<sup>（多）</sup>に<sup>（に）</sup>高<sup>（高）</sup>巖<sup>（巖）</sup>の<sup>（の）</sup>内<sup>（内）</sup>に<sup>（に）</sup>在<sup>（在）</sup>る<sup>（る）</sup>を<sup>（を）</sup>登<sup>（登）</sup>り<sup>（り）</sup>て<sup>（て）</sup>此<sup>（此）</sup>を<sup>（を）</sup>得<sup>（得）</sup>ん<sup>（ん）</sup>よ<sup>（よ）</sup>を<sup>（を）</sup>  
甚<sup>（甚）</sup>に<sup>（に）</sup>危<sup>（危）</sup>く<sup>（く）</sup>し<sup>（し）</sup>て<sup>（て）</sup>容易<sup>（容易）</sup>に<sup>（に）</sup>得<sup>（得）</sup>ず<sup>（ず）</sup>は<sup>（は）</sup>此<sup>（此）</sup>鳥<sup>（鳥）</sup>の<sup>（の）</sup>内<sup>（内）</sup>に<sup>（に）</sup>鼻<sup>（鼻）</sup>

系ありさう食ひつゝ故に捕らぬを羽翼  
の潤色をさうよ因て人偶に捕へ飼養して唯美  
觀を備ふるの事

アジコ

和漢の名未  
詳可追考

此は鷺の一種なり其の鷺の類なり其の中より  
又大小の二種あり或は鷺の大かたなり或  
を鳩の大はなるなりともは全身鉛色なりて白

き斑点あり頭大なり其の一束の毛冠をいはるき眼  
目大なりてまゝ深く頭中に凹在する其の周りに細  
毛圍生し其の嘴も白色なり其の股も白色を生  
其脚の肌粗なり其の末端もを強くもちたる也  
爪はついで奪は獲る所の食物を攫む古廢の  
家宅埃掃むの櫛樹等の穴を巢ふ昼を肯く夜  
陰に及て眼を閉ぢたり其の故に終に飛行性  
を失ふ可合を求む其の類鷺なり此他の小鳥

を挿て食ふ也咽喉甚廣くくくく大なり故  
を吞む好て鳩の子故食ふ故と田舎より鳩を飼  
ふものも中より其小屋の戸口を塞ぎ且亦  
近よりさきより防くくく此鳥の肉を塩糸乃か  
脂氣甚く多し或人曰此鳥の頭腦より病を愈  
す又此鳥の血を取て干し乾し細末とす  
喘息病多用し其味もさきより

アニコニカ おぼろの名末  
種可追考

水鳥より西里子刻加の伯西兒より其の羽翼  
甚く義ちり大なり鴨のくくく嘴の長廿分一寸餘  
此上下一面より粗色を生し其の頸細くくく長  
く頭乃い項を黄色ちり脊の上部は紫黒色を  
くくく若くあり此のくくく都て皆潔白よりくくく  
光澤恰も白銀をくくく

ア二 和名未詳  
詳て追考

此鳥を テーキエーテレン 鳥の名本條の一種より  
多福なり

う鶉 鶉 鶉の鳥の  
同上

か 鶉の長廿九寸一寸厚廿九寸七分尾の長廿七寸全

身の羽毛を深碧色なりと云毎羽の縁端を濃

緑色を赤銅色を交へたり爪及び鶉を更

上、頸の本を粗なり長毛あり此鳥ハ植籬又ハ

小樹の繁茂を於所ハ巢ハ可巢都て皆大あり

時々一巢の内ハ五十羽餘も居たり於此ハあり

て皆その内ハ卵を孵つては肉食を以て居たり

とも羽翼の美を以て貴官の人を是を捕

て鶉 鶉 飼養ふ

アニチーケカペル 蛾蝶の一種ハ  
厚名ヲ追考

アニチーケカペル 蛾蝶の一種ハ  
厚名ヲ追考

の一種を全身細毛ありて翼平滑なり上

の方から羽の裏より白斑あり是の如く蛾蝶の  
化せしむ時を大に大指の如き<sup>カキ</sup>載り梅梨<sup>ウメ</sup>橙<sup>ダイダイ</sup>標  
山査子等の葉を食らふ最もよく柳葉を好む  
その脚十上り有り惣身あり毛を生じて黒色なり  
ナリく黄斑あり又所々赤色の点節有り是より  
黒色或は黄色の長毛を生じて此載り他の諸類の  
載りの中より又這い進み最も疾しなり人  
是より觸るとあざい忽ち止りたり樹葉より落

て其身を圓く屈縮せり皆七月の末より細  
を産み葉を造り雄載り色美しく敏捷  
なり是よりありてその雌載り怠惰なり其の  
鈍り是より既より蛾蝶と化し其後産めし所の卵を  
顕微鏡を以て見ると其の形よく粗<sup>コ</sup>楯<sup>コ</sup>の實より  
小なり

アローレントギイル  
蠶の類所由修ペレ  
ノポテリユス

此鳥の一名をエゲイプチセルリクハルリと云

ゆゑに日多国の鷲鳥の一種大サ鷲鳥の如く  
山鷹と云ふ義

嘴をギイル鷲の一種の嘴の如く又その色を黄色

のワスゆゑにを覆ふより頭の形三角に似て

上平より是より一束の細毛垂れおて恰も毛

髪の如く頭の上部分を羽毛直立する住一々の

中程に羽毛を肌つゞる又下の方より毛羽

あり脊腹及び西脇の羽とも平より是より及

して肩を圓く突おしなり翼を小しり脊より

みより唯西脇を覆ふ羽は翼の羽都より二十八尾

羽の大なるもの羽数十四より是の外の方より在り

指を膜を以て中指より生着し脚の毛羽より及

肌累として片立てり又末端より強き鉤爪

あり又雌雄大の羽色を異し即雄を多し也

灰色より頭及び肩を黒く是より白斑有り翼は

黒をよりわが内の方より在りものを又縁端は

をうと又貝嶋鳥と其身を白をうと翼を正色  
を少し班点ありを其外の方より顯き出たる羽を  
たわしも山班点なり其頭雄鳥より白をう  
此鳥を高く空に飛あしをう恒々地を近く  
止り居て貝食を求む又物の音に答へてこと  
かー其鳴く声最も烈しく殆んど驚怖を  
恒々カイロ 按ふ、泥日多國の地方よりありて多く  
見らば其禽獸の死肉を挿り食ふ

アウレリヤ 蛾蝶の一種和洋名可連名

是より大小の異類あり其大なるは其のしやうく蛾  
蝶と化をなすことあり其肌を色  
ありて黄條あり又其周身より枝をふりしきり  
其色の色を生む恒々槲栗柳等の葉を食ふ  
其の葉を醬金をうとよみ金色或は銀色の  
四点或は六点ありありこの蛾化する時を炎火を

の蜘蛛とちがはず、前翼ハ一方の縁端を著る  
しく、又一方の縁を著る、又其後翼よを著る  
班、腹の所ハ淡黄色なり、脊の方よ至てを  
黄色なり、この紺色の條班あり、又此小なり、類のみの  
を、又翼の色、及び班等、右より大なり、故の  
を、悉く是れを、備は編も、かくの如き、人間を、  
用、のみの、説く、この主と、著るを、案、略して、説  
く、好む、の、人、これを、詳し、知り、得んと、欲せ、て、セ、  
及、これ、セル、と、ソ、者、の、著、述、は、宜、しく、是、よ  
就、て、亦、お、編、く、

諸鳥 飛鳥類 卷之一終



厚生  
新編 生植部卷之一

ア、ルベシオン

性味功能

赤ア、ルベシオン膏 二方

蜜煎あそり法

沙糖漬あそり法

酒あ造り法 三方

ア、ルド・ベシイ・プラント

形状産地

功能

培ひ養生法

大実を求る法

蝕蟲を除く法

清涼剤として用るア、ルルド・ベシイ水を製

する法

葱

形状

土地

性味功能

培ひ養生法の法

ラエウドを製するの法

カラードを製するの法

厚生  
新編

生植部卷之一

奉

台命

和蘭譯官

馬場佐十郎譯

仙臺醫員

大槻玄澤

校

ア、ルベシ

羅旬語よりリベ  
シウム名

此のハ実赤白黒の三種有リ葉の形ハ全ク葡萄  
の似たり枝ハまげくやりのやまーたハレ

実の形ハ圓く亦婦とりの実も似たり粒ことの大けら  
胡椒粒のこし又土地ふりりてせきより大いなるも  
あり此物秋の頃又ハ早春も其嫩芽をこころ地も  
こー培ひ養ひをもちたるをふーといわよく地を  
らみてこもー又花畦を作り畦をこころい其間  
凡そ一尺をうりけく庵いこころをこころい根生  
て一年の後其思ふ處も移し植ゆへ大肥つく脆  
く粘りけ少なく少ー砂交りこころをふーこい新のこ

こく土地をきくしく植うらことのハ其実を結ふことい  
馬大なりを毎年古き牛馬の糞もて養ふ庵し但  
五六年を過くれハ実を結ふこ少く且其実もあ  
しくなるなり依る右よりふここ毎年こりめをこり  
てさし木こなり前のおこく培ひをこつ庵しその  
通りよをまハ其旧根ハ衰ゆるこりこも此新しよ  
さし木の継ぎ足し出来ふゆ不足より変なりあり  
叔盛も繁りてふき実を取らんこころハ毎年冬の内

り早春より其年の新芽を残して外の弱き枝古枝枯  
枝を切り去る。一む葉のまけきをも見計して切り  
透し能く風の通る様をなす。扨一初めの植る時  
木と木との間を遠くもなうして植む。扨一然れハ  
実大なりして味もせられてよ。是一つの秘傳なり  
又人々の好むに従ひその作りうらやまなりして蔓生よ  
にたり又直生よもろかるなりむもくもみの方をよ  
といふれハさうめのうら地を近く枝の分を弱きもの  
を切り取る。一かくそ水ハ自ら直生をらなり

。按る此「アールベリ」ハ古来覆盆なりといふ今日、  
ユーストといふ人の本草図説并に他の阿蘭陀本草  
の図を見るに相當せしむるものあり但一図説を  
考へて披し索めハ本邦にも其産有るをき  
品をらんり覆盆の類ハ阿蘭陀にて「アラームベシ  
イシ」名けり大小の二種有り「アラームボーセ」  
「シチベ」  
「シイン」  
と名るとしハ懸鉤子と見ゆるなり

此草の類ハ皆自ら野原に生ず人是を採りて園  
籬より移しうゆらなり花ハ五月開きて色ハ黄  
して又白くあり「ロスカム」として馬の毛をとりて洗櫛に似  
たり

性味功能

此七のハ寒燥兩性第二位とす

按し諸薬品の本性寒温等の位をよかりたる夏

阿蘭本草より詳なり

功能 夏月炎暑の日熱性の人是を食する時ハ身  
體を清涼し元氣を快活なりし功有り故  
に能く渴をこの食を進じ病人も與へても害なし  
膽熱及燔熱の類を劇しきものを清解し腐壞  
を止め吐瀉を治し又下血を止じ天行時疫壯  
熱をこの諸症何れもても用ひて効有り後よ出せる  
ゲレイとして膏よ作りたる方代與ふもむも同功  
を為すなり且膏よ作りたる方ハ又能く動悸代

鎮め嘔吐を治す

按る此功能醫家通用の文字の原語よく功當り  
る者を以て譯せり其諸言ハ別々通俗和解し  
醫師の見るともハ直々解るる支なり以下も皆こ  
の類なり

世の人々常に食後食所の物ハ赤く実の類の中  
あて莖ハ黄色くして実の味至て辛くはなり故に  
皆此れをあつひ取るなり

按る彼國の人々如此擇ひ采りて常食するものと  
白實のものハ氣味功能赤實の物と全く同しくして  
味ハ尚辛く唯形の見るとは故に人此れを貴するな

黒實のものとハ赤く熟せしむるものを摘み取り焼耐  
浸し或ハ杜松子酒梅より子ツサシの實を造りし酒なり製法本條を詳なりより  
更の一方有り此方ハ石淋及「ガラヘール」梅より腹中より自ら砂石の如き  
病の惣名なりよ用ひ至て功あるの要薬なり又此

草の葉又ハ嫩葉を取りて食物ヲ加ヘ食シ水ハ毒を  
下シ毒を解シ能ク其體を以テ壯健ナラシム

赤實アルベシニ膏

按ヨ膏と譯シタルハ原名「ゲレ井」ト云フ

梨子膏等の如ク煎シ以テタルトシ

名ナリ故ヨ膏と譯スリ 油ヲ以テ製シタル膏  
藥の膏ハ好クす

赤實アルベシニ

薯を去りて洗ひ  
洋山と云ふもの

三百八拾八分

沙糖

潔白ヨクして精好ナルもの

同

右先ツ沙糖を鍋ニ入れ煮溶シ其内「アルベシニ」を  
入ルルニ出ルル様ニ粉子ヲ以テおろシ暫クの間煮  
て火ヲ下シ水ヲ入ルルニ實をすくハ出シて盆ニ移シ其粉  
子ヲ以テ押し汁をさらし渣を去リ其汁をろし  
取リ又鍋ニ入ルル初メ鍋の内ニ残り有ル沙糖蜜  
子ナリト云ふものニ合和シ其浮む所の沫を掠め去  
リ亦此水ヲ文火ニかけ徐ク煮るとハ自ら膏ニ



なるなり其より程なりたわハ少しはくじよて  
くいとり盆を移しよきておき貯ふ也

日用ハ形色のよきよりハ量の多きをよりといハ沙  
糖ハ三百八拾八分よてアルベシーニの分量を四百八拾  
六分となし二味合して前の如く製をし但し前  
の法よりハちと久しく煮るへし却て美ハ  
膏出来たりなり！功能ハ前の一味の所よ出す  
り如し

何よても紅色よ作る蜜漬の内よ此膏を厚し一分大  
はシユカトシといハ大錢銀十文錢程のの程よ入き置け  
ハ其蜜漬何よよりハ徴を生そる事なく久しく  
保つなり

又法

アルベシーニ四百八拾六分を取り蒸すをより取り  
去り陶器よ入き柄子よておしけぬし木めん切よく  
其汁をよ取りそ水たり其白の沙糖三百八拾

ハ又暫時煮てこかしく此内も右の汁を入き泡をよ  
く去り膏となるのよき母こを得るまで煮るなり  
これ亦膏も作るの一法なり但し沙糖ハ格別上品を  
あつじもも及もふいこも上白を用ゆれハ其膏の色  
をまきこりてうらハしく又味もまきこりてうら  
なり

又法

アールベシオン 四百八拾奴

フラワームポーセン 懸鉤子の類 九拾六奴

右共よ軒き交せ前の法の如くも製し  
ムポーセンの香味ハ口中もみちて甚  
り少しく香橙の花を加るともよ

赤實アールベシオンを蜜漬するの法

上品赤實アールベシオンを多し  
去りて三百八拾四奴先つ其内九拾六奴を取りてつ  
し其汁を絞り取りし別も沙糖三百八十四奴を

溶して泡を去り其内も此絞り汁と残りの二百八  
拾八匁の「ア、ルベシ」を加へ時久しく煮て水より  
火よりおろし上より浮じ雨の泡沫を除き水を冷す  
扨てさめて後又火あかけその煎し合せし砂糖蜜  
の能き程より濃くあらまて煮るしこれにて蜜漬  
ふたより多くなり

右のこく汁を絞る皆生のまゝよて砂糖蜜よりこ  
むもよう然れども出来あがり色美くし故よ

前の製法を本方と分すなり

・ 赤實「ア、ルベシ」を砂糖漬するの法

上品の「ア、ルベシ」枝梢を連枝折りを採り集め別あ  
採る物よて

砂糖をこめて泡を去り其内へ右小枝つきの「ア、  
ルベシ」を入き暫く煮て火よりおろし冷して  
又火あかけ少の間煮てそより木匠より銅網網  
をとりたる物の上より砂糖の汁を滴し去り  
て又其「ア、ルベシ」平めなら銅物の上より

別な砂糖の粉をぬりつけ其粉子のまじり火のゆる  
き竈こゝろに造りたるものこゝろの如く入まじり焙り乾かす其一面  
乾うハ又こゝろを上へ下へかへしてこゝろの粉を  
ぬりつけ再び前のまじりて十分乾かす尚  
其上暫くぬれを細めのせうりき火をあぶりまよ  
り清き器に入れ湿氣なき所をぬりつけて貯めし

ア、ルベシ、ンにて酒を造るの法

赤実「ア、ルベシ、ン」の絞り汁一斗をよま白沙糖一貫

九百二十拾丸を加へ桶に入れそれより少くも塩氣な  
き清水をよみ程見計ひ加へ能くかき回し四七日五七  
日の間毎朝泡のたつ程かきまらせり包し如此して十  
分泡のうみ上るまで別の器を硫黄の煙よめて  
らへば其内を右のよみし所をよみ入れて入れ氣の  
よれざる様よめてんを五六七日あつり置き其日  
數を過すハむしとぬのどくりよ納り貯めし

又法

赤実「アールベシー」の汁一斗程を「ブフォームボーセン」の  
絞り汁五合程清水一斗五升程沙糖二百九十八匁右共  
を合し鍋に入れ暫くの間煮て上を浮じ泡を多く  
く取り去り而して後清らうなる桶に移してさ  
まし又これを別の器に入れ傾け其口を固くし九月  
の末頃までまつの置きしるれうり硝子のとくりま  
仕つけ納め貯めし

又法

赤実「アールベシー」葉と枝梢を洗除き去り乾百五十八  
匁を取りて清水を等分を加し鍋に入れ蓋をして  
沸きあうまで煮ししそれを「アールベシー」を  
取り出し汁を去りすいのち煮てこし其汁を沙  
糖百九拾二匁を入れかきませまより桶に移し入れ  
三七日四七日の間置きして前よりふこしく硫黄を以て  
薫へし別の清き器に移し又二七日三七日の間を  
つめ置きして其後これをとくり分け入らるるかく

此ハ至て味よく色も赤き酒となり又白き酒を造  
らんと思ひ此法もて白実「ア・ルベシ」を用ゆ  
也

ア・ルド・ベシイプラント 羅白語よりてハア  
ラガリアと名く

草の名なり「ド・ニユース」といふ人の本草図説  
を按る此草二種有り其第一種を「ゲネ  
チ・ア・ルド・ベシイ」と名く「あくよ」説く物

即ちこれなり図を見らば和漢の有無未  
詳あり「あくよ」のなり図説を考へ  
披ヒ求むたし薬草なり蛇ヘビ莓の本種と見  
るなり其第二種ハ「ア・ニ・テ・レ・エ・ン・フ・シ・ム・デ」  
ア・ルド・ベシイと名く其図を見らば  
ハ全く蛇莓なりけ品ハ 本邦何れの地  
も産むるものなり彼國よてハ却て此を  
別種異品と名せり漢土よりハ蛇莓ハ本

條の説けらことし功能あるものありあ  
て毒ある草となせり

此草ハ根より直ちの莖を抽き莖より葉を生して  
地を蔓り生えらなり葉の形ハ狼牙 和蘭名て「ヘ  
イト」名く  
イフヒニゲルコ  
和名ミツモト あり似く大きく周邊に鋸歯あり一莖  
の三葉を生し五瓣の白き花を開く実の形ハ  
圓きあり卵圓なるあり色ハ白く赤く間々  
又白色なるもあり其葉ハ短くして肌理粗く根

ハ細くして數多の纖根附くなり  
此草獨逸都國拂郎察國並に和蘭の諸州丘陵の  
中の樹蔭に生え三四月に花を開き五六月に至る  
実熟せらなり

功能

逆上強き人面部赤色を為し此実の絞汁を  
けけ能く愈す又兼て面疹をも治し赤眼を  
除くなり或ハ癩病の班點を為し瘡癩を為し

のを治す 葉根共の煎して毎朝四五日の間頻服を  
れハ黄疽を治し婦人月水を通し帯下及赤痢を  
止じ又此水を用く漱く時ハ口中を清涼ましく  
齒及ハ齦を固め兼て「シニギンゲ」胃寒傷冷毒と譯  
せらるの病本條より詳  
なりを治す又隻月暑熱の日此実を服食して暑氣  
を避く甚良なり但過食を禁す其性の冷なるを  
のゆへ却て害を生ずる故なり此を食するは種  
々の製あり或ハ麥餅和蘭人の  
常食なりと共に食し或ハ

枸櫞汁をとりけ食しを服する毎に沙糖少くを加  
へて佳なり但此酸もやうんの汁をかけるものハ内を  
涼め冷みこき甚しくれハ斟酌し此実を葡萄酒  
中に入れて食するハ害をなすこと少く且味よし  
此実を用て酒及舍利別製法の名本  
條より詳なりと名を其製法  
ハ覆盆子もて製する法のことくし又「ブライムボース」  
草の名本條  
より詳なりを以て製する法のことくし好き酢を  
製する「ブライムボース」の本條も於て弁おし



製煉家此葉根或ハ花実の中各其意よ任せし蒸露  
罐の上せし露水を取り病よ施すとの有り其水ハ性  
極めて涼なり外よりほけて能く皮膚の諸斑點  
を去る

培養法

此草のほくり様ハ甚易き蔓なり先ツ畦をたて一  
尺をくりほく間を施して穴をわり置き毎年  
發生する所の嫩芽を切りて其穴よ一二本つ挿

又外の蔬菜を穴のま 時候ハ四五月の中暑氣  
をりま植ふ

ふ向ふの前をすし或ハ又秋七八月の中よても  
うむ雨の日曇りたる日候待らて植ふとすし  
こい

うく盛長繁茂せしつんと思つ土の肥つ塊りな  
き所をえくふ池一又砂土を回く腐りたる馬糞を  
まし和しつち所を植ふハむし堅くかしまり  
たふ土を植ふとのハ実入りふららハ亦其数も少

きたりて土地湿り氣程能くありて少く産  
あつた所を植るを良しと思ひ必ず炎日あつたこと  
なす

此物を植る畠の内も又別の物も植る利を得ん  
と思つたあつたを植る間くも葱或ハ蒿<sup>ちやう</sup>菅の  
類何れでも外の菜蔬を添へ植る處も但其畠  
の中も自ら生る雑草ハ悉く取り除く處も右  
れごとくしてハ其利を一所も得る変なれども此

物の出来よろしき哉とてんご欲をうとのハ外の  
菜類を添へ植ることなす唯右もとりふあつた自  
生の雑草を能く取り去る一斯のよきとて  
を専らそのハ大なる草も益き有り而して毎度  
其萌生する所の嫩芽をも取り取り取るをばとて  
種子を蒔きてゆくんと思つて春秋の中別も狭き苗  
床を作り其内も種を蒔き皆萌して生長せば翌年  
ふりとり前のあつた畠も移して植る處も然れ

こも種をまきして作るよりハ芽をこもして作るより生長  
勝るなりハ種をて作るとの少し又此種をとり得よ  
ハより熟したる実仁をとりて水を盛りしし器  
を入れ能くこれを洗ふ危し但し種子ハ至て細  
うよ色黄みして附着せり故よこれを洗ふとまハ皆  
水中に落つこれをとりのめ乾して收め貯ふるなり  
花の開く頃若し數日快晴よて湿氣たより或ハ氣  
候寒冷たるとまハ其結ぶ所の実至て少し其頃

湿氣ぬかりしを暖和るハ甚し多し実を結ぶ若  
し花開く頃晴天はくまて雨露の潤ひ少し時ハ朝夕  
の内噴水壺和蘭名て「ガイ  
トル」と名くを以て水を澆き露す危  
し但し日中よそくくるとハ却く何  
是を養ふよ意をばく危し夏多し第一ハ數日晴天  
よりして湿氣薄し時ハ水をそくいて潤きし第二ハ  
幹ことよ其大なる枝二つ三つ伐残して餘の小枝ハ切り  
去らへし第三ハ下し枝の内早く生しよある実を僅二

つ三つ残して其外は着きたる実ハ皆取り去る  
又數多の枝は着くも花並は後れく開く花をも皆  
折りて除く也これハおろしたる花は実を結ぶと  
少なく又其実の熟むることなかり之特寂初は  
生しむもその甚く能く熟むるなり斯のこころ心  
をつけておけいの花と取り去るとは右のこころ其  
實甚く大なりして能く充実す此編の中別は諸草  
の早く実を生せしむる法を載せしむ又好事の人の

此物実の紅白ありて二種を培養す一兩種とも  
ふ其種はけの富を分てり扱今年四月は植むもの  
翌年夏至は甚く能く実なり扱て二年は盛なる  
実のりて其後ハ年を重なるに従ひて実のり減少  
するものなり故に二三年めは必ず富を多く移し  
植ゆし都つて南向或ハ東の方を植たるもの実の  
るふとむもやうく四月の末は熟するなり北向を植  
るものにはぬる熟をらすと遅し

実の種子の別あるを以て草たるも亦其類の差別あることを知るべし先づ大抵四種の分つ其一ハ白実を生じし者其二ハ形ら大いなる紅実を生じし者其三ハ所謂「カプロンス」梅の僧官の冠の帽子の名と名する者其四ハ形小なり紅実を生じし一名「ウイレデ・ア・ルド・ベシ」と呼ぶものなり梅の「ウイレデ」ハ野生又異品ともいふ義なりハ初めは「ア・レ・ム・テ・ア・ルド」草の書よて後考を期す也右數種の匠々りついでハ前の記をのこし

羨慚ありして好実をこり得んと思つ草ことよ一つの細き漆木建てこれハ筵をまっし付けて其草のまわりを圍ふ也此草ハ莖も枝も木のつゝ地も蔓延をこのなる故動も此ハ其好実を蝸牛蟻蜂蝦蟇等来りて喰ふ其有れハこれを預防せん為なり

植付く五六年も経つと土ハ又別々新々製し改じ也し改めしとよめて其地を移すべしついで也一十年久

しく同一土に植へ置くときハ実のり少く且実も  
小なりて味もろろしく毎年嚴寒なる向小前年  
いづれハ其畠もよくありらむる古きあやし成  
少し布く色し又其葉の畠の外より蔓りたる  
ものハよく取り去るし如斯くハ生るる處  
の實皆自ら上好なり

此れを植ゆるの地ハ砂交りの所を良とす故に此  
等の蔓る意を用る葦ハ必ず砂交りの土を擇んで  
種をこれに植つけしむりたる土の有る所ハ避る  
なり

季も後れて七月も此実を得んと思ひ最も早く  
開きしむら花のいもいその実成結ハよく花もよく  
こ水を折り取るし新くそとよハ其後も開く花  
よりして大抵七月頃も至り後れく実を結ふな  
り

大実を求るの法

砂交りの畠地を擇ぶに代りて土地を製するの  
良法あり鋸屑おがくずを九箇月或ハ一年程置き十分腐し  
たるを加ふ一其法ハ右の腐りより鋸屑三分の二四  
牛糞と鬆土とを合せりとの三分の一と和しとの  
て早春の内其畠を布き植ゆれば美吉なりて大い  
なる実績結ぶなり

蝕蟲を除くの法

此草の大敵と云ふものハ一種の色白き大蟲なり

此草四五五月より至此草を蝕いりて其葉は  
自ら枯らくなり 此蟲ハよく這ひ出て此枝より彼  
枝に移るもの故甚し見つけ易しよつて其葉は出  
頃をうらひ巨細よきんこして殺し除く也

清涼剤を用ふアルドベシイ水アルドベシイを製するの法

此草の実九十六匁を取り清水一竹の内を浸し其水  
の内より搗きたくらうし沙糖四拾匁を加へ別な栲  
櫨一箇を取りて一頭を切りて右の内より此汁を絞

リ入れ和しつゝの自註右の製方たとハ一斤の液汁よして其ぶちやくん香氣別して強ま  
とのちうハ一つの半 是を暫く沈めて後綿布よて濾し  
分の汁をかふハとよハ好き味の清涼劑を得るなり

葱

和蘭「アユインヌ」又「シイペン」と名く  
羅甸語よて「セパ」と名く

葱ハ葉圓く内空よして末尖れり長ハ尺余よ至  
ら其中より莖を抽く是亦形ち圓くして内ハ空な  
り其本太く末よ至りて漸く細く長ハ三尺余其

端よ花叢有り花ハ色白く或ハ紫色よして多く簇  
る後実を結ぶ其内よ黒色を帯く圓形の種子あり  
根の形ハ圓く葉本根上ゆゑ扁平なり或ハ白或ハ赤  
色の皮重祢裏めり其香あつて臭氣甚しこれを  
断りて其氣目よあつてハ人涙涕を流さよ至る  
世人この白根を指して「アユイン」即葱とつふ赤白の  
二種あり白色の者味佳し

土地



此物をつく菜園よけくも尤肥く土地を擇  
み居し

性味功能

葱ハ賤し食物の内とて小とも至り性の良き  
物なり新しき葱ハ蜜をつめて空腹の時常小  
食を小ハ能く人をして壯健なす又乾し  
る物或ハ煮しる物ハ生より勝り能く身体健  
ふとの功あり又これを蜜煎し製しる物ハ乾

しる物より功あり但し乾しる物ハ蒸し  
小勝れり如此より製して食料となす  
葱汁毛髪のおけりも或再む生す又眼目の汚穢を  
なす悪瘡膿腫を洗淨し或ハ顔面及其他部  
を發したる白斑を治す

毒蛇及蝮蛇其餘毒蟲を蝥したる傷處を葱白を食  
塩少しをくりを加つて拵し和しるを塗れ能く其毒  
を吸出して除き去るこれ毎に驗し法なり

水腫の初發は葱白と小茴香の二味を煎し服せ  
れハ必ず効あり又剉葱を食ハ能く腦を清め  
又此物と雞の脂と代和ハ物ハ凍瘡を治す即ちこ  
れを棉布の攤く其痛む處に付れハ能く痛を去  
るなり又鼻衄のハこれを醋の杵き交せて綿撒絲の  
浸し鼻孔にさしとさハ乍ら止む  
冰糖或ハ油或ハ酢を以て煮く物を食られハ咳  
嗽を治し并に喘息病よし又葱の心を抜き出

其中管よコメイン梅子シムラをつれ填実し此れ  
を熱灰の中に煨しとなり暫くありて取り出し其  
汁をちりり耳に入れハ耳聾及耳鳴を治す又葱  
の外皮を熱灰の中に蒸やしし物を薑薑油  
或ハ月桂子油を取りて此れを湿し偏頭痛を為す者  
其痛む方の耳の中にさすとまハ其偏痛を治す  
又葱と新鮮牛酪と搗き交せたら者を痔痛につけて  
乍ら痛を和らく又葱の蜜と加し搗き交せたら者ハ

狂犬の咬いし復の良薬とし 自註あり曰これ屢 又これ

雞の脂と和し、驗しつゝ法なり 八面部の諸班点を除き去るなり

酒或ハ水多て煮、酒或ハ水多て煮 八樹子油以加へ搗き

交せ再ハ煮く軟膏となし、産婦腹痛寧痛 梅子産

て陳痛し をたすすも 瘰癧の下も貼りて効あり又これ

を酒或ハ百合油を以て武火多て煮腫瘍をし、を酒或ハ百合油を以て武火多て煮 腫瘍をし

きハ能く膿熟せしむ又葱白の心を取り真空間の

里更加し桐椽汁を和し、或ハ テリダト

解毒の方本條 を填め別々同し葱皮二片をあて其

口以塞き、口以塞き 此を熱灰の中多て煨まし能く透徹

そををうくし取り出し其汁を絞り取り疫癘を

患る者も飲しや温々も覆ふく發汗せしむ

こし用ひし能く汗を取らふとありハ疫毒必ず此 發散

方せも雙いなり簡便良法なり

培養ふの法

紅白二種共も種を蒔きほけぶなり皆自ら滋生す

一所より多く種をおろすところを多く次第うくまく一よ  
よおろりく一方より緻めて其上よ土を覆ふへ生  
出て後其苗こみ合おとすハこれをおくせんなる一と  
くく生へ揃つるを見ハ足めてうく土中よ踏みこむ  
應一かくのうくこれハ根太りて益く長大よな  
るなり

此物根よ紫色淡白色の三種有り味ハ皆何れも同  
又色よよりて其類を異よ一性を分つるこれハ予

輩辨せざる所なりハ本草類は譲りて論せ

て其但色よ三種ありて代りふのこ

外の菜類の早く生して葱と共よ食料となつて

呂たよハ葛苴杯の類を同一畝よ交へ蒔くも

然れども肥へたる土を擇ひくた葱斗りを間を程

よくくまうして蒔くはあつて代りふのこ

おろす指の長よ生長一より時別の一町植へ換

ゆ一自作よ曰我邦よりハ外より 伊斯把泥亞國の苗  
へこのものまはせたるなり

ハ右ソノソノ指の長さも生へのいたる時別の高さの間  
一尺程もなして一、直一、うく手入れをなす一  
うくの如くそれハ大も生長して根の回り小盆を  
も至るとあり葉枯れて乾き根十分も太りたるを  
見ハ大小の差別なる皆是を引抜き直も其畝も積  
み重箱置きて三四日の間乾して後湿気なく風の  
よく通る處も持ち行き一所より貯る也一  
種を取らんと思ふ葱ハ其根の大いなるものを擇み

置き寒氣ゆらみて後能く土こしらいて少しも砂  
石の交りさう肥一、うも土も植ゆ一、これを植ゆらるハ  
畦の間、五六寸宛隔て深く植ゆ也一葉漸く生  
莖のひ其頭も種実を結ふなり、其実全く充つこ  
し頭重くなりて莖ハこもり弱さ故も動もそれ  
ハ風も吹き倒され其種熟するまで能はず或ハ土も  
伏して腐るまであり依り畦のまわりも垣を為し  
て是を助け防く也一又ハ其傍も漆木をたて

別りて貯  
るは是  
自然に落  
たり種子ハ

四五株つゝ結いつけて其害を防ぐよよ〜 莖枯も種  
穀<sup>殻</sup>に<sup>き</sup>内より種子見られ出する時ハ其<sup>実</sup>の熟せら  
なり其時莖を切り種殻を采り綿布を排つゝ乾  
そ〜それよりしそ<sup>も</sup>を揉みて種子を出すが但自  
ら落つゝら種子あられ其揉み落〜ら種子は最も  
上品とせられなり又揉みても其種子をなれ落ち  
ふらものハ強てこ<sup>れ</sup>を落せ〜らなく其種殻を編  
〜て一連と〜ら火を焚く所の上まかけ置〜

如此して後よもみ落〜らものハ其種愈能く出來ら  
なり扱賣買の種子より偽物甚〜多〜必を買求  
め〜して自作のものを取りて種蒔の料と  
た〜ら〜

此種の好悪を鑑定せらハ種子を撮磁碗に入し  
水<sup>を</sup>れ暫くの間熱灰の上より種<sup>置</sup>〜ら〜好子種子な  
れハ必を割<sup>開</sup>〜ら〜これ<sup>を</sup>捨つ〜

葱をてうゴウ止 調理の名茶碗 を製らる法

葱白を水多て煮て軟らるなりたる時其汁を去り

磁器に移し火爐のかけ新鮮牛酪食塩胡椒肉荳蔻莢

和蘭「ブーリイ」とふ を加し徐く蒸煮をなす能く

肉荳蔻の合皮なり を加し酢を加しあらしなす

煮し を見て少しく酢を加し を加し味なり

サラード を製らるの法

葱漬壺に入れ煮る又ハ熱灰の根柔くする

油塩酢の三味を合せし汁をかけ

又少く胡椒を加し佳し又牛酪の酢を加

し汁をかくし鹿肉羊の肉の「ゴウゴウ」

前々 を入れてハ甚しうろし を加し子エル止の

名本條 を煮合すも良し又大口魚を煮し汁を入れ

煮食ふ最も旨し右二法の食料何れも外皮を剥

き去る及ハ其 を煮てうろし を加し淡白色の葱

ハ赤色の をのうろし を加し其味の美なり

あつた大の勝小り

按てらる葱の功能ハ和漢よて二れきて用ひ來りし  
方法極めて多し右より所ハ又それらとハ異な  
るとの少ういひあつれハうらうらと撰ひ取りて試  
用ひなれば必を効しあつても多ううし人能くこれ  
を讀みて考へ合をへし

調理法のことハ彼と此とハ風土のちういあもハ大よ  
異なり右の法ハ皆取り用ひるはるる也且作り

る養いといふとも亦同一葱ハ此方よて古來仕るれ  
る仕るるもいふるも説くの法を取り用るも及  
るるべきもや但功能の所を考へ試しめ申すなり

生植部卷之一畢



厚生  
新編 生植部卷之二

ア、ルドアツペレン

培ひ養ふ法 二法

食料の製する法

味のよく製する法

餅の製する法

粉の製する法 二法

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

焼酎の製法

ア、ルドアール、扉ス、ウケン

食物の製法

ア、ルドアツケルス

培い養小法

食物の製法

蕨菜

ア、ルドアマシ、デレシ

食料の製法

楊梅

落葉松茸

附 櫟茸

厚生  
新編 生植部 卷之二

奉

台命

和蘭譯官 馬場佐十郎譯  
仙臺醫員 大槻玄澤校

ア、ルドアワペレン  
ソラリニユム・左ベロ  
名く梅も即我方の番薯なり其據後ふ詳をも  
ア、ルドアワペレン  
ハ直幹ふも草の根

なり其形圓く肌ハ平滑なり外皮ハ淡紅なり  
ありハ赤きものあり内の色ハ白く大サハ甚く不同  
あり其形雞卵の如く一ニて草根の内此物の如く  
く滋生ふとのなり且其作は小も甚易く一つの  
根を植つて百根を得或ハ百五十倍と云ふことあり  
む土の性を擇りむことも能く盛ふ生長も假令穀類  
を種つてハ絶つて生ぜざる瘠地といつてもこれを  
ゆれハ其根よく長肩ふも但し肥土といつても沙交ら  
ざる所と白土の地とハよく生ずる多し皆菜園の  
作まじり

此ものハ原外國より來たり即ち凡そ百年以前  
より亞墨利加洲よりして佛郎察國より渡りしものなり  
諸厄利亞國より傳へ又夫より獨逸都國並に和蘭より  
來り漸くむらさきなり此諸國ハ皆よく滋生す但し  
寒氣よハ堪ざるものなり  
此根赤白の二種有り色の白きもの味ハ佳く且能く

生を養ふ色赤きとのハ肥大なるものより水氣多く  
生を養ふ足らずそれ故に我邦多しハこまを  
植者稀しなり

梅々此形状用法を以て察するに全く甘藷カニショ或

番薯のふと一應帝亞諸島の中甘藷を以て酒を

醸す諸地多しといふ事を聞ゆり甚しこれと似

たり然も「ド、ニユース」といふ人の本草の圖説

を攷む甘藷の圖有り其名を「バタス」と名け又

ア、ルド、アル存スコツケン又「アルテイスコツケン・オ

ンドル・テ・アルド」等の名あり 其書を載せり「アルド

地腎なりこれとハ其名  
同くして物ハ異なる也 即ち次條「アルド・アル存スコツ

ケン」の説有り然るに其説く所ハ甘藷のふとくあり

そして未だ詳ならずとの也右本草の書ハ古書

なり此書ハ近作なりハ名と物とハ古今の相違

有る事ありあらん又「ヒブ子ル」といふ人の書は百余

年来亞墨利加洲の字露國より移し來り「アルド

アツペレシといふ物有りこ見也是ハ地賢のことよハ  
あつても即ち爰といふ物からん是等を以て考ふる  
よ爰よふとのハ全く甘諸ふるべし再考を期すべし

培ひ養ふ法

此作もやふ二法有り其中第二法のうを良しとし  
然もとも人々の意を任せて何事も取用ゆへ  
故に二法ともよ左の記せり

第一法先秋季よ其田地を耕し糞米を土中よ

ぬり交へ其まゝ置きて冬を過し寒氣漸く消ゆる  
頃よ至らば再其地を耕しして種を下を飽し  
其仕うとハ兩人よてふも也先つ一人ハ鋤を取りてふな  
いりり彼方へ一道の溝をたつ一人ハ其跡よけわく其  
入りたる溝の通りへ間三四尺け離して種根を一つ  
挿し飽し其鋤を取らしとのハ又此方へ立ち戻り其  
こと所の種根よ土を覆ふく彼方へ行きく一畦を為  
そなり又其次の畦も次第あかくのこくして其一

面の畠へ植へ終らざりしをれうりして後ハ猶鋤を以て土の塊を碎き平らうりしをて後ハ猶鋤を

此植たる畠外の雜草生へ多し時ハ能く拔き去るべし嫩苗萌生せしむる至らハ亦能く氣を以て若しその萌生を押へ妨る雜草ありハこれを除きて其苗を手あて少し引きあげ地へ又皆五六寸も生長せハ鋤きて其根をもちあげ其廻りよ

土を盛りて其苗の隠くまて見しむ程よとてかくのこころをれハ葉の勢をむくれを根の勢を得く能く肥らざりぬこれを植しむ畦とてとの間よハ菘或ハブールボレン豆の類本條を添ひを添ひ植るも可なり

第二法右の第一法よりハ手易し又却て利益有り其仕しむるも左の如し其法ハ前年麥を蒔き刈りて尚其舊根あり畠を植るもよ其地を植ると思ひ先づそのま

あつて春の餘寒去りて暖氣催しし時其畝  
を鋤まりし工を平坦なるに置く處に板周り八  
九寸じりの杭の一端を尖し其畝は二三尺は  
間を隔て其杭を深さ三四寸斗りて穴をあけ  
夫より其穴の内を種實を埋むるに其間あた  
穴の大小を因り種ハ一ツよても二ツよても入ま  
なり 自註より曰此仕りよて種ゆり種實ハ小なる程をよ  
しさい大なるものハ幾つよても切り断ち分けて  
植ふは是亦 此れをいして後其上頭をふやどし  
ゆく育つよめ也

斗をとりしよて其隠る程の土を覆ひ其上を平  
らになすべし但し此杭の代りよ鋤を用ふもよし  
大に便利なり

此畝の中へ菘或豆を添へ植ふもよし若し此  
二種の内何まよても植添ふと思ひし右のごとく  
先ツ「アルドアップレン」を段々植へ其五箇所目  
よあたふ所らとよこれ紙夾み種ゆへし其より  
よハ是も亦穴をあけ苗を入き土紙うけ其上よ



こやーを布き又其上を土ふりて覆ふへー右のこ  
こくろすこきハ「ア、ルドアツペレ」に勿論間々く  
小夾植へる豆菘の類もよく小盛よ繁生を  
さたり

七月の初り又夫より早くても其年の時候の宜し  
從ひて其葉を切り去るへー根花を生へ苔をも  
ちたりハ地を五寸ふりて其以上の莖ハこと  
ごとく切り除くへー如新をとりて根よく長育

れ利益有り入の成りて其の功を以て  
此切り取りて莖と葉ハ別々貯て飼畜置く所  
の牛の食料とるを極へて最初ハ牛これを食べ  
て毎朝他の食物を與へずして只これのみを與へ時  
ハ自然に食ひ馴るるとのなり牛常々これを食を  
れハ乳汁の脂氣を増せこと常々四倍より程まで  
さたり 故に牛乳ハ即ち酪な  
て平日要用の品なり 故に右れ莖葉ハ一時よ  
切り取りて毎日牛の食する程漸く採り

用ゆ色し

此物ハ秋の末寒氣の催と前々至らハことく堀り  
出と一甚ハ寒氣を嫌ハその故冬の間ハ箱ハ  
納り藁を覆ふ野ハ置く色し

田野ハ生るるの果實多しといへとも穀類ハ代ハ用  
ひく食糧とるす色しもの少し然るも此物ハ今時  
ハ諸國ハ作く専ら日用の食料とるす也尤此物の性  
至るく冷し人ハ生を養い其味も亦頗る佳なり故

亦卑賤の者の餓を凌ぐのみならず富家有徳の人も  
尚ハ水を食するなりよつて食料の一つハ充く又且  
これを以て獸畜ハ飼ひ養ふハ足らなり  
レ井シと名くハ河邊ハ「ビスドム・スピルス」と云ふ地  
有り其處ハてハ此物を用ひて牛ハ飼ふ其ハ水ハ  
喰ひ馴ししハこの物ハ切り藁と草の根根の  
葉とを交せ合せ熱湯を注ぎ入まかり合せ喰ふし  
これを「シイテ」と名く牛ハこれを食ふとハ出る所の

乳汁多く且脂氣多しこの故も好き牛酪を多く製  
し得るなり又枯草の内も此物を加へ牛を飼へば數日  
を經せしむれば肥大なり又豚を飼く肥すも此物を煮  
て與ふべし必ず其驗あり即ち此糞もそのまゝ麥  
の糠を少し加へ泥の如くまろくしこれより食物を洗  
ひたる雑水を投みてよく洗ゆめ深き槽もく一盛宛  
食ハし又ハ右のこく泥もなすくも此物もその  
六分の一程小麦の粗末を加へ焼餅となす食物の洗ひる  
がりの雑水もてまろくと煮く火を下し大根手を入りか  
き程も冷して喰ししべし此等を與へて飼ひ養いたる  
豚ハ甚だ肥つてられを食ふも味至て旨く殆んど穀類も  
て飼いたるが如し

又此物鷹馬其外の鳥類を飼ひ養ふ事も用ゐるなり但し  
鷹と馬ハ生のまゝ與へて飼へば其外の鳥類も煮くも  
そのを與ふべし但し煮たるものも麥の粉少し加へ泥と  
なす雑の類を飼ひ養へば其鳥の肉軟まると液汁多

くふるなり又「カルクレー」按此方よりを肥うんとせば  
カラクレー鳥なり  
右のことく泥をこめて、そのものを細き棒のこくを作り  
其咽中を差こみ飼ふ。自然なうんちの多し  
有る

右数件載るる所の作は、並ふ此物の功用あること皆我邦  
の人實驗する所を取り又、蘇亦齊亞國の學校にて著せ  
る所の書中も載るる所を采用せしむる。是書中も、種  
あるれを用ひ、実を驗するに欲する事、減多く載るる

その有り

食料の製する法

此「アツペル」フリユクト一名種を製して食  
物とむむ塩煤をして此目魚サバ、梭魚、其外  
塩藏の魚類、共を合して食す。味は甚  
よし。又塩を以てふし、多量のものも牛酪、し  
白芥子、末と混合せ、酢を加へ、解き、たぶ  
汁をかけ、食すれば、味は甚よし。これハ

價もいやーき製法ふれハ貧賤の人能く  
如此して食物といふ又これを塩めてはし  
るさる置き膳ハ樹子油と酢とをか  
胡椒を加へるハ持齋の時を食し  
て味悪し々らぬものなり又これを輪  
切をして「アルネスコツク」本條に見  
代へて「パステイル」又「ラゴウド」こぶ  
調理を加へ煮て食し一其汁濃く出

来りふり 調理法本  
條の詳也

味をうく製する法は此物皮を去り水よてぶつと燂て輪切  
しこなる錫の鉢或ハ磁盆よ手らよ排へ  
其上よ細よ割きたら葱を好りかけ又  
其上よ始のふとく此輪切をのせあつる又割  
葱代好りかけ又なごうくの如く互むらり  
いよ積て盆中よ満るよ至り其上よ牛酪肉蓋

荳蔻胡椒食塩等を見計を加へ蓋を覆ひ火  
爐ののけ微火を以て徐々とし軟らうまなうまで  
煮て食を甚し其美きらと言ふ池々しく但し  
此調理ハ宜くして饜くとのふり

餅の製り法

皮を剥き軟らうま蒸し白ふ入れ水を加へて搗き  
塊りのふき様なる別々小麦粉の程福たるのを等  
分ふ加へ又一所を搗き合せて餅となすをれり平

常用の蒸餅を作ら如く蒸やにかりて食をれハ味至る  
よく且生を養ふ者なり

粉の製り法

此物皮をむくす其まゝ水に浸し一晝夜置き取り出  
し皮を去り又水に浸し置くと一時余ふして薑擦り  
て擦るゝ又ハ白ふて能く搗き水を入まこれに澆し出  
し暫く静め置く一しよく其底を沈着たらし上清を  
去りて新らし清水に攪せ又静め置く如斯幾

○ 別の器  
に清水を貯  
け置き其水  
をいれしむ

度ひもろし其上りみみの濁らざしとくく澄きく  
まて水飛をべしいよくすみきりたるハ其上清を徐  
ふ傾け去りほくし其沈底し所の物を日よあて晒  
らすり又ハ弱き火の竈よ入ましく漸く焙乾をへし  
かくそれハ粉のかしまりたるものを得るなり扱此塊  
を碎きて粉こらふハ是を薄き皮袋よ入ましく小槌を  
以て打ち細羅よかけく篩よこれよて上粉出来るなり  
即ち此粉を以て種々の寒具を製るを極し其味ひもよ  
ろし

又法

此白色の品を取て能く洗ひ其皮を薄く剥き壺の  
内よ清水を貯し置き其内よこれに薑擦り擦り  
不洩し其壺相應よ不洩し入ましく其水をうきよ  
口よ一度水飛して不潔の物をよく除き去りて不  
よく能く沈底するをろくと其上清を去り棉布よて  
これを濾し再しこれを鉢の内よ絞り出して其精

細なる所を取りて微火にて乾せば潔白の粉を得るなりこれハ食用なる一又寒具を製するの用とならば但前法多て製するなり其品亦甚く其紋の絞リ渣ハ雜或ハ其外の生類の餅とあるなり

按此法葛粉を製する法に似たり近來本邦多て其茸薯くわを夥く製し甚くこれと相似たり

### 焼酎の製する法

此物を多く取り軟らるる煮て泥の如くすべし水を加へて薄き粥の如く小解し又これを暫時煮て静め置く居それより蒸露罐多て穀類を以て焼酎をむくが如くして其精汁を得る一即ち是も焼酎なり

ア、ルト・アルテサスコウケン

一名ア、ルト・アルテサスコウケン・オンドル・デア、ルト

又ア、ルト・ペ  
レニコ名く

此物ハ「ソニ子ブルーム」  
の條下にも「ソニ子ブルーム」にて結節をあり  
根ある草なりとふ名も見やらなり  
此物ハ向日葵なり外は同名も見や何  
きるるもヤド、ユース「本草の説釋名  
の一種類なり



莖ハ高く五六尺餘々出て花と葉の形状共カ「ソニ子ブル  
トハ似て稍く小なり但我邦々々ハ花を開くと稀  
なり根ハ大抵拳の大小ありて數節ありて其内  
凸凹をなせり其節より鬚根を生し又其末より石  
拳のとき根を生して次第より合ふ其形より「ア  
ルドアップレニ」似たり取るとく食物とするなり

此品今ハ専ら歐羅巴洲ハ生むる一草なり但し其始  
めハ今より百年餘の昔亞墨利加洲の拓拿太並ハ未  
及泥耳等の諸國より此洲中より移し來たり右の  
諸國ハ暖地なり故常に盛に繁茂し此地方嚴寒の時  
候はりしは枯る事なり

按るアルドアップレハ草の名ド、  
ユース「本草の圖を見らる朝鮮のさみの類なり  
其名義ハ即ち土中ハ塊根を生むるせんあざ  
みソソクンが如く一名「アルチンスコツケニオニデルデ  
ア、ルデ」ハてせんあざみとして土中ハ塊根を

生さるゝとのといふんが如し又の名アルドベ  
 レニハエ中梨子といふの義なり此物ド、ミス  
 の本草圖説を按さるゝ此名を記すとのハ甘藷と  
 見也一名をトバタ然れども左の説く所のとのハ今  
 見ら所の甘藷の形状あり其所も辨さるゝが  
 如く却て前條ハアルドアツペレニハ形を用し甘  
 藷も似たり唯本草の圖と此書の説く所疑ある  
 思ふ名に説と古今の差ひ有る事もや後の精考と  
 待つとのなり

此作りてふ至く容易なり春秋の中より小根一つ  
 又一片の根を菜圃の間を隔てて一尺つゝを隔て、挿  
 へし、後ハ植へ換へ又其餘の手入をなす  
 ぬも及ばず自ら繁茂増生して數年枯る事なし  
 此れを冬中の食料に貯んせは秋の内より其根を  
 取り取りし尤土凍らさしハ堀り取りも及ば  
 ず其まゝおきて用る時毎に堀り出さし

食物の製法

皮を去り清らうの洗いゆき程に切り牛酪胡椒肉

荳蔻枝前々見ゆ等を加へ肉汁按る牛の煮肉汁なりの内よ入

れ煮て食ふへー又鹿の生肉に共々煮食ふも其

味甚しく世間まで蕪又ア・ルドアワペレニより

ハ此品を以て上食とせ又あれを「アル屏スコツク」

朝鮮あざみの類の如く製し食ふ時ハ其味甚しく美く

て其品と似たりこの故も又これを「アルドアル」

屏スコツク」と名く但其性水氣の多きもの故性良ふ

食物小い物に然も肉荳蔻枝或ハ胡椒の類を

加へ食むる時ハ僅々其害を防ぐ也

ア・ルド・アワケルス 一名ア・ルドモイセニ又「モイロ

旬語イテ「ラテ井リス」ペシユンキユリス「ユリチ」

リス又「インテル」ジュス「ユジス」又「ホリオリ」ス「オハ

リブ」ス「名く又「書」ラテ井リス又「ベロ」シユス又

カマ」ハク「ニユス」又「ガラ」ニス「テル」ラ」の名有り

按「ド」ニ「ス」の本草書も未だ此

名を得ず或ハ土蘭兒ハ充ラ者あり夫  
當否を知らず且テハ説ク形状とも合  
せず故ハ羅甸の數名等も姑ク右の如ク  
詳記して他日の再考を期す

此草ハラシガレーヘンテラテイリス

按ハウイラテニラ  
テ井リスハ名

者ハ山黎豆なり「ラシガレー」ハ  
シテラテ井リスハ再考を期す

長山ハ一ノノ圓ク其端ハ尾ハ似ル細長ク根有リ

故ハ「ラシガレー」アルド・モイセン  
土蘭の又「モイセン」

ツトヌテールテン  
莖の附たる鼠シノの義なり

大抵拇指の如ク外色ハ墨ク内ハ白ク和蘭

國佛郎察國の中所ハ砂文りの地ハ生す又殊ハ「ゲルゲンラ

シド」の諸地並ハ「エトレキト」及ハ「オーフルエ井セル」以

和蘭七州の内  
乃地名なり

の田野ハ多く生すこの諸地ハハ人皆

雜草の如ク踏み潰れ故長生セズ一年限

ヨテ枯ルナリ但此草其生ハハ所を他ハ移  
植スことあり必キ枯ルナリ

此物佳品食料の一つなり其製しつゝものハ其味ハ  
栗ハ異なり事なり且能く身の養ひこゝろ但執滞  
の性ありことハ亦栗と同一

秋の中葉の枯る頃田夫等此根を掘り取りて和蘭  
フリースランド<sup>セ州</sup>の<sup>一</sup>其餘の諸州へと送りて弘く賣  
買せり箱ハ砂を入れ其内ハ納り用心して貯へ  
置くハ此ハ冬中も貯ふべし

### 培ひ養ふ法

此れを別ハ培ひ養ふ者稀なり若し此れを作ら  
ん<sup>と</sup>せば春秋の中ハ其根を取りて田圃ハ一尺程  
け<sup>く</sup>間タを隔て指三本の幅だけの深さの穴をほり  
植込じ<sup>し</sup>ハ<sup>し</sup>此れをて<sup>て</sup>ゆく增長をふたり砂地ハ植  
水ハ最も<sup>し</sup>ゆく繁茂せりなり

### 食物ハ製する法

湯を沸し其内ハ塩少し投ま<sup>し</sup>此物ニツ三ツは入れ  
但一度ハ多く入ると<sup>ハ</sup>釜底  
より<sup>り</sup>つきて硬く<sup>る</sup>故なり  
弱き火にて一時の間煮

能くもへたるハ皮をむき温るる内は冷へたる牛酪を  
少一のけて食ハ甚く美なり

疾藜 和蘭名アルドアンゲルロフ、  
羅甸語にてテイリ  
ビエリス、テルレス、テイリスと云ふ

此物ハ一年限り枯る草なり、実ハ刺有り、草花を

嗜む人ハ是ハ花壇に栽植 按ハ夏月葉間ハ五瓣の黄花  
を開く蛇含花ハ似たり云々

本草に説け  
るも合も 是を二三月の頃其種をブールイバツク

按ハ未詳苗床に  
りし種をとりぬり 一時萌生し、なると四月に至て其思

ふ所を植へ、ゆへにそを履て砂交りの地をより、按

山中ハハ生せし海濱沙地も多  
し、こゝハ我邦の説に符合す 其地ハハむよく盛る生

せりなり、拂郎察國の南部又意太里亞國西齊利

亞國の地にてハ皆自然に生るなり

按、これハ甚く略説として功能の事をとも闕け

り彼の本草の内ハ主治功能甚く多し

ア、ルドアマンデレン。

ア、ルドアマンデレニハ一名「ヘーテ・セ井ペリス」とソ

「セイペリス」按ハ莎草草三稜の一種あり羅甸語にて

「セイペリス」ラジセ・エス・エラタ」とソ草根なり形

細長く小結節あり按ハ根ハ一魁有り麥門冬の如くは

根ハ旁鬚ハ生一敷塊一稔ハ生テ大なり黒皮ありてこれを畏じ新

味形状共ハよく巴旦杏ハ似たり故に「ア、ルドアマンデ

レニ」ノ名按ハ「ア、ルド」ハ土なり「アマンデレニ」ハ巴旦杏なり東方

テ「ド、マース」の本草圖説を按ハ「ア、ステ・セイペリス」ハ「タラシ」名ニシテ

ハ「ド、マース」の本草圖説を按ハ「ア、ステ・セイペリス」ハ「タラシ」名ニシテ

寒地ニテハ新ハこれを培養スナリ然ルハ意太里

亞國西齊利亞國ハ自然ハ生を殊ハ亞弗利加洲中凡

づク暖地ニテ皆自生スナリ

これを培ひ養ふハ春時ハよキ砂の交アリ

くモウ土地を見立中間ハ五寸ほ隔て穴の深さ

三指モウりの幅なけりて植也

此草ハ原ト好んで暖國の砂地ハ生を故ハ我寒國



よてハ温暖の土地を擇ひ粘りけ有りて充實なる土地ハ  
避く處一かくのくくみんしせさるハ生せり假令生  
てし生長せさるなり秋冬よ至り霜降りたるハ土より  
掘り出し箱よ沙を入も其内よ納め貯し一別し寒  
を怖るハなり

食料の製する法

皮を去り生よて食し又煮ても用るなり性の良き  
ものよて人の養ひとあり惣して巴旦杏の如くハ製し

用ひてうーたへハ雁鳥等の腹内よ籠め煮用ひく  
甚い音ト

按よ東方の香附子ハ如斯の培養する食用あり  
こと代聞つと果して當るや否を知らず

楊梅

和蘭「アルドベシイボーム」羅  
匈語あり「アルビユス」と名く

此樹ハ意太里亞國伊斯把你亞國の山中よ産するて  
蔭の多き所よ生じ花開きて後実を結ぶ其形色共



不能く「アールドベシイ」の巻の似たり故に「アールド

ベシイ」ボーム」の名く ボームハ木なり按て実を生して形  
苗子の如く大は三四分にして圓なり

云々本草の説ケ 我邦の好事者これを園中の植ふあり或

はこもて「樞」とるす有り或ハ底に孔ある壺に土を盛て其枝

を其中に貫き置きて根の生むるを待ち宜く頃を幹よ

りこれを切り断り植付るもあは常は暖室に置き絶つて

湿り氣を興へるなりそのとくせられハ其根蔓延せり甚

く寒氣を忌む故に冬月ハ温室に貯ふべし

按て楊梅ハ庭院に多く栽せ自生ハ暖國に多く寒地

にもハ少ト云々説けるものも符合すこの全條一鉢草

略の説なり

### 落葉松耳

和蘭にて「コルゲニズワム」名く  
羅甸語にて「アガリコス」と名く

此物の落葉松の幹に生るる木耳にして其形質水

綿に似る草の類なり蘇亦齊臣テイロル・存リテン

テイシ 共々歐羅巴州の  
在るの國名なり の山中に夥しく産す其の物ハ他

の草類のことく一夜の内も生さる事なく生じて漸く  
よ長し樹の強盛なることのみを生せり老幹病木も生  
ず故も木耳を生さるハ其木必も枯るれ兆もさる事  
す此物上好の品ハ色潔白にして光澤有り軽く手も  
觸るも柔軟なり味ハ初め微甘後漸く苦く賞さる事  
氣味もハあつし

性ハ温なりして瀉下及い少くも収斂するの功有り凡  
そ身體中も甘露の所の鹹液の稀薄なるもの或ハ諸粘

液或ハ膽汁及瀝液を驅逐し又頭中或ハ肺藏胃府の内も  
汚滞する所の諸悪液を輸送驅出す此功力有る事因り

「スレイメリゲフルコウド」及び「カタルレン」  
即ち「レニキンゲン」  
なりニ症共ハ外感

内毒發動の病なり  
本條ハ詳なり  
頭中瀝甘露粘液及胸内肺中の諸粘液諸

症も專ら用ゆる藥なり細末となし早服するものハ  
一度も用ゆるもの一錢も至るを率こし煎湯となす者ハ五  
分を投じしを定法とし水或ハ茶湯も入れし煎し服し又  
葡萄酒を以て煎し用ゆるを良法とし但しこまを服

して後腹腸絞痛ハ或ハ悪心を發せらむの有り故ニ毎  
ハ薑丁子或ハ精淨酒石既ニ見  
たりの類ニこれを防ぐの物を製  
こるハ加ハ用ハ也ハ諸國の藥師ハてこれを以て丸藥  
ニ製ハ一石の諸病ニ專ラ用ヤ又他の配合劑ハ加味ハして用  
らハあり

又草木耳の類ハして「アカリキス」と呼ハれしもの有り然れ  
こハも右ハより「アカリキス」といハ全く別品なり櫟の老樹  
ハ生ハして質堅ク大ハ正ハと形ハらハ殆んど馬蹄ハの等ハ一梅

糊楸眼  
の類

此物能ク血を止スの妙藥なり世人用ハて專ラ  
これを賞シて即ちこれを打シて平圓ハ一ハ大金瘡  
ハ附貼セらるハ其出血を止シ又此物木ハ附著ハたら所をこ  
りて直ニ其金創の上ハ凡ハを脈管ハ入り送血セらるハ上ハ妥貼  
け其上を程ハふハ縛綿ハて固ク卷纏ハ極テ其功あり鍊  
連ハの外科者流各ハこれを取テ用ハひ実功ハあることを知りて  
常ニ專ラ用スなり

又此櫟耳を用ハて發火を製ス甚ニよく火の移ルとの

なり其製法ハ先ツ此木耳を暫くの間、木灰汁に浸し  
軟らぐよ至り取り出して乾し槌を以ておれ伐打ち  
たゞきて廻らうかふし火石を添ひ錮燧と摩り合はるお  
火至てよく移るなり獨乙都國までハ常にお水を用ゆ又  
此餘櫟樹の多く生とる地までハ専らこれを用いて發火伐  
製して常にお用ゆなり此發火亦能く出血を止る事甚し  
妙なり

按る彼の諸本草を按る「ロルケニハ落葉松なり」云々

ハ木瘤木耳なり我蝦夷山中産する所ふども此  
老朽し樹も木耳を生と即ち此「ロルケニボームスワム  
アカリ」なり夷言其樹を「グイ」と名く所謂落葉松を  
「エ木耳を」カルシと呼ぶこれを連稱して「グイカル  
シ」となり松前より「エ水」を「エブリ」又「トウボン  
」と稱するなり故に落葉松耳と譯し又「エング」とい  
ふ樹も亦此物を生とる耳の名ハ亦同一共にお水を用  
て枯ましんとする病木も生とるなり

廣群芳譜曰落葉松松上生白脂厚五六寸光潔似玉微軟  
而堅有用之為靴底者即此なり甲州川内領北山中あり  
富士松も附くといへり此物既も六物新志に詳す  
我邦夥く産する品なり其功用甚く多き藥品な  
り

生植部卷之二 旱地樹木山中生るる物なり

厚生新編 巧藝部卷之一 草木の製法

油水の重さを量る器

銅を化して白くする法

銀塗の粉末を製する法

吹火玉

草木を打る法

花卉又花品

重瓣の花を作ら得る法

冬月或ハ早春より早く花を咲かしむる法

冬月家内より草花を咲かしむる法

花の開きたる終を久しく貯ふる法 ニ法

色の変らざるよふ花を貯ふる法

色々更りの花を開かしむる法

大輪よりして鮮麗なる花を咲かしむる法

草木を植ふるよりしき土を製する法 ニ法

厚生  
新編

巧藝部卷之一

奉

和蘭譯官

馬場佐十郎譯

仙臺醫員

大槻玄澤 校

台命

油水の重さを量る器

和蘭アララ・メートルと  
名く量水壺と譯すべし

此器に水あらしハ油等の軽重を驗る器なり是ハ

硝子に薄く球を吹き其頸を長く引き延しその球の内

小別子小針の丸<sup>頭</sup>或ハ水銀を入<sup>頭</sup>の上頭を固済密封  
し<sup>り</sup>多<sup>り</sup>とのなり即是を油水の内小入<sup>り</sup>き<sup>り</sup>其輕重を量  
ら<sup>り</sup>なり

此小<sup>り</sup>甚<sup>し</sup>略説なり<sup>り</sup>勃<sup>し</sup>新<sup>と</sup>ふ<sup>人</sup>の

説を参<sup>り</sup>考<sup>ら</sup>小<sup>其</sup>書<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>アラ<sup>ラ</sup>メ<sup>ー</sup>トル一名五ニメー  
トル測驗清濁

器<sup>の</sup>ハ油水の輕重を量<sup>る</sup>器<sup>なり</sup>即左の圖の如<sup>く</sup>

硝子<sup>を</sup>と<sup>り</sup>製<sup>せ</sup>り<sup>い</sup>ろ<sup>の</sup>管<sup>と</sup>其<sup>上</sup>頭<sup>を</sup>固<sup>封</sup>し

其<sup>管</sup>の<sup>前</sup>面<sup>小</sup>分<sup>を</sup><sup>度</sup>と<sup>り</sup>管<sup>下</sup>の<sup>球</sup>と<sup>徑</sup>一<sup>寸</sup>程<sup>ハ</sup>

其<sup>下</sup>の<sup>小</sup>の<sup>號</sup>と<sup>小</sup>球<sup>なり</sup>其<sup>内</sup>小<sup>水</sup>銀<sup>或</sup>ハ<sup>鉛</sup>の

小<sup>丸</sup>と<sup>し</sup>入<sup>ら</sup>す<sup>一</sup>  
自註ニ曰入<sup>ま</sup>て<sup>の</sup>ら<sup>小</sup>管  
頭<sup>を</sup>を<sup>固</sup>く<sup>封</sup>せ<sup>一</sup>と備<sup>此</sup>球<sup>を</sup>油

水<sup>の中</sup>小<sup>洗</sup>ひ<sup>も</sup>ハ<sup>管</sup>ハ<sup>の</sup>つ<sup>わ</sup>り<sup>直</sup>立<sup>て</sup>其<sup>油</sup>何<sup>ら</sup>ひ<sup>ら</sup>

水<sup>の</sup>濃<sup>き</sup>と<sup>淡</sup>き<sup>ハ</sup>小<sup>を</sup>と<sup>り</sup>此<sup>器</sup>浮<sup>沈</sup>を<sup>濃</sup>く<sup>重</sup>め<sup>れ</sup>ハ

浮<sup>き</sup>淡<sup>く</sup>輕<sup>め</sup>し<sup>ら</sup>洗<sup>ひ</sup>其<sup>次</sup>第<sup>を</sup>上<sup>の</sup>分<sup>度</sup>を<sup>と</sup>り<sup>量</sup>

と<sup>知</sup>ら<sup>な</sup>り<sup>り</sup>磨<sup>ハ</sup>清<sup>水</sup>小<sup>投</sup>め<sup>れ</sup>は<sup>の</sup>號<sup>を</sup>洗<sup>ひ</sup>潮

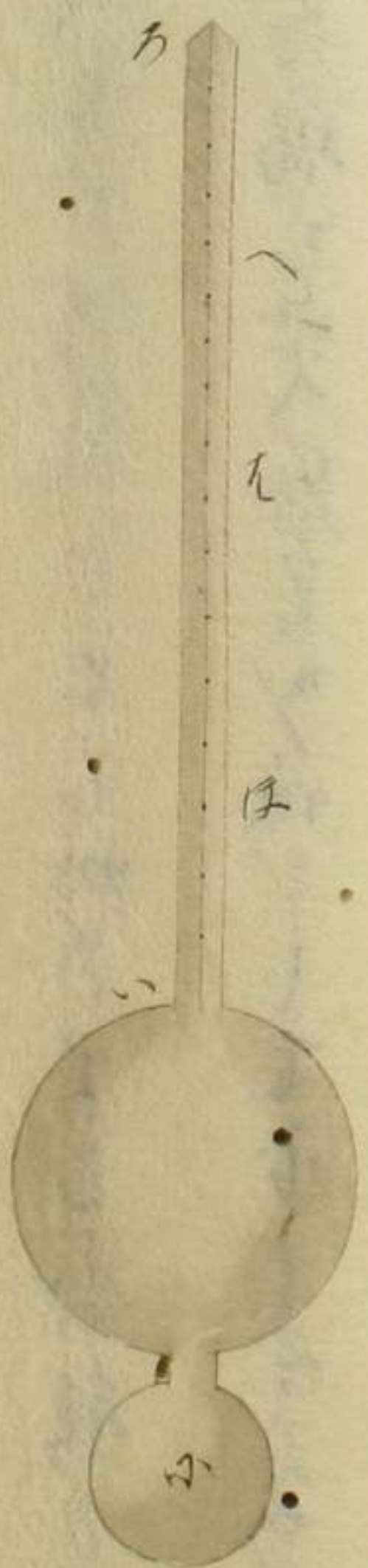
水<sup>ハ</sup>ほ<sup>う</sup>く<sup>洗</sup>ひ<sup>ハ</sup>ポ<sup>ル</sup>ト<sup>立</sup>井<sup>ニ</sup>  
酒<sup>の</sup>名<sup>本</sup>  
條<sup>を</sup>見<sup>や</sup>と<sup>ハ</sup>燒<sup>耐</sup>ハ

ろ<sup>を</sup>洗<sup>ひ</sup>べ<sup>一</sup>此<sup>類</sup>を<sup>推</sup>し<sup>く</sup>知<sup>ら</sup>る<sup>一</sup>

備ふの器も又尋常の略製なり其器もてハ唯かしの  
 水と少々の水との輕重の大略を知り分るるのとなり今  
 少く出を器ハ其製しし精密なりハ微細ハ其輕重  
 を量り知るべし

凡そ濁水或ハ葡萄酒等の如き沈むと淺し清水  
 なると從て深く沈むなり此理を以て水の善  
 悪を量り知るべし

量水壺の圖



銅を化して白くたすを法

羅甸語  $\text{ア}$   $\text{ル}$   $\text{ビ}$   $\text{シ}$   $\text{カ}$   $\text{シ}$   $\text{ヨ}$   $\text{シ}$   
 と名く和蘭語  $\text{ハ}$   $\text{ウ}$   $\text{サ}$   $\text{ッ}$   $\text{ト}$

マーキン  
 グ・と・ふ

白礬石のうい葡萄酒石

焼きて白く  
 なしむるを

乃二味を交へり

せたら物を銅と和し熔化せしめ其銅色変し白く  
 となりたり何ぞと器物を造らんこせは再し此を熔し



て其好む所のものとを鑄る處し其質、白銅に似たり

梅ふおれハ白銅の略法なり其本法ハ銅の條下不詳

不載せり

銀漆（銀）の粉末を製する法

羅甸語にてアルゲン  
エム・エシエム・トフ

錫

む純なる  
物を用也

十二錢を埒ま入も熔し又ビスエツト

亜鉛の類  
本條不詳

十二錢を加へ薄く鉄篋をとりかきよこし能く熔け

和しむらハ其埒を火より取り出して少しづぬし又

其内ハ水銀十二錢を加へ攪りよくかきまぜり又より石の

盤上ハ傾けて冷しかきむぬしよく何までも銀漆をせり

と思つ先つ雞子白

或ハ漆を用い或ハ  
焼酎を用也

ハアラビヤゴム

本條不詳  
ハ木脂の

を和したるものとをよく右ハ製せしものとを

筆をとり其との不塗るべしよく乾かむ狼の牙を以て其

上を磨琢べし此の如くすれば光澤を生し甚ハ美麗ハ

て純銀と等し木石の類ハ漆しむるとそのを見ハあらし

美好の純銀を軟く為ししられ屢試し良法なり

但一水銀多きハ能くのびて塗るハ易ししれども分  
多キハ復うろ一かき一時ハ多く製して貯つんと  
ハ右の分量も用やべし

吹火玉

羅甸語よりアラリピラと名く和蘭よりウニトコ  
ルと云ふ風球の義なり又ダムブコーゲルとも不  
霧

球の義  
なり

此も銅或は其他の金を以て製しべし其形を空虚の  
球ハ細く短き管をつく此管ハ本ト云ふ末ハ至る津

細し其末ハ小孔あり最も微小ハ針を通過  
色し備ふの球を先つ火中ハ入れ焼きて乾きし  
取  
置揚け是を水中ハ投じれし其球の中ハ籠りし  
空  
氣をくく小火勢のための小脱多れハ水がわ  
つる其内ハ  
入ると満つ此を再び火中ハ入るれハ其内の水  
露露の  
蒸發する如き状を為し且甚し風声をたし  
て次  
才ハ吹出るとハ水水中ハ雜せし空氣其火勢ハ  
温  
焼つれて發散するなり  
梅ハ赤色ハより純く其火氣  
を熾し盛るなり俗ハ此

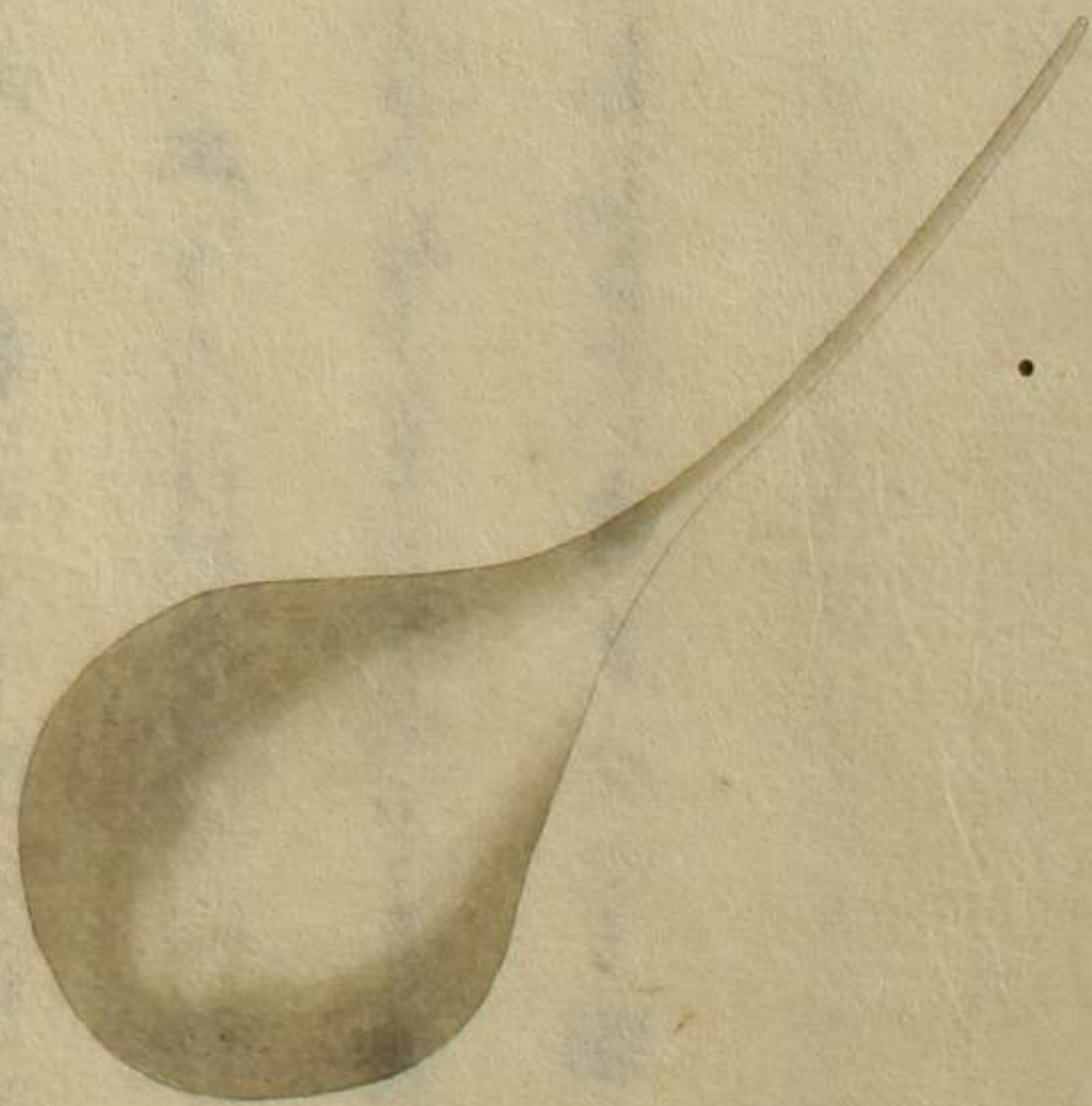
を火燭とすを祔して火を  
吹き回すを為す用なり

或人此を見て曰凡そ水液の如き流動するものハ皆風  
不化を感しと又昔時の究理家ハ此球を以て風の質並  
ふ其吹き起すの原由を説き示す不足きりといひり志  
うろふ名哲アルフ？といふ人曰く此球の中ふあはれる空  
氣を去りて水を入き満し猛火よて焼く時ハ其水  
ハ濕氣を帶ひいふ風風の如くたうりて發散を志すれ  
とも自然ふ吹き起す風とハ其理を同ふを感するものと  
なり

此球の中ふことりも多き空氣の勢ハ強きれハそ是れ  
つゝ其發する風の勢ハいよゝく烈しき亦其濕霧もい  
よゝく薄くなるとも發し出るとなり

按ふはもと俗ふ火燭を玉なれとも實は物  
理を究るの器なり効し斯の書よのせる圖を以て  
ふ出せり

吹火玉の圖



草木を打む法

和蘭よりアツ  
ロテンと名く

おもしろ標となりく草木を増益するの法なり其

法は嫩枝或ハ萌芽を切取りて先づ其本ノの所を切口小

近き節のまゝとて裂きて其裂自ハ大麦二三粒を夾み中

れを長さ四寸程も土中ニ打むべし此一法なり

又一法は土を籠に入し是を其欲する所の樹の上にお

け其枝を此土籠の内より貫き通し置くべし日を経てハ其

籠の中より其枝根を生えらるり其時枝の末を断ら

せしと思ふ所小植むべし生つるものなり但し其釣

り置く所の籠の土は乾くざるよふ常用心を用むべし

花卉又花品

和蘭アブルム又アブルム  
ムゲワスセン・とりふ

凡そと修くの生植ふ花の咲くぶるとのらなる一花を  
むくくとの或ハ花を毛むら者ハ其花の美ハ麗一ヤとの  
と又佳き芬芳つくとのと代園籬ハ養いく鼻目を怡む一  
の常ハ風雅の美觀となるとなり

花を開くの生植を三類に分てらと其一と一トたび花咲き  
終年止まるとの其二と植て一年よとて花は実を

結し其年の中ハ枯るとの其三ハ植て二年ふりて花は実の  
アてその後枯るとのなり

又其根の状を以て三種ハ分つ其一ハ鬚根の色を夫らと芽を生  
むるとのなり諸生植此類夥一其二と根ハ卵をたるとの其卵

こつハ形太して肉の如く年々其卵より新なる鬚根を出む

とのなり所謂鬱金香草ヘイアレンテン

水仙コロシイニペリヤール  
梅よ半瓊虎  
掌の類なり 百合等の如一其三

ハ結節なりて其節より生むる植物なりおも亦年々其

節うらと細鬚を生じ即ア子モ子按ふ免葵又毛茛子一輪草の類

ローゼンセイカラメン共小詳等の如し

又其生植類を三種に分つ其一ハよろ川の花草是と

葉もこじん小 其二ハ灌木是と草と木との間のもの

嬌軟なり生じて但し大きを根を多くの莖を生じ

つものなり皆是をヘーストルと云其三ハ喬木

て高く聳ゆなり此三種共小編中各其餘下小詳なり

せろろくの生植自然小皆花は實を結ぶいとも其物

おろろと其實を植つハ生せろとのり其所以種なり

左の如し第一我邦花は生植の内小其實を結ぶも

とも全く熟せろのり殊小異方暖國なり

我邦小移し植るのりハ此類多し

第二生植もとしてハ種實をうて作と育てんとなるふ

年を重ぬれハ其物生長せも亦も時りなりも花

はくらを以てなり即根小卵を為し鬱金香草

ハイアシンテン前々水仙百合等の如しハ等ハ種

実を植へてふて數年を経て後いづれに花さくもの  
なり

第三生植ふると実を種て生したるものも其花かそく実  
き或ハ花かどけく看らふも忍いさる如きり又ハ花のつく  
こと稀なる等のこといれはなり

第四又生植ふると絶く実を結はらるものあまばな  
り即ちハ重瓣の花を開く類のものなりイオオオ  
トシセケルス 詳なりとも圖を按ふ其  
実ハ落花生ふ似たり 等の如し

あまふると右の如きの類を種藝せんとせば其根葉を  
をとりぬの又卵をなすもの根或ハ結節をなす根の類なり  
ハ其根の附生らる物を分るり又ハ櫛となすべし但し前より  
りふ一年或ハ二年限りふ枯らるものハ其うく熟らる実  
をとり其物の性の從つて打開きたる處を蒔き付くじ  
或ハ苗床を蒔きてこれを植へ育つるし予これ等の諸法  
ハのウエーキニグ・デル・フランテニ 種藝と譯  
を感し の條下ふ於  
て詳し辨せり故よりハ省略を宜しく其條下を

見合らべし惣て諸草木の作りや並ふれよ付ての用意の事をも悉く載せ置れを花草類ら其條の意を養いし等の大略を附せし且十二箇月の月名を出せし條下毎小其月種植小宜しきを挙げ並ふ其法を示せしを以て略を但し好事の草履弄を危しことをもたふ記して彼を示しし

重瓣の花を作し得る法

諸花の中より重瓣なる花をを貴し者何れを以て又従来

單瓣の種實を以て重瓣の花を作し得んことを代考し思ふを以てのり然しといふ其法を得てして徒ら心を勞らしのしき今新小其簡便の法を得て爰示す此小新考なまし世に知らし人稀なり其法たよしと莖葉なる此ハ原ら此花四出なるものなれども夥しく何れの内より五六出のものなり其花の内きたら枝莖を長く長育しめて其種子を取し得べし但し其時候既小後ましく生長せし免し或は今く実を熟せしじることなることし時を



意を用ゝ其所小保護し翌年小至つて全く熟せしむる  
小手當てしかくべし小の實成取らるる小種蒔ときハ  
必し重瓣の花を育くらう或人々毎ね此法を用ひて  
試しし小一も單瓣のものなることなる也

若し此法の如くならむとつてし重瓣を生せしむ時と別の  
法を用ふ處し小亦そし小の仕りし小右のごとくして  
取て収めたる種子を用ひ満月の夜或ハ前後  
一兩夜おろしを播まき  
備其草萌生らて後他小植へつらむ時し亦満月の夜を用ひ

かくしむ時し必し重瓣の花を育くらう又若し此法を用て  
し皆單瓣の花のそ育くことあふ時とるを又隔日の夜  
ふりつて再び其草を殖らむ改め見らべし又自然小育  
きらむ所の花をそ心を用ひて見らべし一兩所の内何まじより  
重瓣のものと一二を見得ししを種て満月の夜まらつて  
種を蒔き且其生へる嫌苗を満月の時小植へらるるもの  
小ハ必し重瓣のものを生むらう其故八月を甚いよう其  
精を草花小注きあふらむものなれはかうし小らまひく

試に知る所なり諸花この例も例ふべし但し莖菜の花は人の  
甚し愛するものなり其重瓣を愛したる花も結ぶる種  
子を以て再び播種するに必ず重瓣の花を得るは世の人の  
の試に得し所なり

梅も菊花並に其餘の類數十年來漸く其品の數増すに  
も此法の如くせしなり近來石菖の異類數種あり  
各其名を分てり右の如く仕るに不出せしと云ふ  
又俗説に罌粟のいぢり石竹子は八月十五夜に播種し

翌春必ず美花を育くと云ふ其理を弁せしは本説の  
て初め今其理明らかなり此理に従ふと云ふ物も中  
より必ず中秋を待てていつの満月までも清光の  
夜に播くは何れも重瓣の奇花を作し得るの樂しき  
あり

凡單瓣の花自然に重瓣を生むるといふは時何れも不圖変  
化せるものなり其の説實に疑ふ處なき或は曰莖菜類

ゴウトラケニス 未詳本條を  
見らる 三ノルブルーメン 紫薔  
の類 類の種

子を取ておまを重瓣の花を育うと思ふ種子小鑿定の  
法有り即其重瓣なるべき種子の形ハ其粒高低出没有りて  
太く其形不具なり斯の如きものハ皆重瓣の花を育く處  
キ種子なりと云ふれども我の思ふ所ハこれを試し得られ  
其実否を論せむと人よりこまを證し驗んとするも甚  
容易なることなり

梅小單瓣ハ花の常より重瓣ハ其常を變りて生  
なりと知まハ必キ種子とわく不具なる處を或は試

知む大キ事なりとて小本説より重瓣の花ハ圖らずして  
偶々生ふとのたゞと説き

冬月或は早春亦早く花を育くは法

凡そ草木自然ニ生長して花を育くの理ハ日輪の陽氣を  
より其温熱乃氣を以て土中自然の水濕を動かし土中の  
草木を潤して上昇せしむる勢より生ずるなり此ハ時候不  
係ることハと云ふ世の人々の所見馴れし知る所なり然  
る亦又人エを以て土中の水氣の動く程其土地を温め地氣

を暖和のまゝ時ハ時なすしして早く花を咲かす結むし

じへー其法ハ「ブルイバク」又ハ「ブルイカス」或ハ「ストーク

カス」皆苗床の類本  
條々詳なりの器を造りて其土地並ハ地氣を温の置す

其内小花草を植ふなり又鉢植なりハ其終其中小置ても

よろし此法よりまじハ自然の時候より生長せし物のことなり

して又速よ大生ししやく花を咲かす實を結ぶなり園丁あ

ら小花を愛むるの徒ハ此法を以て冬月の中又早春

小花を咲く一免又ハ時なすしして味より果實を得て樂

しことせし即ち「エルペン」ハ「アミンテン」共前  
見り「タセツテ」水  
仙

の類 泊夫藍「ヨニイレス」水仙の  
一種等ハ此法を以て冬月の

中或ハ早春の甚し美麗の花を咲かしし趣なり

也此法ハ天然の氣候を人工を以て遅速して其度を得

るよふおまじることなりれハ甚し難きことなり其温暖並ハ風

の入ま加減或ハ夜中の寒氣をたぐ等のことなりわくわく

心を用ひざればなすなり暖氣の加減ハ斯のことなり工術

を以て施すといつとも猶其時を考へ日輪の温氣を假り

わくわくしるを肝要とて寒気の頃ハ別て日輪の陽氣をくく  
こもハ草木よく生長せし其上亦花をも用くはこもハなり後  
のブルイコニストの條ハ詳々載せしむ併せ見るべし

冬月家内よく草花を用くしる法

家内よく諸草芽を出したるのびて花を開くしむる事ハ近頃  
得しる法よく甚し易く一の珠法なりあしは用ゆる草と別く

卵をたし根のりく水仙 泊夫藍 五ルアヘイアニテ其前  
ハ見ゆ

コルニキム 按ハ一名十ペロセンと云圖を見ら  
るまに我よりつるさ物もよくしる の類とよくしる

とい

其法ハまじり硝子の器よく口も底も同一幅よくして木下り  
其草根の大きき從ひ又次第よく細根を出さふよく其  
細根の納る處と程の大きさの器を擇み取らば一儲又其口  
の蓋となして處よくしるをす鉛の板を取て此を圓く切て其  
中心も小孔を穿し一しれ卵根を載らるの孔なりよ  
くし其孔の大きき根の大ききより少く小くをべし若し  
又根小くして器大なりば其蓋も二三孔を穿ちて其上

ふ二三根を載とべし斯の如く皆其蓋の上より載せ置きて

養ふなり又近頃ハ硝子エもよくブルーム・ガラス花壺の義後  
ハ圖を出せ

稱して賣ふものありしれ此用を以て造るもの物にして

其形下太く口の方ハ小なり故亦右ありし如き鉛の蓋を製し

別ハ此蓋を設けけりも及もなるを此「ブルームカ

ラス」を得るとすハ外も用意よと及も唯其器の中ハ清

き雨水り又ハ清水を湛へ其上口ハ根を載せ但し其水の分  
量ハ載せざる

根の底の浸り  
程ハ入り居し而してこれを室内の爐邊り或ハ火爐の傍

に置く應し斯の如くする時と數日を經ると新し

細根を生し上ハ葉を生し次第ハ生長し終る目前ハ花

を多くを見ら莫し其たのしきい居るは但しこれよ

少しく心を用ゆ應しと仰り第一ハ其水のつり次第

不減とらとのなきハ時と復加ふ應し

第二ハ七日め毎も其水を新し入も更由他し惣て其水の

色変りもるを見ハ必ず直しこれを改じ應し急ることなる

れ然らざれば開く所の花と根と腐るなり

第三ハ爐或ハ火爐ハ火を入きたる時其火邊を少しく  
遠く居し水温るほど小至れハ亦根と葉と腐るれなり

第四ハ根の水ハ浸りたる處ハ粘り代生し汚れたるやふ  
を見せらるしゆハ直し水れを鳥羽の類を以てそら

と拂ひ取り其細根の間をくくをまきらうふなをくくし  
れハ心を用ひてれをまき腐るなり

第五ハ晴天より暖なる日ハ日陽ハ出らば此自然の  
暖氣を假らとせし生長もや花も熟しゆく義ありし

用くなり右の如く心を用ゆれば家の内より時々  
と花を咲せ入のたのみなり

又右の如く水を盛て器の上ハ載せし根を「スト

クカス本條ハ見ヨ火室の内ハ納きてしと花を完るべし

又速し葉も花も生せしとて右器の中ハ消石を加ふ  
のりりしれも水れハ取て用ゆべし水れを加ふ時  
を却て害をなむことなり

前より法をとて花を咲しむしハ其根の勢ハ弱くな

りて精氣衰へ再び葉を生せしむ一其水中より生ししむ  
葉のうい細根を切て去て地へ植われバ又うく生育し  
新よ小き卵根を生し葉ふたなり

ケレキキとつふ人の著せし生植のこと体説するを  
書あり其中を見る小右小所謂「フルナムガラス」の圖  
ありをなもらしれを左よ模寫して附を

花壺の圖  
フルナムガラス



花の開きたる修を久しく野ふる法

其法ハ晴天を擇ひ其花のいよこ満実せざる内よ其梗と  
共小心を用ひ花のいよこをいよこふよ切て取りしれを  
壺よ納め置き其上よ酒や又ハ水よ塩を合したるに  
の液注入し花のわくを程ふらふししれをいよこして其壺



の口を「ガラス」

梅は勝脱なり家猪羊の物を用や彼を封じらるるハ必しこれを用や至る固密

ちよとのふ

をこて蓋ふ又ハ紙をけけ氣の泄もさるる

小小堅くわゆる是を濕氣なき風のよく透る處

置くべし後用やること何をしてよきを取て出た時ハ假令

少しもても指多くはまみ出たことなれば必箸子を以て

夾て出し其餘も又始のごとく封し置く處し其取て

出し多し花ハ清水よく能く洗い淨や遠火よて炙し

と乾しべし

### 又法

先づ木の板よく箱を造り大さく其好し小任せ其内

と「フリ」キ

梅は鉄と錫を鍍したる物なり持度の洵丈藍的

可なり  
の延板をよく張りよく乾し置くべし備河砂

又ハ「トインサント」

梅は「トインサント」

と取てこれ

水よく幾度と洗い其砂粒も固着もろし其外のものを

よくよく落してそれを日向よ干し又ハ火よ炙り

少しも水氣なきよふに乾し篩をこして右の箱の

内より高さ三寸をうらと入る池へ借ふの内より其貯んとをみ花

の梗のふを一つくくさるなり

自註ふ曰くを所の瓦石の砂を花  
輪の觸ま當らうり様ふ心を用也

其

貯んとをみ花を少くもて水氣のうらうらハ悪く故に晴天

の日中ふ断と取らる日中ふを日輪うら雨露の氣を吸上

る花全く乾きてゆれはなりむ其花ハいつ満開せし

るをより一と以又唯今綻ひたるを直に切るとりたるは

満開したる花を又ハ采ひく一雨日を經るその花取りと貯

ふまハ花辨皆落らく其空しくなるはハなりむうら

浅木より切取るときと又別してゆれを砂ふふを

よ其花のうら梗を強く押して傷けさるふふ小心を用也

庭へゆれ肝要の一事なり但し「五ルプ」前ふの花と中心より

直立したる葉のりて其底より種子のり心をつめて是を切

ると去る而して後法の如く箱の内よりふを

右の如く切取りたる花を砂よけし終つたるハ又前の

乾きたる同一砂を漏斗より入し其花と花とのるふを落

し梗とを小砂の中よりかき出さる幕のふを至らむ其上

一面の砂をかけ花かくしても尚其上の厚は一寸とかけ置  
し居し斯の如くなう終りぬは是を<sup>濕</sup>氣なき室の中  
の大壇の居へ置く居しむられし觸れぬらるるふふ心を  
用也べし若し又箱小なるは花数多くはとことなうれ又  
此箱と長きも過らば妨げな幅を必を狭きをうと何  
となくハ其幅の狭きとのより其両側を火氣よく通すれ  
ハなり

又花の小なるもの代少し許り貯んとするは右の箱  
の代は小礪の器を用て  
又右の箱より花を取し出るとは花辦も砂のほきならむ  
徐よ是を振り落し又ハ拂ひ落すべし又水よく洗ひ落  
してはもう其花のなうことなまあり

此余尚花をたくりするの法ありあれを見んことを欲せむ  
ヘルラリウス並に「ヨルセボス・モニテス」として二士の著書  
ありこれを讀んで其法を從小居し

梅よ此方より花を塩梅の肉よりして貯る類なり



青緑を保つゆゑ木の葉を添へて頭髮を挿るといふ其の

美麗にして生花を敷くのみ即冬の花頭の一事原名

トルボウグ 其の乾きしむる花を聚め束縛し巧に造る時ハ

殊く美麗なるものなりと高貴の婦女子ハ冬此花をかき

或は衣服の飾とて人々これを以て故時よりして其の

花頭一本の價「五カト」といふも銀貨按我當時の金貨一枚

を換ふことあり

按は異國の婦女子ハ頭髮の芳香ありて鮮麗なる生花

を挿る簪とて一般の習俗なりと見ゆ故に

此の設けありしは

色かきしむるの花を開く法

昔より青黄赤緑黒等の内より定むる色の花を以て

その小新の色変じし花を咲かしむる法を載せし書藉甚

し多し其法を曰其欲する色の水を作し其内を種子を浸

置さく蔕きしむる又ハ其水を其草木に澆き加ふる時ハ

必し其欲する色の花を生じしといふ其れ杜撰妄説の

甚しきものなり其餘花は自然の香を以てしるすとの法  
有り共よしれを試るも更も其驗なり故に略して載せし  
原と其花色の變らるる中なる自然の濕氣變化を以て  
りつゝなることと其理人智の及ぶ所を以てされ又人  
巧の成を以てしるすことなり然るも漸く考つて驗しし  
圓らるる一色の花を駁文花とす或ハ緋縷の花を以て  
しるすことハ發明せしれハ別しるすも莖菜を施す其  
法ハ莖菜ハ嫩菜を植る土の内よ羊の糞の旧く腐りしもの

如く化し其色の一分を交つて植むべし此の如くして植む  
るも其ハ赤色ハ浅青蓮ハ唯一色の花を以てしるす麗しき緑  
縷の花と咲くべし又駁文の花を以てしるすハ莖  
菜の地よりしるすもの又ハ鉢植もてし花の冝くんとする  
前よ水より羊糞を以てしれを其草を度く澆すく其  
其花駁文を以てしるす一説よしれよ鳩屎を用むるをよ

花を愛する者ハ「マルペシ」の一種「パクエツテニ」  
末と名る花

の淡し浅青蓮色なるものも美しき色の駁文を生せしめ  
又とせハ駁文を以て花後ハ其駁消つて一色となつしとの  
ハ再ハ其駁を生せしむるの法を知れ其法ハ少く石灰末  
を和し多量土ハ灰を少く交へ置きしれハ其卵根を植へ  
なり但しハれハ用る土ハ以前ハ腐己たる羊糞を交へたる  
ものを取るハ其餘の肥へ過たる土を用ふことを忌む也

一本の草木ハ諸色の花を育うハ程ふハ一本  
の莖幹を以て置きて別ハ好むる色の花を育くハ木

枝を接くハ種ハ大ハ薔薇の類ハ程ふハ幹を擇ハ

置き七八月の間ハ其好む色の花を育くハ枝をききて

ハれハ接くハ種ハ大ハ薔薇の類ハ程ふハ幹を擇ハ

ハ「ダマスストロース」  
共ハ薔薇  
玫瑰の類  
を以て用ふ

大輪ハ鮮麗なる花を育うハ法

凡そ草花の早く生ハ速ハ花をむかハ其土地ハ墮小

とくハ人の知る所なり又土を多量と脆くして濕

氣ハ程よくつりて塊りなきとよくハ是亦易し

ことなり然れども此の土と人の見る所は同  
様よく自ら草花の勢ひを添へ榮へ生せしむる氣の多少  
はるごとけり是を鑒定する事ハ世人のいふに知らざる所なり  
草を養ひ花を育ししむるの氣ハ土中の塩氣なり此塩  
氣ハ土の土ハ多くわづこの土ハ少く其所より自然  
の多少あり故に其性氣ある土ハ草木を植ふ時ハ必茂  
生るるなり然れども其土地を撰むことをよくしむ

唯右の理を以て土を製する法を得たり此製する

土ハ草木を植ふ時ハ必其草木繁茂し鮮美なり大  
輪の花を育くこと、實小人目を驚かすを以て此土ハ  
草木ハ又ハ戰<sup>獸</sup>畜を以て腐と化して土とならざることを  
用ゆ其ゆへハこれ等の化せしむる土の内より自然と草木を  
養育するに精微の四元行の氣を合ふるが故なり梅  
草木獸畜より自ら土氣水氣火氣  
空氣等、具有するを以てなり又尚其土ハ勢を加ふと  
せば馬糞或ハ羊屎の土ハ化しゆることを其土ハ加ふ  
愈し殊に其功驗あり



又砂地を好く生ひる草木の類ハ其性々従つて砂と見計ひ右の化せし土と交へ合ひし

石の法も従ひて草木を植ふ時ハ甚く繁茂し鮮美にしてむ大輪なる花を用く

○転し捨て  
なす草或ハ  
自ら腐壞  
する草木  
或ハ

此故小功者なる種藝家並に愛花の好事者ハ恒に怠ることなく年々草木の落葉或ハ葉の類或ハ食料野菜の枯葉又ハ嫩木の細枝等其外此類の物を取りつめて積み置

て自註を曰ふれを「アラスカ」の葉或ハ「絶」ハ

庫藏の内よ貯へ置きしれを用ひ

美しき花を用ひしむるなりまけく莖太く肥し

草を腐らしむる土を最上とし必し其内よ雑草の化

たる土の交らさるるを色し殊に花咲き實熟せし雑草

の交らさるるを其故ハ若し此内よ雑草の種子交

り入る時ハ花壇や或ハ鉢やても動かし其雜草の種芽

を生じしむるなり又右の内よ古き朽木或ハ鋸屑或ハ獸畜

の血汁又其屍の腐りて土と化ししむるを交へ用ひ

若し此等の化土を得られざる時を砂山の樹木の木と  
らる落葉乃朽ちく土となるともそのを取て用ひくも  
山を名けくウラトアルド茂山土の義こつふ但し此土を  
用ふハ別々糞養へたる土を交へく猶其勢力を加へく  
用ゆへ又左の草花を植ふるよき土の製法を示す

草木を植ふるよき土を製する法

草木化して土となるとも十分

舊く腐したる馬糞六分

同く乃牛糞四分

このいみじき園庭の肥土六分

砂 見計し

秋冬の内右の品を集りて交せ合せ積みおきて其上  
木の灰や又ハ硝石を少くめりけ其まき翌春まで  
くつし春を至ると又再び水をかけ交せ土節を  
澆し用ゆへ

又法

草木の葉化して土となすものなり又ハ、ウウトア

ルド 山中樹木の下に在る落葉  
の枯れく土とく土となすもの物 十分

舊く腐したる馬糞 六分

同く 羊糞 三分

同く 牛糞 三分

同く 鋸屑 四分

河中の古く肥へたる泥土 五分

かきまをたりの園中の肥土 五分

研 見討い

右の品々前法の如く製して用やべし右の法より従い

それくの植物よりとる糞土草葉の化土砂の類を加

減して植やべし又これより其種を蒔てしむ

一箇年の内某の月々と何の花を育つての何の種子を

園庭に種蒔を施しとふことを知らんとせば編中十二箇

月の名に條下より就て見らべし

巧藝部卷之一終

厚生  
新編

醫療法方部卷之一

刺絡

刺絡必用第一

妨害第二

應症可施諸部定處第三

瀉血分量多少第四

癆醫刺絡の臨んで須知の諸件第五

刺絡を因て或ハ誘發せらるる諸症第六  
神經毀傷第七

両頭筋の膜様部損傷第八

刺絡を因て發する諸症の治法第九

足跗刺絡の法第十

足の刺絡せしむ就きて時を發せしむ諸症第十一

右諸症療法第十二

頭首の刺す處を諸部第十三

披針セウテンの製作並に用法第十四

厚生  
新編

醫療法方部卷之一

奉

台命

馬場佐十郎譯

大槻玄澤 校

刺絡

和蘭「アードルラーテシ」一名  
ブルードラーテシルソ

刺絡ハ外科者流の專業ニナリ所即チ靜血脈の一

處或ハ二處を刺開して其血を導泄減耗するの要術なり是をも手鍊輕利を要するの法にして其還る血の脈上を就き鉞鉞を取て是を放開し血を發出せしむるなり其須知の諸件多し先づ第一ハ時日氣候を擇らんとて施すこと又是を擇むることニつあり其時日氣候を擇ぶ者ハ年毎に刺絡するを常とし身の攝養とする人あり此等ハ其及の意の欲するに任せ時を應じて施す他し然れども是を瀉するにハ第三月を佳期とし

其

自註曰此月ハ氣候温暖を得ハ施す他し若し未だ寒冷の氣行ハ

彼第三月ハ二月より三月初旬の際なり何となれば此月ハ年の中よて尤も能く

血液の運動する時候なり日ハ一天快晴を擇む時刻ハ朝を佳とし尤も身體を動作し血の運動の甚しき頃を取ら施し食後の乳糜と血液と未だ能く混和する迄なきを以て毎に早朝食前を好しといふなり  
按乳糜ハ水穀腸中より消化する者にして和蘭ゲイルと名く血を化すの元液なり又其時日氣候を擇むは尤も能く施す他しといふ者ハ心筋痛及び肺癰及び咽喉

病等の危険証明日あり刺絡せしれハ今日死に至るは殆  
しとし小程の各病ハ何時ありし施を施し蓋し刺絡  
の要三等あり第一を疎豁法といひ第二を遮防法と  
いひ第三を引導法と云ふ其疎豁法といふ者ハ血液充實  
して脈絡滿脹をゆるを疎開寛豁し其運行順利を得せし  
むる為めあり施す療法なり其遮防法といふ者ハ血液特一  
處を指して流し去るを以て其處を充溢胞脹を為さ  
し遮防逆流せしめて其他の處に傳注せしむるも免れ  
其の治法なり假令ハ左方の心脇痛なり者ハ右の臂に  
施し右方の心脇痛ハ左の臂に刺法を施す等なり其  
引導法なりとのハ血液唯一處にのみ盛り流動をゆるし  
引導して適く此を運行順流せしむる為めあり施す刺法な  
り頭痛及腦髓の痼疾を病ハ足部に於て刺絡をせし  
む若し此部を刺して功なき時ハ頸部より瀉出せ  
又経閉の婦人ハ足跗より下る處の母脈を瀉し其中尤も  
跗上高處を見はくしものを放開す是法を因て



血速に流れ下りて経閉も自ら通利をり支を得るなり

按よ「アーテリラーテニ」爰に刺絡と譯せり者ハ漢法手

の尺澤の俞を刺し足の委中の穴を瀉血せりとのよ

似て大なる異なり漢法の如く定りたる俞穴を刺すと

小いありす其刺す處を脈の管を切て開きて其管中を

流る血を泄せりとの術なり夫れ人身運行する處の血道

ハ往還の二途なり一ハ往くものなり是ハ心臓の左室よ

り起り其管内裏を循行し伏鼓搏動として進み遍體

營養せり所の脈道なり此を「スラクアムテル」と名く漢よ

所謂動脈にして人迎腕後三部足の跗陽等此なり解體

新書動脈と譯し醫 範動脈と譯せり此動脈手足五指等の端末に至るとの

他の脈管も傳注し其血をえりて還り此還る血を受る

脈を「ホルアーテル」と名く又單よ「アーテル」と呼ぶ一名を「ア

リ即ち解體新 書血脈と譯せり是已に動脈中なる在りて諸部を營養し

終る所の血を受け道ハ肌表より近く搏動なくして

逆行し終る心の右室より還るなり是膚上より見はる

所の所謂青脉浮絡なり西醫治術法中も此青脉より  
其血を外洩するの一法あり是を名付て「アーテルラー  
テ」に稱せり其前も辨せり如し當時新も此を刺  
絡法と譯し蓋此脉中の血液ハ既も動脉中を循り内外諸部  
を生養し終りて還り巡る老癩刺餘も屬する所の也  
故も血を泄し減る危き病患ありハ此脉中の血を瀉出  
せりなり前も註せり一名血脈の名ありも即ち泄し  
去る危き血の脈といふ義なり也其法彼治術諸書

も詳なり就中協し斯點虛の外科書も説く所極免て精  
審を盡せり  
其外科書ハ秋田玄白譯稿を起し題して瘍醫  
新書と名く其手術部第一刺絡篇あり茂實往  
年其篇を抄譯して假し  
ハハ刺精要と名付く 本篇此法代載せり處を見  
る唯其要を擧ぐるの約説也本邦もても近時此術世  
に傳り行れ施治せりとの多しと聞ゆれども恐く  
ハ其的要を得ずとも何んぞ殊も未だ曾て其法を  
傳へたるもの如しハ本説を讀むり如きも容易  
に領會して其術を施しかばいつる危し蘭法も從

んこら者ハ亘く先ツ内景諸説を考究一其青脉中刺

処ハ八箇の定處を預め辨明せらるある処一其八刺ハ

① 肘中 肝脉、中脉、頭脉、これ漢法の尺澤 ② 腕前 頭脉 ③

足跗 頭脉 ④ 額角顛顛 ⑤ 内背 ⑥ 頸 頭脉 ⑦ 舌下 舌下脉

⑧ 陰莖なり一本説を讀み先ツ亘く此を知て從事す

一漢法俞穴を刺して血を漏せしむるハ相違あ

る処一故ハ爰ハ其大略を附記す

刺絡必要一々標的ハ凡そ苦悶劇き諸症或ハ多血の

人及ハ膿血を蓄る等の諸變ありて某部各處の焮痛

焮腫をたす症或ハ鼻衄或ハ肺及子宮より出血を<sup>等</sup>の

諸症必此術を施す処一但一年老虛弱の人精力漸く衰

る人虚人脈緩弱或ハ搏動不同的人全體衰敗虚憊性力薄弱

の者或ハ膽汁病凡そ臟腑虚弱の人等ハ此術を施す処

此病患ありといへとも亘く意を用いて瀉血を施す稀

ハ施すを要す

肺臟の焮腫瘍及心痛脇痛の症ハ屢々刺絡するを

最要として但し一時も多く瀉血するを要すれ其多少はよ  
ろしく熟練の醫師と此を謀る也——孕婦多血の者刺絡  
す宜し——但し三四ヶ月を経るの後絶すを要す唯  
肘臂に於て刺すは宜し用心す也——

蓋し刺絡の術ハ外科に在つてハ人皆甚容易なり術中  
の一と云れども尤是れ注意を要す緊要諸術中の一法  
なり殊に肥満の人を刺すハ容易なり其靜血脈見分け  
ぬべき者あり能く心代盡す也——扱て刺絡後を施す

處の縛綿ハ宜く注意を要す——卷縛したる處の解け  
緩まざるようふも叮嚀を絶す也——其人睡眠の中縛布自  
ら解け死して出血を發し翌朝寢處に死あり——を  
見しは少くも其其他此術を施すは尚須知す也  
此諸要何れを尤も示す

刺絡必用第一

此術の最要として若ハ血刺餘る屬する者に於て  
其候ハ元々血汁の餘多なり時ハ此を以て心臟に抵當し

其自然運動の度を妨ぐ此れ其血管諸道大いに緊張あり  
故なり此れ多血漏泄の主なる處なり又血の粘濃を  
るの症亦此れ血液凝滞して漸く濃厚をなすものなり  
又熱血より壅塞を為す症も宜し此候太甚に至ると  
此ハ痛伐起し腫を發し赤色をなし壯熱を發し  
等を以て苦悶を耐へ且腠理閉塞して汗をさすを得  
さるなり宜し津唾を小便をさす其微候を辨す也  
血液の運行洪大の症或其分利少きの症或燔熱甚し症或  
血一偏のみ流利をさす或過分なる症又其病症瀉血を  
向らざる不可治との標的なる者も施すを宜し勿論な  
り又其人の年の老少或ハ男子と女人或ハ其人平常の作  
業或ハ其人稟性の動靜強弱等を預め察し斟酌して此術  
を臨むを要す又稟賦もて血の汚悪なる人ハ尤も瀉を  
るも宜し蓋し此法の要とする處ハ其病も應むるの諸  
法方を施す如し先づ初め此術もて血を瀉し而後其  
的方を處す此ハ藥効速くもして其症大患とならざる

且血行の運動も亦大劇甚なる至るをまきなり  
腦或肺及咽喉或ハ脇肋其他部諸臟等焮腫を發生せしむ  
のハ此術少くも怖き憚るまなく施す也一假令一日も三四  
度も及び且過分も瀉出すも妨げなく又其痛孔を大  
き開くも此等の症もハ憚るまなきなり

妨害第二

鬱閉より生じ多し長病の人或ハ老人又天稟虚弱の人  
又表發の手當よく治す也其の諸症又病勢既に除けし虚

憊せし人は是等ハ此術を施して妨害をなまらむ

應症可施諸部定處第三

刺す處の定處一身諸部を數ヶ處より但し各症によ  
りて此れを取るも區別あり然れども先ツ大抵肘臂に於  
てす凡そ胸病脇病小腹病或諸般熱病及往來なる諸熱  
病此餘内部の諸病もハ臂に於て施す也一又眼焮腫或ハ  
腎傷或ハ頭顱傷の險症或ハ吐血等も亦肘臂の部より  
瀉血を施す

衝逆の症或ハ頭病險重諸症ハ足部よ於て刺を施し

尤も頭病ハ頭部の定小ハ尿管を刺す可なり或ハ

肝癰及ビメラニコレーキニて其血を瀉す可也良しとい

按ハ腸脈ハ直腸を循り來る脈なり痔の病ハ此脈

管の壅塞よりなり又痔血下血といハ此脈の自

ずら裂け傷れて逆り出るなり下血休止を以て

必も脾病を生ずといハ其他の醫書も載せあり此

處方もて痔瘡愈へ下血止めて他病を生ぜしといハ

其の往々見得る處あり今此等の説も思ひ可也れ

若くは多し肝脾諸病ハ腸脈を洩すも宜しとい

いへるハ此れと符合もなり但し其肛門の中なる

直腸の腸脈を探り求めて此を瀉血するの法ハ後

の詳なり

### 瀉血分量多少第四

瀉血の分量ハ年齢と病状病症との依て是を定む小

兒と虚人との大人強壯の人の如くは瀉出す處  
ら及又同病をもて此病者よりハ彼病人よりハ多く瀉  
するは宜しと斟酌する處に症あり然れども分量ハ  
十錢より以上ハ皆大瀉血の部を加ふ

瘍醫刺絡の臨んで須知の諸件第五

刺絡の術を施すは當つて時として變害を招く處あり  
故に瘍醫よりその須知として宜く意を用ひ處に先づ  
其用心を施す處の第一ハ患者の居坐なり術を施

すは簡便なる様を居らしむ處に第二ハ其創口を  
開くこと欲する所の静血脈よく脹起して手  
觸れて辨へ易き様をなす置く處に第三ハ其部分の  
動脈と神経と見定め置く處に瘦むる人より別て心  
を用ひ見分つ處に第四ハ肥する人より肉厚き者ハ  
其脈浮起し難く容易に顯れ難くそのなり宜し  
く温めるは布巾を以て其臂内を摩擦する處に第五  
ハ血管深く肉中の沈みたる人あり是ハ臂脈の上の縛



布常式よりハ稍遠く隔て。纏ふ處ハ此れ其脈を  
能く起らして瀉血の發勢高く飛送せしむる為也  
なり第ニ六血管若し全く浮興し刺すに當つて却て  
移動して鍼を施しし者なり其游移を防ぐ為也  
ハ其浮絡の直際にて纏ふ。纏ふ處ハ其開孔を  
便なり第ニ七ハ温布を以て其臂内を摩擦すといふ  
も血管快く浮起せしむるのハ暫時其手臂を湯温  
浸せしめ第ニ八ハ腕の中指より瀉血せんと欲する時は是

反ハさし之臂九  
指此術を施  
す小當つてら

亦同し温湯に浸せしめ但し此部にて術を施  
す者ハ肘臂の上邊にて一處腕後三四指横經の上の方  
にて一處都して二處に於て縛纏ふ處ハ但し其腕  
後の縛布にて其血管能く脹るを其部の固束も能  
く調へなば肘臂上邊の縛布ハ固く纏ふハ其絡を刺  
す處と捷手より尤も鍼を持する手を伸ぶ様  
に必ず觸れ動かぬ様を其脈管を縦に刺し開く處  
ハ第ニ八瀉出し了るに多しハ直に其纏布を少し

く緩じたり此れ動脈中の血行を妨げずして新血  
従い来らしむ様をなさん為なり第十一肥人若  
其脈能く噴起し多し者も刺絡して後例の如く縛布  
を解き緩じむの時又其人肘臂を轉廻せしむ又其  
血の迸出らる間も彼是の動搖を依て其管傍の血  
皮其穿孔を掩ひ懸らしむ様を心を用ひて其  
刺絡を因て或ハ誘發せしむの諸症第六  
此諸症多くハ患者自ら慎むを急とし安らむ動

搖らるるなり發せしむる或ハ預り備へ置く應の諸  
件全く整はらるの過失あり又瘍醫其術の疎拙を  
多し依て起發せしむるなり病者其創痛の未  
愈へ合はる中も漫りも其臂を屈伸動搖せしむ  
あれハ其血液皮下に留滞して腐壞をなす膿腫も  
變り多少の疼痛を發せしものあり此症ハ其腫上を  
於て糊造の搨方を頻りに施して自ら口を開き  
出膿せしむ待つ或ハ穿破しても容易に愈む

拙工より招くの諸変症多し宜くこれを選ばし  
 其性ハ沈静ありて分別淺く其年齢ハ中等にして  
 眼力壯し其手元も錬磨ありて細心靈慮なり醫を  
 擇ぶ處一勅辨深く勇敢なる瘍醫ありこれを選  
 ばし決して誤りを受るを免るなり  
 右の如く兼備せしの上工を求めしと粗工の不錬な  
 る者も任ずるより圖らるるを動脈を誤り被り或ハ

両頭筋肉様部を致し傷る支あり扱肝脈の下底ハ  
 ハ動脈あり故に肝脈を刺さん欲する時ハ先ツ動  
 脈の所在を探索し其動脈を壓し沈めし様も縛布  
 を以て強く志めて静脈のみ能く浮き起る様も快く  
 起脹をなするハ成丈ケ臂骨内節の方をもちこれ  
 刺す處一斯くされハ誤る支あり  
 頭脈を刺す時ハ動脈を誤り刺す支ありこれ  
 ハ其所在ハ動脈の支障なげれハなり但し天稟

て動脈常度を過ぎて高く浮起し其支別な静脈  
傍在するもの何れハ頭脈といへども亦動もそれハ  
動脈も及んで誤傷するをとり宜く注意を施し  
動脈の毀傷ハ容易なるを施し其血の色鮮紅にして出  
勢極めて強猛但迸出突發の勢ハ不同をなすなり  
是を器も受て見ると時ハ紅黄の泡沫を生じ出ると  
り早く凝固するを速なりと云ふは誤り也  
動脈を誤傷する者ハ危篤の症必ず從ひ来ると雖  
とも其治法卒かゝるを得施すこと能はざるものなり傷  
醫先づ早く其刺しを創痛を見れば其傷り多  
る脈の状も依りて妙くの手當あり其血いよく射出せ  
んとするの勢あるなり又怒脹腫を發する等の症狀なき  
時ハ尚度を過して發血せしめ失氣せしむる迄に至らし  
め愈し斯る時ハ已れり自ら止む隨つて其創口  
を愈し至るなり但し是ハ時の模様も從ひ又其病  
者の性も因て見計ひ量酌を施し如何となれん

の人々或ハ長病よて虚敗せらる人等も在てハ強て發血  
せしむるを別て妊婦の時ハ必ず此法よ依らるる  
若く多く發血せしむるハ其胎子も害をなす動も  
すしハ其子を殺すに至るなり

其創口小よして其上皮穿開の痛も下底の動脈管の疵  
口も一齊よ切れず皮創と脈傷と相背する者あり如

其血皮と脈との  
間と漏れ溢れ  
脈腫と瘻と

此ハ速に其出血を止め動脈傷を愈ふ術を施す也  
否らさればなり 扱其出血を止めたるハ患者の隨意

よ仕せて久しく卧し居るとも妨げなき様よ其肘臂  
を曲けさせ尤も永く保ち耐らる程よ一臂の内部中  
央の脈を臂力手鍊の人の手よて堅く壓し其五指ハ其脈  
管の幹を為その部よ當て力を極めて壓ししむ也  
或ハ其所をトウル子多ト止血器を用て壓し止るもよ  
但し此器の用法ハ右よ云ふ如くなすハ支節切斷  
法よ施すとの別法なり而して後其創を洗い淨  
しく無病の人をして紙を唾み湿らせ再ハ此を絞

了出ー肉蓋菟の大小をむーめをなして疵の上を按住

正色ー又止血水名方有るを任せし此を紙に湿し疵の上を

貼すおれむも効ある也扱て其紙の上より小より漸

大に至る数重の按定布を以て保て置き其上より長

し縛布を以て巻纏す△其巻方ハ両側を拘りし特曲灣の所のみ壓定す居し様をなす居し

其按定中及縛布を為し多量より創口の處を中指

又ハ示指にて暫くも壓す其急慢なる様を代りく

る押し付く居し其縛布を絶えんとせし毎時人を以て

其指を創口の所より保て置し居し此ハ外科

の長さ按定巾を臂の内面をあてたり縛布を一兩篇

旋廻し緊く志先固束をり適るに至るまでハ離し

じ居し其むし其人々又ハ其他の一兩人の人をして

交り合ひして其所を二日二夜の間右の指を縛

布の上を按住し其動脈傷の所の固定をり様をなす

居し且其間拇指ハ後臂を懸け保つ居し一臂ハ屈せ居

し且其間拇指ハ後臂を懸け保り居し一臂ハ屈先てし

ヤルプむらかけの 憑らせ置く如きとのり 包し如斬して二日

二夜の間を過し多うハ縛布を解き按定巾を換

包しむも其按定巾ハ自然ニ落るを待つ包し別て右

より小唾と湿し多う紙ハ必ず強て離す変なり水

自然ニ落る迄其儘ニ置く包し已ニ自ら離れ落な

ハ新し別の按定巾を貼し始の如く縛布を解き見

る包し其時少しも出血せしハ吉兆なり又再ハ縛布

を取替へ施す包し夫よりして又第三回の縛布を二

三日の間施し置く包し第三回もて其創愈るに至

らハ別ニ治術を施す及ハす

若し第二回の縛布を換へ施し多う後ハ尚其動脈

より出血せし此症ハ右の縛布もてハ愈へさるなり宜

く光鍊の金鐵科を托して其名術を受けて愈

る

右の療法ハ小疵よりハ大創も施して殊ニ功あり

大創ハ其出る所の血動をすれハ皮と肉の間ニ溢れ

施し其終小置  
し言二夜の間  
後又其縛布

留るに因てなり又此療法ハ動脈より近く附接し  
靜脈より瀉血せし免し時より其靜脈の創口を施し  
て良し如何となれハ靜脈より刺し多る鍼頭其底より  
貫して動脈の外膜を微し誤りて此外膜を損傷を  
らふこと何れハなり此を損傷する時ハ真症の脈腫を  
發す此症亦前法の縛布を施し指頭を以て此口をお  
こし三四日の間巻き換へて其儘を置くこと都て  
前記の如くすなり

右よりハ療法功なきものハ動脈怒脹腫とな  
るものなり宜くはれハ當るの別術を施さる  
夫も動脈腫ハ真假の二症あり真症ハ血管怒脹  
をりなり假症ハ脈管より血汁漏れ出るより起るな  
り其真症なるものハ動脈の衣膜を毀傷するより  
發せ故に其血ハ本脈中より出ても其脈張りて軟腫を  
生じ指頭を以て此口を壓せハ其腫少らく陥して擧  
げ易く消せり如くなり唯指頭より撃動を



覺ゆ尤も皮色ハ變をらふことなり此脉腫の類ハ小  
枕を附着したる縛布を纏いて押壓せらるることハ  
自ら治せらるなり其假症の脉腫と云ふものハ血汁靜  
脈の内より皮と肉の間より漏れ出るより發せ如此く  
夥しく血液溢出せらるものハ險重の腫瘍となり  
其腫多くハ腋下迄及ぶものなり此脉腫の類症ハ都  
て良工の精術を依らるるハ治せらる事なり一手臂の  
外他部より發したる此諸症も皆相同し

### 神經毀傷第七

神經を毀い傷るものハ甚し危篤の症を發せ若し  
瘍醫誤て鍼を此経筋に當る時ハ鍼尖を底より壓  
し返す如く其指頭を覺るなり此れを以て鍼を  
誤り刺したる事容易に知る處に尤も此に誤り  
觸る事あれば先づ其患者痛苦を為す事諸般の刺  
戟痛を為す者よりハ殊に烈し而して後其處撃動  
して火丹毒様の症を見しハ焮腫痛をなし且劇

熱を發し神經抽掣の症を兼補發を斯の如く  
そのハ逐々死症となりんを恐る也

此症を治する其焮腫痛甚しきものハ其一方の  
尺中より數度刺絡を施す也

按此は肘臂神經  
誤傷を救ふの説也

時々血の激勢を拆くを以て能く其焮赤峻痛を和  
らく但其最初に於てハ先づ唯糊劑搨方を頻りに  
施す也此を用いて切らざる者ハ右の法に従ふ也  
尤も右の刺絡をなせし後も尚其搨方ハ施すも宜

若し其刺口膿腫の變り状ありハ愈其搨方ハ急ぐ也  
なり其方ハ軟緩和解の劑を主とし也或ハ其  
患處空塞甚しく壓迫をなして已に腐朽をなす  
也其の勢を見ハ速に寒毒脱<sup>煎</sup>の療術を施す也  
脱疽の諸症

兩頭筋の膜様部損傷第八

誤りて兩頭筋の膜様部を損傷する時ハ下唇より五  
指に至るまで痛を覺し且硬急し焮痛を發し遂に  
膿瘍となり其創痛より膿汁を出すに至る  
按此は  
頭筋ハ

脚 骨より起る兩分して肘臂より下る屈曲せしむる  
ことと主る解體新書筋圖三十五の符號を併せ考ふべしその膜様部  
の側をふなる也

此症ハ一體危き変なり此を療むるハ外よりハ軟和  
劑を用いて打搦を施し其創口ハ油脂方を塗る也  
一甚し切あるものなり此余の治法ハゴウプルマツ  
名哲の著書を見らる也

若し此症激痛甚しきものなり時ハ他の險惡の因症  
より來る劇しき諸痛を施せらる如く怖れ憚る事  
なく度々瀉血す也一是唯患處より出る所の膿水等  
を排し出すのみにてハ切らる事なり

總して肘中の脈下より位をる神経を毀し傷らるることを  
要とせば宜しし肘臂を少しく屈めしむる一斯くも  
ハ静脈と神経と相離るるを以てなり且成る文ヶ臂<sub>中</sub>の内帯  
の方より近く開孔を施し其の心得にて刺ハ神経誤傷の  
患なり

刺絡より因て發する諸症の治法第九

刺絡の中より動かしすれハ發せし諸症有り其瀉血の間  
顛眩を發せしとの有り或ハ出る所の血凝りて皮肉の間  
より留りとの有り又其開孔小き過きて凝血其孔を塞ぐ  
との有り或ハ其部の水囊水脈に屬すを毀傷すれハ  
其創口水泡を發せし或ハ刺法の度を失ふ或ハ披鍼  
の鈍きを用ちるとのハ創痛膿瘍より復し或ハ神経の支  
別を誤り刺すとの有り又ハ神経一筋其半お至ると  
て誤り断つとの有り此過を為しとのハ其臂心づ拘

急せしなり

刺絡の中より顛眩を發せしとのハ早く冷水を以て其顔面  
を湿す也又醋或ハアウ、デラレイ子方名未詳  
再考を期す及  
此他の藥精を取りて鼻より嗅せ又ハ顛顛を塗る也  
一若し又暫く顛眩失氣して復せし時ハ指を以て創  
口を押へ出血を止め横より臥しして鼻と耳とを引  
く也一又ハ掌中を強く打つ也一  
皮肉中の血凝滞するを防くは其刺し

ある脈管の開孔甚多なるは是を合閉して防く也一然るも創痕大なるは是を合閉しを得ず既に皮肉中の血凝滞し其所を刺破し直る其上より二重の按定巾の其両間の食塩を夾むるを其創口よりあけて而後纏縛す也一變して膿瘍となりたるは他なる化熟するの塌藥を用也也一

右より小泡を發するは自然に見れば自然に消除するものなり若し自愈せずはハシアパル膏を貼る也一又ハエラテラレー子前より出つ又ハ燒酎配合の金創露水方の内より按定巾を浸して按す也一小膿腫をなして自ら消するは自然のものも又右の法にて治す也一

癰急をなしたり者を治するは燒酎に薔薇油や耳巴且杏油の中を加へたりを以て頻く其瘻を塗る也一

軟化方及疏解方の糊劑搨方ハ能く硬急を柔ら  
くするものなり且く上の神經誤傷の條を併せ見  
る也

足跗刺絡の法第十

足跗の刺絡ハ前よ説きしより注意す應きしもの數件  
及ハ縛布の施し方等の外よ又瘍醫其患者を便利  
ならしむる爲にいろいろの心を用也也其法ハ患  
者をして卧榻に在らしむる又椅子の上よ倚らし

め其脚を刺絡する以前暫く湯の内よ浸し置く也  
而して其脈の能く靜定して胞脹する様を脛より跗  
上よ至るまで徐緩よ摩擦しむも固く縛布をも纏  
ふ也若し此れよても能く胞脹せずんば刺さんこ  
も前よ閑歩せしむ也其運動よりりて脈管能く  
浮み起るとのなり  
足跗に於て刺す應きし絡ハ其内側よりかゝる母脈なり  
或ハ其外側よ在るものを刺しむると何り其内側の

絡能く浮起しなす内踝の邊より傍ふて其脈を縦より刺す  
す處一然れども若し刺すより危く此を為す事容易  
なりらんハ外側なる外踝の方より在る脈を刺す處一又  
ハ脚の大跗の間より循くる脈を刺してもよし一右共より  
毎節より神経を誤らん事を思ふ處一

創口を開きて後ハ再び其足を湯中より浸す處一扱  
其縛布を解く時ハ端的よりとす又なく除く緩くと解

きしゆしゆし

其發血ハ弓を張れり如く弧形をなすし下飛逆を  
る様よりす處一斯くなさんとするよりハ瘍醫其患者  
の蹠より手を去り其脈を壓し揚げて能く浮小様より  
を處し斯くせよハ血液の稍濃き人ハ其血創口  
より凝り塞かりて直より血の出る勢を止む事可れハ  
なり

足の刺絡せしむ就きて時より發する諸症

足の刺絡よりして他の變症を發せらるるハ稀  
なり然れども患者事々甚くはるる精神定まらざる  
り或ハ瘍醫の手術不鍊又惣して何事も慎み守ら  
ざして疎忽の支ゆれば必ず諸變症を發するなり  
尤も此れらハ治し難きものなり

刺絡して後患者起立せらるるハ早きり又歩行を為さ  
るる速かなる時ハ焮腫痛を生じ其創口ハ小膿瘍  
を發せ又瘍醫誤り刺して骨膜に至らしむる時ハ

輕き焮痛を發し遂に亦小膿瘍を生じ又刺脈ハ  
傍小所の神経の支別を全く切斷せし時ハ硬急を發  
す又唯毀傷せしのみならず其創口愈へたる後  
ハ全脚痛を起し其甚しきものハ或ハ股及ハ手を  
觸る處々々程に至るべくれども神経制手抽の症  
を發せざるあり至らざるなり但或ハ拘急劇痛  
して安眠せざる事あたらず至らざるあり



足を刺して後焮腫を發し其痛強くして拘急するとのハ其創口より「ガレー」云々名哲の新製せるワスプレイステル」云々方又ハ温めたる燒酎を按定巾を浸して此を按定する也——又或ハ其焮痛硬急いふく增長せハ恐れ憚らふことなく肘中の脈を刺して屬く瀉血を施しそれより糊劑の塌方を施し用るる又「ユニオン」云々「ボロ」云々「ユム」乎「ブレイチ」云々「ステル」云々共ハ硬膏の名別ニ其方ありを用い又此餘り此の類——たる諸膏を撰り取

て貼る也——唯此疵より都て油脂の類ハ相應すとすな  
—其潰瘍となりたるもの已も治せんとするも至らむ

「ボムポレイ」云々按ては是ハ真鍮を溶化する時ハ其真鍮より出る烟の鑪壺の蓋よりハ此外ハ附着して白粉となりたる物なり或ハ官粉或ハ「ウイット」云々「ラセス」方名未詳を傳けて

乾燥せしめ——骨膜を損傷して後ハ發する焮腫及膿瘍ハ前條を載せしむる鎮痛方及い淨刷の方を用也也——又神經小支を全く切斷する時ハ難症を發するなり此症ハ「ラヘンデル」の精液草ハ燒酎を加へるものなり又ハ

此余斯の如き強烈なる精液を取りて足脛のみならず  
股に至りて擦り居しむも此症の痛を和らくる大劑  
の糊搨方を用るを良しとす

頭首の刺す處諸部第十三

頭首に於て刺絡せん欲せば毎祿の頭脈に於てす  
即ち頭の前部に在るの二脈なり但し其二支の内一支  
の太きか多を取らば一は稍大にして孔を開く  
安全よしとて又能く血走り出て且其功は  
一なり又額

の循る顛顛脈又ハ内督脈又ハ舌下在る脈を刺す  
ふとちなり

頭脈の支別を刺さんてハ綿布を以てヨエーリニク按  
まらけむしなむを作し此を縛布を用也居し

第一法右の紐を取りて項窩の正中に當て兩端を前  
方胸中骨の上より下け打ち違へ別人に持たし  
管の浮き見られ出る様より宜きほど引き締  
めたるなり 第二法ハ其紐の中程を頭脈の刺さん

その方より其紐の一端ハ前へ一端ハ後より打違ハ腋下  
より下へ爰まで程よく引き止むるもよし 第三法ハ

右の紐を低く頸の本より掛り二小巻を纏ふて項窩の竹子  
於て結ひてもよし但氣管を縛布の當ること軽くして  
其脈の能く浮き出る様をせんよし縛布の脈との間を按  
定巾を夾むるよし又呼吸を容易かりとせんよし為る其當  
る所の纏布の両端ハ人より持たして一傍より引き止  
むるよし右の諸縛法何れも其呼吸を障らざる様  
よしす極よし其れよりよりて患者甚く苦しむるよし  
此ハなり

縛布を施し其脈よく浮起しなると其孔ハ頗る大に堅  
く穿開き極よし但其血汁其脈よく漲り来らる  
るんが為め其患者を諭して舌と顎とを動かさし  
め且頭首を前後より仰伏して頻りに揺かしむるよし  
若し發血の勢弱き時ハ一小片の耳草を唾よりしむる  
よし又其瀉したる血を盃より受くるよし厚き紙を楯

の如く造り一方を創口より其内より血を通して  
孟中の導き受く處に十分は瀉出して後ハ創口上は按  
定巾を以て其上ハ呼吸を障らざる様を纏ふ所の縛布は  
心を注ぐ處に

此餘頭部の諸所並は舌下も於て刺絡をす其脈  
皆頸脈の支別なるを以て縛法亦皆右の法を用いて宜  
し然れども顛顛の動脈より瀉血する時其動脈の  
少し上の方も於て縛定を施し且其縛布は動脈の

支別との間も別は按定巾を置く處に如斯せばして  
瀉血する所の下邊り又例の如く頸に縛布を施す  
時ハ其下よりして上へ昇るの動脈なるも其升る行く  
る所の血液の運動を妨ぐる故に逆血暫時あり  
て自ら止むなり

爰に附して説き示す處に夏に若し人より刺  
絡法を施す處にその如く如斯者ハ其患者の肛  
門<sup>門</sup>を温めざる無塩の牛乳を以て能く蒸し其

肛門の縁側より水蛭六箇を附けて血を嘔せしむ  
一水蛭能く血を吸い合くんとて自ら落るるハ壺を熱  
湯を入れ一小孔を穿ちる蓋を掩ひ患者を其上  
より踏らせしむ也——此蒸湯氣を以て又血走り出さ  
ざる小孔を欲せざるハ血を瀉せしめ得也——此法ハ多  
く腹内諸臓の諸病に於て用ゆるなり

披針ラットのの製作並に用法第十四

脈を刺し貫き神経及其脈の下より位をどのを損  
傷せざる様よ口より入る者一種の披針を發明せ  
り其製ハ其両又の一偏ハ利く切る様よ作り其一片  
ハ先きの方肉中より入る處をかりを利くして  
其本の方ハ餘分ハ鈍く作らなり取用する臨みんてハ  
脈を突き貫く等の危き事なきなり故に初學未熟  
の人より此器甚も便利なり功者鍊達の人より在てハ此を  
取用せらるるハ及しはる也——

本の鈍き方ハ  
肉より入るて其  
尖を棘中より利  
し一片の利き方  
より上より向ひて  
利くはるなり此  
器より

按る右の諸説ハ刺絡大法を辨しむる輩より示せ

る要法と見ゆ依て其大體を知らざらん人不在つてハ分  
明を得るべし其志阿らん人ハ他の精詳の刺絡書并  
解剖書を併せ考らん在る也

厚生新編 醫療法方部卷之一終

厚生新編疾病部卷首附言

本編類聚大別の

命を承<sup>先</sup>首類△字の部を抄録叙述する所

の疾病部此卷可初なり病門の以て交新

可例立りたりと云ふ類唯此部中に在る所の

もの取收を以て其正例を得るは全部大別

の後細別区分を以てするなり

一 此卷の各事事りて専ら其業を興する人何

らるるを通曉するは故に和辭の法偏に倣  
と求むるを以て亦亦に倣ふ

一本條中諸病の法方和漢を以て試みるもの多し  
速に衆の示しを實踐せんもの欲する所なり  
但月方藥の如く詳に考ふる所ありものあり  
且等物産の如く暗く其人を得るは他日あり  
然し此處疾病部法説の始なりことよ整頓する

厚生  
新編 疾病部卷之一

喘息

因症方 十三條

附 山產金石諸種より多し 喘息病及瘵瘵並

より其他諸般の胸病及肺臟諸病を主し 法方

藥品

喘息病の治法を別法の法方 三二方

喘息病主系別法並に胸を強壯するに諸方

四方

喘息病食餌及補護法

咽喉腫

治方 四方

一種眼障

ホントホシゲル

バドルヘンエトリスト

不語鼻痛病

ア。ホステロム

内部の生きたアホステロムを治する方

脈張

治方 三方

痔

暗痔治方 十二方

開痔治方



新編 喉病部卷之一

奉

台命

和蘭譯官 馬場佐十郎譯  
仙臺醫員 大槻多沢校

喘息

和名 アームボルス  
并ク イトト名ク

喘息ハ呼吸短促ノ病アリトモ云クハ 喉執ト云ク

咳嗽しむ、乾咳なるもの、喘々、是肺臓の

一病なり、厄勒西亜国より古、アストマと名く、可咳嗽を考ふもの、

粘膠不索の汚液久し、肺の空洞が、その部分

血管より、是其氣管の肺臓より、

を、小枝管、道を、壅塞し、通暢快利の

程度を得ざるを、苦惱煩悶を、

此病の原因は、洋毒より、血中固有の鹹液、

と、おと解、其和合を、肺に、

鹹液、血中、混交し、可用なるもの、鹹

液の、別よ、おと解する、出の時、力を、解する、所

の、鹹液、血液と、両方を、考へ、いつ、も、尚、肺、裏に、

客在する、血の、運行、肺中、入り、小

囊、細微を、考へ、内に、推、盪、壓、迫、是、以、て

常、度の、吸、氣、強て、内に、入る、故、に、氣

息、呼、吸、甚、急、苦、悶、を、考へ、る

按、此、病の、原、因、且、等、也、此、説、に、依、り、始、り、炭

明を所りしきり 医家も在り 治療の一利を得  
きりしきり ありしきり 彼立りし 醫法は且  
内景実測の理を弁じしを徹底の曉解を得  
しきりしきり 夫和蘭の医法は先頃の人身天  
賦の外固有の諸物は熟視しきり 実確審定  
しきりしきり 此れ解剖科を医法の本源と  
しきりしきり 苟も医を考むる者其常道の知る  
べき常理を變じし 故疾患の起因症候を診察し

しきりしきり 法處劑を論及しきり 右喘息の病  
因も肺臟の内象は悉く氣道小管と其端末  
小囊附着しきり 皆大氣相通するの空洞結構に  
しきり 本質を考しきり 又一身運營する血中の恒  
に鹹液を混合する等の常理を辨しきり 右の  
究理説も茫然たりし 宜く解體状況を讀み  
識得しきり 又所謂鹹液といふ体外の漏泄する  
所の汗と尿即此なり 其精理は 小管を

此病シニキケンゲン 外邪病本條より詳しき(宇晋)既  
に病を冒其傷冷毒と譯す

よく蕩し或は老人或は胸圍狭迫し或は又造者其毒  
をく稟性の人々をさるゝ遠く治さるる

此症時うつまの蕩作し又節系時令の變は在

或は惡滋暴卒し或は新よ肺の脈絡中よ侵入

或は時系冷湿の候よ遇し此

毒自く血中より解し或は特よ此處よ聚る

或は過酒通飲し或は依て其毒の散漫流濕

或は來るも或は此等よさるゝこの喘息病の蕩

ゆのを皆其よ瞬息の間よ命絶えんと却り

のよのよ

此症は實よ甚危険の病し或は或は或は死に至

るものあり蓋又他の呼吸短促し或は艱難し

諸症この喘息病と誤り認るゝ

或は并究るゝ九肝病子宮病等並り

の邊傍及び他の部よ或は或は又或腫病

或は肺臓の硬腫及潰瘍或は腐爛に至るの諸  
症は短促疾息の状を見れば是皆其毒自  
胸肋間の固着するに依るなりと所より直ぐ其症  
候の別因なるを詳察し其喘息病なりと見誤  
るるをこれ等らの諸病は其症に應ずるの方法に  
處してこれを救治す

右の如く老人の此症を治すに救ふに  
さるものなりを慎て刺絡法を施すべし但し

症痔疾壅閉より發起し絡は刺すに癰腫痛  
の症要する所の心はあり或は熱を解すに  
症候より刺絡し其妨げあり其它にこれに禁ん  
ぬ

此症女子の發するに稀なり其症のありとい  
はるる男子より治し易し月經を塞ぎ其を  
しるる症は足部より瀉血す又壯年の女性  
症に患るものには其發するに母より刺絡を施すべし

按々脚脛上の母脈より刺 且兼之 盧會落葉  
絡條下より採りて

折身或は大葉を以て製し之を酒下の丸薬を

用その蕩滌を以て即夜合ふ又臥多臨て用之朝

服するも亦可なり但隔日とせよ此の二れは服

るふいじアへニキ 未詳ヘンニキハ葉クワリジアを  
名詳クワリ人々再考を期す

六錢 ホームハリーレン 羅田 ホレ井ホレウム 赤オホ  
一名コロッポウラレル・又ヘー

ルフリスト又エンゲルスリート老標の根又根生れ  
標生れは良品と云ふ因に按々俗々コリのセウガと

呼ぶもの 煎汁一碗を用て吞下し又別は水鏡洋

肛方を施す

按々水鏡注肛方ハ水鏡を用て蜜劑を肛門に

り注射するなり 蜜煎導の法に似て是

外術を以て下利を求るの良便法なり 社中にて

試用して毎々実績を経るものなり 和蘭キリス

テールとり今新に訪して水鏡注肛方と云ふ下

これに倣ふ 病を治すなり  
方種々あり

其方ハ老雞一箇の煮肉汁盧會末四錢常用油四

ホルトガレノ

匙約五々々 食塩一握 蜜十六分を共々合和し 肛門より

就て注射をす 若し此新法を用ふに及ぶるもの

い尋常蜜十六分を溶し 其内を酢あり四十八分は

和し 右法のおとく 施すも佳なり 枯る酢水各半

果酢あり 酢の辛味を去つ果 酢を代用し 其の猶佳なり

毎晨興起の後 直々嗅法を用ふ 其法は 火酔

菜の自然汁を取り 接骨木葉の自然汁を加へ 肉

苺菘を磨し 其末をとり たる者五分を加へ 鼻より

嗅込す 又時々の星亜加 一方本條より 其法は

ルフトコロイト 固を搗み 五粒入り 第三中程ハ 山茱

栗粉あり 一碗を以て 送下す 或ハ 篤耨香 俗呼て

ンテイナ 四角ハ 雞卵一箇を和合し たるものにて

用ふ 且毎晩 清涼湯を用ゆ 和菜「クールダラ

と云本條 又硃砂一錢 トインケルス 過 藍菜の類 手 再考を期

製方 犢牛肺各八錢 洎夫 藍六 釐 陸右各 細末

多量ハ 蜜水四十八錢の内に入て 化解し 朝夕西

度を与ふ

患者大煩渴するものハ砂糖をか許かへたる大麥

の煎湯を与ふ也

和茶、ドロップ、  
ハニスト、トホウ

トレとソの製法本條の詳を、船来のものを口中の  
俗まズボウト又タニキリと呼ぶを

含ませむつゝ又別々左の藥汁を与ふ

藥一握をとり中を包こ小囊のかゝり白葡萄

葡萄酒を盛りたる硝子罈の内をこれをかき、葉

を出し置きこれを半盞花二時方を置、顯服

此症熱勢烈く候ものハ必擊劑を與ふ

左の方の用つゝを良知

一箇肥大潔白を、細く剉し新鮮牛

酪十六錢ハ糖十二を雜る、葉一箇を合

煮、うぶと半時々の患者を、毎服肉苳菴大を與

ふ

又大麥湯二十四錢ハ糖四錢細末洎夫藍八釐

強和句の病者ハ微し水を與ふ



患者甚了、急迫——煩悶甚——至て危篤

思ゆる者、<sup>肺</sup>胃部の部伍に於て打泡法を施

す

楯へ打泡法、<sup>二</sup>芫菁等の葉を貼し、<sup>一</sup>水

を起し、<sup>二</sup>此の法よりこれ等葉を漏らすの療

法より、<sup>二</sup>和茶、<sup>一</sup>水、<sup>二</sup>ホニタ子ルレシ、<sup>一</sup>又井

ツトレと、<sup>二</sup>是亦社中、<sup>一</sup>と経験、<sup>二</sup>所

又肩及股に於て吸玉碗の法に於て、<sup>二</sup>楯

所謂前法より、<sup>二</sup>又外部は、<sup>一</sup>皮膚上を強く

叩き、<sup>二</sup>又手足に於て打泡法を施し、<sup>一</sup>又

此痰症を尋常通治の方法より、<sup>二</sup>乳香、<sup>一</sup>省

ツ、<sup>二</sup>胎の名、<sup>一</sup>蘇合香、<sup>二</sup>生硫黄、<sup>一</sup>各一錢、<sup>二</sup>細末と

ち、<sup>二</sup>雞子黄と、<sup>一</sup>篤摺者、<sup>二</sup>一をを以て、<sup>一</sup>和勻し、<sup>二</sup>捏て

泥とち、<sup>二</sup>是を小棒頭、<sup>一</sup>に粘着し、<sup>二</sup>火を點し、

又煙氣を病者の口より、<sup>二</sup>薑吃せし、<sup>一</sup>又左の

飲料を作し、<sup>二</sup>飲し、<sup>一</sup>又上、<sup>二</sup>葡萄酒、<sup>一</sup>四百八十

錢蜜百二十四錢鼻煙

和菓・スノイロクハコ本條  
十  
の詳々なりかぎにをこり

二を打碎ききりるホームハーレン前より二十錢土木  
出つ

香心を抜き去り量いよの宜き適し右共酒中浸

あと八日而後イホカラス囊

桂酒を濾し袋の名  
又厚  
又取る詳々

き錦布を用て濾しこれを硝子壺に納きその

口を密塞し收貯し服するに臨て毎服六を四

十八を以て限量とす又一良方有り煙鼻葉二十

四錢を二百四十を以て炭葉し其半を減し

火のりし過し其内を沙糖九を以て投し

再煮て舍利別の如くすセロリ糖製  
の法本條を詳々

服法、此もの八を以て蜜水一杯を以て送下す

サアレ井紫蘇  
の類煙草、口より嘔吐を妨るし必煙

董、さうり強烈の食料及生肉を食ふこと

を禁止を冷飲の飲し且一度より多飲し

ハッ

ホッリホウト或云  
ハッ喘息病の殊切りの奇薬

各煎しその朝夕一盃を服用す

右法は皆東医のよき供用せし所の考し  
忘る事なきを証し用かちを功  
験もあつたきや

附 山産金石諸種ありその喘息病及癆瘵  
並ふその他諸般の胸病及肺臓諸病を至る

諸良方藥品

スピロスガラスを合む所の丹砂より取り硫黄

スカラスレベルコロ  
トホ條より出つ 服量三釐強より一分強を至

紅モツペン一名キリの油 外用しその良き

拵よモツペンレキリンケルトレ共よ「ゲハツケニス  
テリン」と注り「ゲハツケニス」テリン尾磚を

未詳再考を期す

フルームハンスワフル 硫黄を製しその取り所の精  
華本條より得り

服量 自一分六釐強至五分強

丹砂及銀朱  
ベルクロイト フルミューン

全 自三釐強至二分強

硃砂を加へて鋼鉄をテネキ左ールの製法を為  
しきり者

全 自一滴至二十滴

正ナヲロスピミアリス 水銀の條の製  
法を詳しき

全 自三釐強至二分弱

硫黄のマガステリウムの製を為し者 製法別

全 自九釐強至三分弱

硫黄拔<sup>バル</sup>尔<sup>ル</sup>撒<sup>セ</sup>摩<sup>ム</sup> 其方を條  
り出さ

全 自一滴至六滴

喘息病を治する別法の仕方

此痰吐を取て治するの療法は存ん<sup>ウフアラート</sup> 一種の

舍利別を作する此方<sup>パールカラーウ</sup> 煙草<sup>上</sup> 款冬<sup>冬</sup>の生

綿葉等分を取り水を以て煮三分の二を減<sup>ス</sup>

る至して沙糖を加へ和<sup>ス</sup>る法の<sup>ニ</sup> 舍利別の度

を得こ収を借用し毎日二三匙 約五分ハ多ク  
を服せしむ

性寸弱の製しき。膽礬油 有名スートゲマリック  
條の詳 及ア子イブ油 面香 等分テ許滴を付す

ポツクホウト皮 成云 を取り粗末しきしハ四百八

十八錢を以て其者し可色赤葡萄酒の如く

至らしき十五日より廿日に至る間服せしむ

物

白葡萄酒を壓し汁をとぎ絞りと法の如く

清し物八錢と膽礬糖 本條より 一錢をかつ

和勻し每一錢白葡萄酒を以て服せ

箱加里亜 名 胆礬糖焼て風日も晒し所となりし

物を又兩よりセ ヨサラ 六箇月或ハ一ケ年

迄を其色白く其をこの物一錢を以て一服 五六

并に盛 の 水の内多浸置し一晝夜濾し其法

の〜〜服法

百露地 拔尔撒摩

本條より

十滴或は十五滴 泡卵

ユテクワ

黄一箇をかく様せ白一多の煮内汁の内に入用

也多の食料を食何多も佳り

此拔尔撒摩より赤痢を治し又諸熱を解す但

後で塞より因よりより不即り又諸液腐敗より

因より腎痛

本條参考

或は諸壞液より来る所入

皆並上系或は胃中の不熟を調和しより消導

を助け食味を進美し或は子宮諸病を治し一錢死一

月の回用也或は諸結石の生れを防ぎ又よれ久

服されを女紅を保つる老

喘息の毒後湯より薑八錢をとり沸泉或は湯水

五筋を以て煮て一筋より至りて煎煮し砂糖一匙

約約 蜜一錢をかくる糖糖二多水水用也

又

サリイ草名 前出 乾しより煮る水糖末各

十六後共の和し白蒲枕石の中を投し壺に入違茶  
とて半時中を以て湯を流し或は晝或は臨所を二七  
約する  
の八系 服用せし

又方

地黄十六錢小麦一握ワールワールテルリア、ンセ名地蜜三十二錢  
を二百八十八錢を以て煮三分の二は減りるに至り  
而後丸の舍利別を以て加ふる也  
又方ハハ  
糖末三十二錢を取て鎔り糖末ハハスワー糖末三十二錢を加

へ大の上をて其釜中を攪勻旋廻し速くこれに銅  
盆を傾き入ししりて堅塊を考し赤銅  
の如くは化して物尚ある温く内り打碎き六箇  
の雞子白に如一掬口白へりて綿布を包み土坑中  
に懸置し其下の白く茶色の油滴りおれ  
くは油二錢を取て前の小麦湯百九十二錢の内よ  
加へ服用せし

又方

ウイットニスコロイト アリマツウ一名 一錢を取り、薄

紙酒を以て煮て、軟柔に至るまで、煮而後、是を

取り出し、又別の酒に注ぎ、根をも酒中に浸し

て、あとい枚、又薬酒を新く温服せし、若し人濃

厚より、欲せし、可侵し、根に徐く、紋り、用

せし、根を、一錢を以て、率と、久服せし、は、系、狂

躁、譫、妄の、症、多、く、亦、中、あり

又、此、の、多、く、製、する、別、法、あり、ウイットニスコロイト 前

見ゆアリ 二錢を取り、上好白蒲、紙酒中に浸し、

一、二、三、次、毎、服、一、匙 約、二、三、分、を、与、ふ、一、日、一、回、粘、痰

を、消、解、し、秘、結、を、便、ち、亦、他、症、の、法、湯、も、是、用

也、又、此、酒、半、匙 約、二、三、分、を、与、ふ、一、日、一、回、粘、痰 を、取、り、て、條、の、法、方、割、多、用

その、吐、け、求、む、く、河、下、也

喘息病之系列法並に胸を強打し

法方

上好硫黄二百八十八粒をとり、新しき 強打し、壺に入也



熱湯ヒールカチン四百錢を入き火々上せ者方々々四半小時徐々

よ又上湯を傾り出〜又別々熱湯を加へ考て前

の〜く〜る〜十度或は十二回々々々最後々々々

又あ糸を徐々傾り除きて硫黄を取出〜

是を乾ききき〜淨壺々入き帛を覆ふ〜蓋を

き〜麥餅を焼く電 松の麥餅は彼地方の茅

有り造法〜の肉々入き半時余々々〜同置

て蒸〜し〜れ〜す〜硫黄油の〜々々々々々々々

壺より取り出し〜冷〜し〜塊片は考て即これ

を取て印々入き細末〜々々〜細篩を以て篩

る〜

これを用る〜右の末を二三匙 約々々八錢より

取り陶器々入き碎り〜コーセイケル 本條は詳

五錢條を和〜二三滴の水を以て〜を煉て泥と

〜空腹の時中等の果実大を服〜又夜

食より半時前々用〜〜方製して硫臭を脱

ひらやうふらふ事を要する。

此方「喘息病」の「殊」の良効あり、その「是」  
を服せしめ、大便順利し、且「膽汁」の清澄し、  
「油」の失ゆる者、和句也。

又方

エイソップ 葉 セイラニ 葉 芥の 似たり 二五ルフトコ  
草 芥の 僅名 未詳

ロイト 前よあつ山 薺 二ト、ルニコロイト、  
葡マツムシ草

ケートル 一名ア、ルト サリ 一名レ、フ の花 二行  
ケートル 未詳

第一種をツクハ子ツク 草 各等分 共々合し 白蒲

草の一種より再考を期す

松酒中へ浸し 用ひ臨ん 可し 浸酒 一斗を 炊耐

蜜が 許合を するもの 十六 錠を加へて 又患者

一日の 数度 毎服 一匙 約五分 宛を 與ふ 一 又是

に硫黄 精 ケーストハンスワ 一滴を加へ 可し 水は

又方

魚花果 二箇 或は 三箇 焼酎 へ 浸し 毎朝 空腹 へ

時不又病者不食也...  
舍利別諸子の條下、喘息病に用ふる良中、この數  
方、参考を乞ふ。

### 喘息病人食餌及補護法

肉は宜く、液汁多きものを用ゆ。これより消化し  
易しれを乞ふ。必粗く、その堅き肉は食ふこと勿  
し。其の疾を生ずる風、腹中より蓄るるを為る者  
を止む。第一酒を忌む。霧露の中を歩むを避む。

又池澤早湿の地は居るべからず。

### 咽喉腫

和名系アマンデル  
ガス空ルと名く

アマンデルを咽喉の西傍より自より泡起を乞ふ

この名を乞ふ 梅はアマンデルを 其形よりこの核を

似き 原ト孟樵のそと 頸 キリハル 吉里兒 解

書 書 様 書 其形より左右よりこたを相聚り沸起して

此形よりなるものなり。

梅より此の飲食吞下の時より臨人より自ら滋液  
を涌せし調化を便よりしむる心主る解  
体法詳説より詳なり

時より物腫起るの病をアマンデルゲス立ルと  
名く梅よカス立ル 其病咽喉腫痛の爲し又時  
よ痰熱より起るありて成る其焮痛漸く加る  
ものも膿腫より化してありてしむるなり  
梅よ是は喉腫單に  
喉風纏喉と名る

治方

サトリイ、前より出つ紫 接骨木花各半搗水一升  
を以てその半分より煎し細篩を以て濾しこ水に焼  
酎一盞蜜が許加へてその文和し再温めて厚  
漱きて効あり

又一方

魚花果の乳汁 梅よ野羊の を以て軟よりし  
老梅片を燻らしして篩羅より濾し硝砂精 製する本  
條より得

右の一、二滴を右のくく漱く亦効なり  
梅子分量を  
欠く漱薬と  
得ずる佳きなり

野蒜を取て臼に入色搗き爛らし汁を絞り出  
その分量も適量なり燗酎を加へる少許を和し又右  
のくくあして漱く

又方

接骨木花露、車前葉、各三十二錢、葡萄、西

橘キイニゲリスト、本條の詳なり、六錢、右共を合し煎じ示す如

漱く

又方

赤色の芍薬花露、濃紅色の蜀葵花葉、握を  
一升五合、その乳汁を入き煎じ一升に至り用  
随人とこれを温め厚漱く一以症初發も在  
治方の急らう又、焮腫痛漱く其に至りて消  
散せしむる勢ありしを必、膿腫とすれども  
此の如く煮るものを三日條に至りてその焮

腫かゝるも減消するにせらるる腫痛猶甚しき  
者之を治すに其の要なるものたるは細用也  
也

カムミツル

キノコウライ又テウセンギク苗蒿  
の類より治す苦薑を仲間也  
細判

一ムスト

葵の類根碎  
厚産未詳  
各四錢胡盧巴亞麻仁

各八錢

共の搗き  
細くせ

右四味水一升を以て以て小半時

の者煮瀝るに其の煎汁を取て絶つて口中に含む

又時々其を以て煎汁を咽中に導射

又右桑渣を麥餅心と白芥子末を如く混

ちし患者耐らざる者ありし何れを以て布袋に盛

りて其の外を及ぼさる腫脹しき所を蒸すに詳

ちりしを喉膿腫の条に記すを以て考へて

ケールが不定ル

考へた

一種眼腫

雁旬アマロ  
とすと名く

アマウロシスを視神経

解剖書

の病も因りて眼

月曇暗失明と云ふは症外なり凡そ赤眼は  
若くは紅腫と云ふ更なる片の斑点を有し赤小と云ふ

瞼して視事を得ず其病因は大熱性の病患を因  
アキラリ

てその毒視神経に入りて其經筋麻痺不遂して

活潑の系脱去せしむるは症皆多く難治

と云但項首の串線法 原名セツトンの  
法を條多條なり

かしく効は足ることを云ふ 按は青盲の一病眼  
科に記す詳なり



ホニツホニゲル 病名 鹿角 あり アツパ  
五ス・カニキスと名

按はホニツを狗の角のホニゲルを飢ちる

其名義は詳なきは狗の角の食り

食ふの意を取れり云々は説所を致る不

飢胃病の如し

は症は食して亦食を好みて飽くことを知りこれ

なり其入る所の食は胃中より 神化せし直ち吐き

るの或る生のありて下は云々は患の原因は奈

この薬は甚く好ま

其の効は是胃腸の収斂甚く此の因より又この  
除三因あるは其一を苛烈の酸敗毒より起るは是  
を治するは酸液を補劑をよりこれ外他方  
あり即酒石塩の類より又二は蛇毒より生ずこれ  
より來るものを苦味の藥劑を主として又三は胃中  
大なる寒冷をより生ずるは温劑を與へ服せ  
しむ即加那里亜セッキ  
セッキを酒 或は伊期把尼亜蒲桃酒の  
の名をより



ベドルヘンエートリュスト

既旬アツペテ  
左ストと名

此のベトルヘンを腐壞の毒よりして  
廣純の意エートリュストは貪食病より  
症を食料を阻増して食ふこと欲  
病より惡食と得て了る本條を讀み

熟



アツペテ井キスル絶つて食む好む病あり又症  
 二種あるの一を石所或ハ石或ハ土可飲食服  
 しては食むの欲有り食むより厭ふこれを別名  
 としてピカと云ふ一を婦人妊娠して後三月  
 以下の食むを阻害し又却て常は食むより  
 しては欲むるものなきと此水を以て愈々懐胎の  
 候よりみづの定め得るものも又聞此症ハ痰セリ  
 妊婦あり此水或ハ小産するなり又ハ朔月あり

此病は又児ハ必症ハ痰セリ生る妊婦の形  
 マラシヤと名く  
 按ハ是所謂悪阻なり妊婦の  
 妊婦病の候も此水を得る

不語暴瘡病  
 和菜スブラカ・ロース・ハート又  
 ステムノ・ロース・ヘッドと名く  
 旬多クアホ  
 ニヤと云ふ

此暴瘡を患ふるを又不語を名する暫時の間は  
 其の病或ハ久遠失音不語する者あり其の起

因に考をこく多端あり或は癩痢かハシキング  
 前より出る冒寒傷冷 或は糸息室塞急迫或は  
 毒と移るものあり  
 胸創或ハムードルプラーク 子宮病本條 腦髓及  
 神經毀傷或は落下顔の類も卒業又此條の  
 諸病も生むるを治するを宜く  
 その類因の察して可療法を秘して随つてよう  
 愈るる也

アポステーム 和系コロトゲス空に名づく  
 大腫瘍の多あり 疥癩癰腫の  
 類あり

九疔瘍ハ膿熱せしむる多あり又臨解消散せ  
 しむるあり

内部の生むるアポステームを治する方  
 身体中又皮膚より所求を瘡口に穿きしむる部  
 分より移るものをたの糸方を製ししめてこれを消  
 散するウランドコロイト 金瘡と惣稱する糸品

の内シトルーニコロイト 未詳本條 ケルフル 洋未

世生名 巧々もの ギョルデルーテ キンクワアキノキリ

抑胡蘿蔔 三行あり 第一種をハ

地榆 宋艾 エーレンプレー ス マトラノオ 花戸トウ

テイラン と ドイセンド ギョルテコロイト 戸向センタ

呼ぶもの 再考を期し 右何進もし得易きもの 一味三十二

錢を取り 年以銀をさる 白葡萄酒 六百四十錢を

以て煮あし 九時の間 而右とれを 其患者は 毎朝

六時の時 毎一碗を 喫し 水も 飲め

煮肉汁 牛豚の肉を 飲まし 数日の 漸く

を服用し 日腫の 消ゆる 漸く 九を 斯の

腫痛 初症より 口を 閉きて 治し へきり 又

を下劑を 用むる 日膿汁を 下す 漸く 漸く 治

る 漸く 漸く 診ひて 定め 治す 下して 治

人との 病あり 右の 法は 甚良 とい

アポステリム の 療法 は 餘 數 あり 爰 略 して

スエール 胃 痛 及 フル 胃 イリ ング 痛 の 本

條々詳説し、且く参考を要す。

脈脹 赤系ア、ドル・スパットと名くア、ドルを  
血を逆行せし脈管の名即ちこの脈管  
脹の義をとり一名ア、ドル・ブレウク脈裂の義  
又一名ゲホルステ子・ア、ドル裂脈の義也

按る脈と血行の通路なりこの脈二  
途行はし心臓の左室よりあてはる搏動  
より脈をスラリ・ア、ドルと名く逆行

しこの心の右室より還るもの故ア、ドルと名く

名く是膚上より見ゆるもの所の浮絡青脈の  
脈をいふ也

病を即ち青脈の内裂をいふ外に腫脹を

この症をいふ本を按る我々の賦人成は

西腫る青脈弱弱しく胞脹し糾纏聯絡可

態見ゆる甚つるといふものなり俗にこれ

を寸白のさかりきりりといふ此等も亦は

脈脹の症なりといふ考定は病状書よ

因症法を詳載せり参考の後これを定む

惣し

此病、肌膚の上より脈條のありを以て  
或は其色を以て腫脹し或は結節の状を考ふ  
症あり或は痛を覚るものあり或は痛更なるもの  
ありは此因が別なる原つゝ所あり其血液流  
の勢力激烈の運動甚しきものあり或は逆行  
脈管の内膜を自ら破裂し其痛あり或は  
ちり又潰れる所あり西足あり或は頭顱あり

小腹或は陰囊の脈を生ずるものあり陰囊は潰れ  
を囊脈脹と名く此症然る危も至るものあり然  
バルサツプフリウク  
是とも動しを以て用ゝ大なる血を以て其  
の變り難しき甚しき危険あり故に須く療養  
施し之を預防せしむ

脈脹を治す方

明礬と蒲柳湯を以て製し其軟膏を貼す  
又スワルテスラツク  
羸の類と膳礬を以て製し

ポレグマ 製法の名本 多々作らるる膏方  
を用係も佳らる

又方

明礬 三つを煨きよ 魚膽皮 亜ゴム 梅子樹膠の

ゴムを脂膠をうアラ タラカント脂 木脂の名本條

各八錢 石共々 鍋に入き火の上で熔化し 五子イ

金銀をぬく屋 三分三厘 強鉦 白朮 五分 六厘 強

損 檀仁油を加へ 和し 勻に塗搽すなり 屢々

腫上を塗らる

又方

即羊屎 呂波 井ニボ 子ニ 未詳本條 細末と一ニ味

熱鉄を数回酢の内へ焯し 冷し 置らるる合和し

これをして患上の蒸す 一日三次 其の時々新

ものを換へ用ゆ

右等の後方を施すと 其効を能かのい

痛医を託し 其療術を以て 其知を放言

愈治まじ

茂質 病名の下を患考を附記し固より當否  
を知らざれば姑く他書の正解を待て其名を  
定むしと云ふ已の愚拙を録し後香川太  
冲行餘医言症の條を参考し云ふ曰又聞見  
輿夫急脚類是喘有紫赤色筋脈如浮絡如糾  
纏障起縦横者是人曾有苦痛至如是而  
後宿患遂愈

俗間謂即是寸白虫也那寸白虫錯下足到皮  
裏膜外被白窄緊些不能進退不得止而  
怒張帶血色也不然此乃瘀血之不凝結于陰  
囊而到于足而不動者也

と説きしもの即是云々但才論説を至ていふ  
あれ云々云々知あるに信百寸虫の  
説を云々云々取極めたり所謂症の一症瘀血  
の陰囊裏を凝結せしむる手足多到る云々

の論本説の陰囊の脈を必生せしむる所なり  
そのあふ合を以て如く追記し之を再考の料  
とす

痔 和系アムベイエン又スペー子ニ又ギユルテ  
ニ・ア、テルと名く痔旬を以て「ハモルロイテ  
ス」と  
名く

此の痛は直腸を循る  
故にアムベイエンとソノ痛は直腸を循る  
谷田所のスペーニア、テル  
此痔と云つる脈管の  
痛

壅塞時起る故に一名スペー子ニと  
是之所謂痔を以て漏れ是を名を以て  
痔及漏れを以て彼外科治術の書に  
殊に詳審に盡す

アムベイエンを直腸肛門の周囲を循る所乃  
痛脈の細支細絡  
スパーア、テル  
結節の瘻贅の瘻を以て瘻痛を為す是

を二類に分ち暗痔漏痔と名く  
ブリンテ  
ホーパ子



暗痔ハ肛門の内邊及寸近傍腫きより大なる痛きを  
為す同痔ハ此れ及して腫痛なく大便通利する  
の前後ハ炭血よりなり 按ハ痔血と云ふ 又是を内  
外二種に分つ可煖痛外部ハ在るものハ痔と名  
け煖痛内部ハ在るを内痔と名く可疼痛内  
痔ハ此總て是

此患ハ罹るもの困難苦痛より甚し可起因  
を原教ハ總て多血の人ハ生ゆ或ハ血脈辛辣

を為し或ハ「レケウルホイキグ」と云血の酷厲苛  
烈と云ふ者或ハ血行急激をり或ハ苦より炭し又  
ハ芳香辛味の烈しハ飲食ハ為して是原より  
生れ又虚會等ハ多く配合する酒下の撃  
刺を數く用ゆるより生ゆ或ハ大なる身体ハ  
勞苦し或ハ心志悩苦或ハ忿怒を起す等より勞  
倦甚し或ハ生ゆ又疼痛ハ患る人久坐し或ハ椅  
子ハ踏ゆる或ハ患者と起臥を俱ふる或ハ

或いこれに患深と云ふれども是は其人の性より  
 て必傳深き能くもあつたに重なる病を抱ける  
 者この開痔ある由より其本病露せしむる可  
 物了この病を以て苦痛あるを是より水も死  
 に至るの憂ありし但其治を得る全よの期を過して  
 瘡を急ぎ全愈する稀なり其要薬を  
 たふ録あり

暗痔の治方

第一方ケレイニゴウ空根

按ふ大小二種あり大ゴウ  
 空根自屈柔なりはよそ

ソウソク  
 ケレン

及葉共の搗爛して水時無麻仁瓜を

煎子油を浸し煮和し綿布を以て煎汁を絞る

出し是を取て塗るやう痛は和らけて治さるる

此は実験をありたる良法なり

第二方レ井ニコロイト

末 薔薇赤花多ルニコロイト

花末詳再考を取り共々細く剉し新鮮魚塩の牛

酪を和らるる又を亜麻油を浸さるる或は其油内

入を煮るゝ何きめて綿布を煮て絞る痔の上を塗るゝ

片三方葱或ハ種蒜を亜麻仁油ハ菖蒲子油を漬けて二日而後綿布を以て絞り出してこれを塗る

右三方共白鉛白灰ハ許を以て益良なり

片四方雞子白膽ハ樹子油共ハ胡椒細末牡蠣白霜を見付けハ入ハ是を傳貼せぬ極め

痛を和らるゝ

片五方牛酪桶中ハ収めて敷き物四十八錢を取り五合許の水を以て煮て其半ハ至れ

多く煎煮ハ復再ハ三合ハとの水ハ加ハ煮て亦その半分ハ至らし之而後火を下し冷して鍋底を洗

著る所の牛酪を陶器に移し収め貯へ用るハ當つて淨棉布を攤へ痔の上を貼るハ或ハ直ハ患

上を塗るても良ハ此ハ実効を取らるなり

第六方 亜麻仁油の塗漬或ハラムポオ、リイ燃油

らん 沈底の塗漬を取り右のこくく強くする亦是の

中

第七方 抱者皮和薬名キルクゆりてこの口あり

本條より 一片炭火に焼き冷し置て揉み碎き末と

あり牛酪を交和し塗りて良きなり

第八方 新羅子黄一箇白沙糖推實丸亜麻仁十二枚

右共を研勻し極細くし屢々此水を塗りし

第九方 瓊蒜ケルフル前より 各一握共を臼内へ

入水搥き爛し淨棉布を以て其汁を絞り出

魚塩牛酪胡椒大蜜羅子黄二箇を加へ研勻し棉

布に攤へ痛処を貼りし若し痔隱痛するものを

鳥羽の汁を其内に塗り容るし

第十方 陶壺の乳汁梅子酢羊の乳を納き火爐に

上を患者の垢けり持する下を足きき温乳の蒸

糸を以て其俵を蒸籠にすしより其疼痛を和し

燉熱を散らす治験を得たりを身体並に  
椅子の廻りにも衣袋を纏ふて只温乳の蒸氣  
他小湯を特りて俾のこふあたる抑ふる

第十一号 燉熱疼痛 剥レ 此考 雞卵田四錢

チツケルステ一油再考を待つ 葛籐 香の 磁石は

和レ たり者各二錢 共の 和レ 軟膏を 作りてこれを

塗る

第十二号 白蟻 牡蠣足 各等 分を 共の 合レ

火の燃し 煙を肛門に 受て置 たり一日四五

度を蒸 され功を得る事なり是 賞用と

法あり 又馬蹄の を取りて煙蒸 するも亦

同効をあり

右諸の 法は 兼て内服方 を用て是の 功あり

又特り肉菜の を服用し て治する 方あり

の如し

スペーニウアルテル根味 詳本條 四錢 細末と

温めたる麥酒又ハ他の湯汁を朝夕四度服  
まゝ又鳥賊骨の細末を朝夕二回を服せし  
良きなり

開痔の治方

馬勃を雜子白膳八樹子油サ許を以て軟膏を作  
じしを塗ると効あり又ハ鉛白霜を空井ニアセ  
イニ 蒲柳酒腐敗酸汁の内を浸せし一宿更醋  
を傾け去り鉛白をとり膳八樹子油を以て和し

白へ塗る亦効あり

杜松子酒を綿を浸し貼し良きなり又篤耨香油  
を温め塗る亦効あり

前件を舉る馬蹄屑を煙草を以て法此症を用る  
も亦同功を有る内後ハ右の二方ハ良きなり

暮 をころも系  
フライド 車前系の自然汁ニ糖を毎朝空  
腹の時四五日の間連進せし

膳 礬粉四錢を以て肝一才内小麝角塩を微し

投じ投じより従て沸上ぬるまで又沸騰の止むるまで  
投加の度とす。此液十五滴或は二十滴を車前  
草又ハ他の液汁一碗を以て服用す。これ炭灰血の  
時用すの方なり。其血止るまで吞む。血竭紅珊  
瑚ゲセルゲルデア、ルト 梅小土系の名なり代赤石  
脂一佳なりとす  
明淨明礬各一錢共々細末とす。番薇赤糖ハ  
意よ適量なり。をかね半時毎五分を服す。  
これ極めて良効ありの方なり。

阿婁養液十滴より十五滴まで毎日三四次で服用  
す。  
閉痔及爛痛痔多血より起炭したる症ハ時々刺絡  
を施して功益あり。蓋し痔より炭するの血ハ必ず  
止る。これ何れも炭するに依りて別々他  
の難症を炭するより稟受多し。血液  
を漏さん。故に此症を炭するに故なき性

多因て痔血絶年可常と云う。此等人の出血止む  
あはれを求めし炭出せしむる様うらうらと云う  
可自うら止む者此再出せしむるを血花  
果汁或をヘルケニスブロート 本系因を揃る小二  
種あり再考を期す  
汁、又ハ盧會の鎔したる者りの内を患處を擦る  
たると又盧會を内服しする酒下を取るもよし  
凡痔血の止む者毎度他の除患の病たる難病  
を業ひる者といふ依りより良医に請ひて治法を

議定する

此患を免れ又その苦痛を薄くせんことを  
第一日常行作の際と食禁を固く慎むこと  
強き塩蔵肉香料、海魚猪脂酥酪の塩強き  
並に葱或ハ桔の塩醃のもの或ハ酒此餘糸の強  
烈なる飲物を禁戒する

疾病部卷之一 畢



大宛國地記

卷之四

西域傳

大宛國

大宛國地記

大宛國地記

大宛國地記

大宛國地記

